

特集 ● わがふるさとの現代史 家守恭子 山中宮枝 桜井淳子

投稿 ● 私の「ボランティア介護」日誌 田口けい子

投稿 ● がんばれ! 職業高校 小林智枝

ワンポイント情報 ● こうして外国語をモノにした



# 農文協

東京都港区赤坂7-6-1  
電話03(585)1141(代)

●内容見本呈

日本のおコメ・  
たべものを考える

話題の書／

危険なインフルエンザ  
予防接種  
高橋 昶 著

●1200円

●体制科学の非科学性と人権侵害を暴き、父・母・教師に断固とした拒否を促す批判的書！

健康食ごはん

小室 美智世 著

☆これ一冊であなたは我が子に打たせるか？  
炊きこみごはん、雑炊、お粥、おにぎり、お茶漬など  
四季折々のおいしい食べ方を満載。●1000円

追跡コメ流通の内幕

農文協 文化部 編

☆お宅のおコメは本当にササ・「コシ」○○％？  
一般にはよくわからないコメ流通のしくみを、丹  
念に追いかけて、あるべき姿を提示！●1100円

国産小麦でパンを焼く

農文協 編

☆おいしくて安全 写真と目でプロのコツ紹介  
国産小麦粉入手法、天然酵母パンづくり、自動パン  
焼き器の紹介など資料満載実用書。●1300円

ごはんですよ

文・かこさとし 絵・中沢正人

☆たべものでからだとこころをつくる絵本  
かこさとしの たべものえほん 全10巻

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

●定価2000円  
●A4変型判・32頁

ごはんですよ

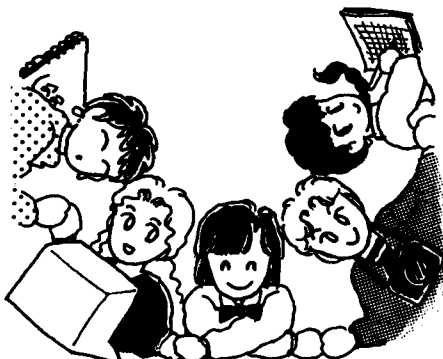
●定価2000円  
●A4変型判・32頁

自然と人間を結ぶ

11月号(特集)自然教育活動2 絵本を使った読書活動／他 ●¥250千50

●見本誌進呈 (ハガキに住所、氏名、職業を記入の上お申込み下さい)

仕事と、  
人材の、  
マーケットです。



## フリーインテリジェンス ネットワーク

フリーの編集者、校正者、翻訳家、  
デザイナーなど幅広い分野で活躍し  
ている人々が集まってネットワーク  
を組み、情報交換の場、出会いの場  
を創りました。それが「フリーイン  
テリジェンスネットワーク (略称フ  
リーネット；FIN)」です。

プロを目指す方、プロとしての可  
能性をもっと高めたい方、経済的負  
担をほとんどかけずに、満足できる  
仕事とパートナーを見つけませんか。

フリーネット事務局

〒160 東京都新宿区内藤町1番地

三洋ビル エデュカ株式会社内

☎03-352-8611 / FAX 03-352-8613

いいたい放題 したい放題

書きたい放題 よみたい放題の

投稿誌が わいふです

人間 ほんとにやりたいことは やれるもの

ウジウジ・イライラふり捨てて

思いつきりやれば 気かはれる

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二か月に一回 わいふが出来あがるのです

仕上げに適量の“ユーモア”と

“思いやり”のスパイスを!

ピリツとくるか まろやかになるか

それはあなたの“うで”次第!

# WIFE 209

## わいふ目次

表紙イラスト カステラネンコ

忙中閑あり6

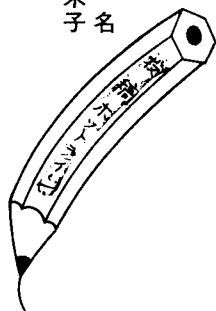
原田瑠美子さんとフラメンコ・ダンス

4

写真 佐々木恵子 文 原田静枝

対話のページ 9★

平山桂子・辻さつき・西山美沙世・匿名  
長谷川裕子・酒井智恵子・匿名・関米子



エッセイスト・クラブ 18★

藤枝まさ子・荻田一枝・椿芳子

山田さとみ

オットどっこい 29★

匿名

がんばれ！ 職業高校  
小林智枝 30

特集・わがふるさとの現代史

ふるさととは魂のよりどころ 36

家守恭子

故郷の螢は消えた 40

山中宮枝

子供たちと赤マント 45

桜井淳子

職場は多面体 50★

匿名





# 私の「ボランティア介護」日誌

52

うちの悪ガキ 60★  
たかのように

ワンポイント情報 62★

こうして語学をモノにした  
志賀壽美子・服部深雪・畑世津子・島村雅子

マジの発言 69★

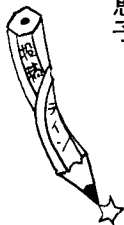
細野清美・小川文子・田中睦子・呉恵子  
岡村和代・岩田和子・麻生ゆり

連載 6

八路軍とともに 84

法村香音子

ファミリー・イン・ブルー 100★  
坂爪千草・入間田礼子



親のホンネ 106★  
吉崎玲子・坂下晶子・高橋理恵

生きてます活字人間 112★

和田好子・田中喜美子・原田静枝  
野本美希子・早川裕子

ひとつしかない人生を 116  
山本良子

わいわいがやがや 126★

富永柳枝・たまき久美・島山徹子・原眞智子  
沢讀良・中野由美子・鶴見みつゑ・加藤君子  
若木菊枝・匿名・本山美智子・佐藤玲子  
村田玲子

サークルだより 68 情報コーナー 104

ほん 124 特集テーマ原稿募集 141

投稿規定 142 編集だより 144

★印は  
投稿ホットライン  
のページです！

# 忙中閑あり

⑥

私のホビー

—原田瑠美子さんとフラメンコ・ダンス—

写真・佐々木恵子  
文・原田 静枝





スタジオ“アモール・デ・リオス”にて（東京・世田谷）

鈴木真澄先生（右）とのレッスン

二冊の本を、現役教師からの問題提起と出版した原田さん（私立東横学園中・高理科担当）の楽しみはフラメンコダンス。三歳から習い、十六歳で名取りとなった日本舞踊も好きだけど、もっと『私』を表現できる、と二十九歳でこの道に。

フラメンコは私にとって  
『人生の清涼剤』なの

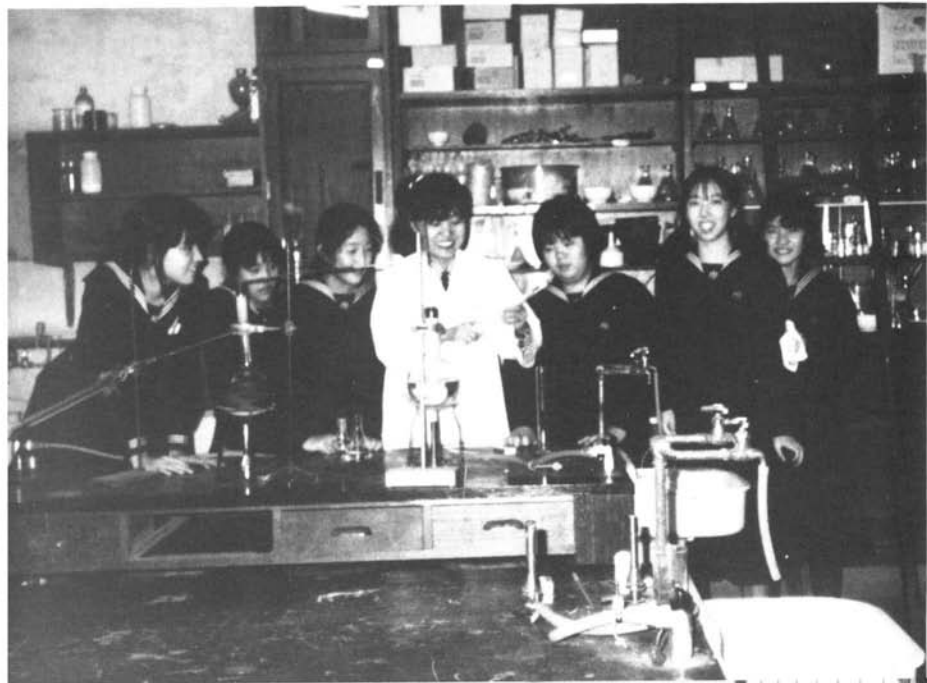


在学中の生徒が妊娠、結婚した。その体験を通して、高校生の愛と性を見つめる『十六歳の母』。  
子どもたちの興味・関心をもとに展開し『探求』の喜びを分かち合った実践記録『理科、だいすき／ルミ子先生のわくわく授業』。



名取りのお披露目「娘道成寺」

本業は化学の先生



もの憂く、また、激しく、ギターのリズムに乗せて手を動かし、床を踏みならし、官能的に踊るその爽快さ。「人生の機微を知るアダルト向き」という。  
多忙な仕事の合い間にレッスンを続け、スペインへも三度足を運ぶ。ひたむきなこの情熱が原田さんの大きな魅力だ。



官能的な踊りで客席を魅了する

# 「テキスト」現代女性読本

神田道子  
● 編  
女性の学習情  
報をつなぐ会

へ女性問題とは何か

いま歩き出すあなたに贈る

「女性学」入門書！

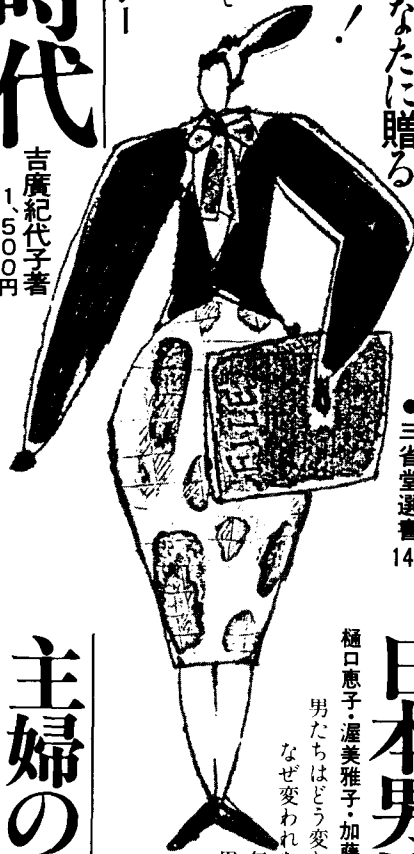
性差別・結婚・自立など、  
現代女性の抱える問題点を  
掘りおこし、21世紀に向けて  
広く女性問題を考える！

★話題のベストセラー

## 非婚時代

吉廣紀代子著  
1,500円

「結婚＝女の幸せ」という社会通念に異議を申し立て、  
それぞれの生き方を模索している結婚しない女たち。  
シングルを選んだ理由は？ 仕事は？ 恋は？ ……  
57人へのインタビューを通して、意欲的なシングル・  
ライフを全公開し、『非婚』に迫る。



● 定価1,400円  
● 三省堂選書 144

## 日本男性論

樋口恵子・渥美雅子・加藤富子・木村栄著  
男たちはどう変わればいいのか、  
なぜ変わらないのか

気鋭の女性陣が  
男性諸氏に贈る、  
熱くて厳しい  
メッセージ。  
1,400円

## 主婦の誕生

アン・オークレー著／岡島茅花訳  
産業革命によって誕生した「専業主婦」の過程を辿り、「専業主婦」から  
「兼業主婦」への変遷を問う。1,800円

三省堂

千代田区三崎町2-22-14

投稿ホットライン——あちらを立てればこちらが立たず

# 対話のページ

山田さんに拍手

東京都福生市 平山 桂子

二〇八号十四頁の山田登志恵様、あなたのご意見拝見し、うれしくなりました。私もあの塩川文相発言を耳にしたとき「この言葉を本当に素直な気持ちで聞いてくれるといいなあ」とすぐに思いました。

残念ながら「外へ働きにいかない女は駄目人間」みたいにいわれています（私の周りでは。近ごろは一級関白の我が夫もそういう態度です）。初めのうちは個人の能力、考え方など話しあってみましたが、最近は無言無言になっていました。一時は「わいふ」のどこを

開いてもそういう意見を応援してるように思えました。でも、きょうは。

ああ、いい気持ち。私の言いたかったこと全部書いて下さった山田さんに感謝します。まして三十代のお若い方のご意見だということが一層うれしい気がします。

特に「男女は競いあうものではなく扶け合うものです……」

本当にそうだと思います。なにしろ地上には男と女しかいないのです。まして自分のいちばん近くにいる男性と角つきあわせ、足のひっぱりっこしてどうなるのでしょうか。自分の分を守って助けあい、たまにはくやし泣きもしますけど、それでまた反省もし、相手のいいところを再発見することもあります。なによりもお互いに素直に、助けあうことでど

ちらも向上し、それは子供にとっても良い手本になると思うのです。

労力に対する賃金を手にすることで物質的には恵まれるかもしれませんが、自分を磨くことはまた己を輝かすことになると思うし、家族みんながピカピカしてきたら、それが本当の恵まれた幸福な家族ということでしょう。上手に書けませんが、やさしくわかりやすい肩ひじ張らない山田さんの文に拍手を送りたいと思います。



## 『塩川文相発言について』を読んで

千葉県佐倉市 辻 さつき

太田さんの「塩川文相発言について」の山田さんのご批判、読ませていただきました。問題の新聞の記事を読んでいないので太田さんに全く賛成とは言えませんが、私は太田さんのおっしゃっておられることに賛成です。むしろ山田さんのご意見にとっても淋しくなりました。

山田さんがおっしゃっていらっしゃるように確かに「子供が小さくても、女性はどうして外に働きに出るように」なんて言われたら私も驚きます。でも「子どもが義務教育中、母親は家庭に戻れ」ということも、言われた方が文相であればなおさら驚きます。少なくとも、男女同権をうたう憲法とその精神を尊重して従わなければならない閣僚が、あのような席上で建て前などと発言してよいもので

しょうか。

「歴史を変えていくのは、大臣とか権力者の発言ではなく……」とおっしゃっていらっしやいます。が、立法化しようとしていなくても、大臣がこういう考えをもっているということことは、やはり行政に反映されてきます。そう思われませんか。そうでなくて、どうして誰が大臣になるかが問題になりましょうか。塩川文相の発言は、彼がはたして人ごとではなしに真面目に、「母親の就労が子供に及ぼす影響について」考えた上での発言でしょうか。主観的、情緒的な、根拠のあいまいな発言に思えてしかたがないのです。ですから「たび戦争にでもなれば「母親も外へ出て働け」と叫ぶに決まっていると私は思うのです。

太田さんの思いは「……一人一人の熱い思い……」ではないのでしょうか。「……自分を本当の意味で磨きあげていく……」ということは、どういうことなのでしょう。まさか磨きあげることが生きる目的ではありませんまい。「……一人一人の生命が輝いていれば

……」ではどういうときに一人一人の生命が輝くのでしょうか。自分を問うということは、本当に大切に必要なことですけれども。それに、そうやって考えていって、自分勝手でない人間として当然の欲求に気づくこともあるのです。そのようなとき、試みることもまた素敵なことではないでしょうか。

「どちらかといえば男性より女性のほうが家事能力や子育てにふさわしい……」のところも出産ということを別にすればそうは思えないのです。私はいわゆる専業主婦ですが、夫を見ていて私よりずっと家事能力も育児能力もあるのでは、とよく思いますから。人からも「お宅は変わっているわね」と言われたこともありますが、私には性差よりも育った環境や育ち方の違いのほうが大きいように思えるのです。

いわゆる男らしさ、女らしさにびったりあてはまる方がどの程度いらっしやるのでしょうか。一人一人、自分にふさわしい生き方が選べるような多様性のある社会であって欲しい



と思います。それには行政が一つの生き方しか認めないようでは困ります。

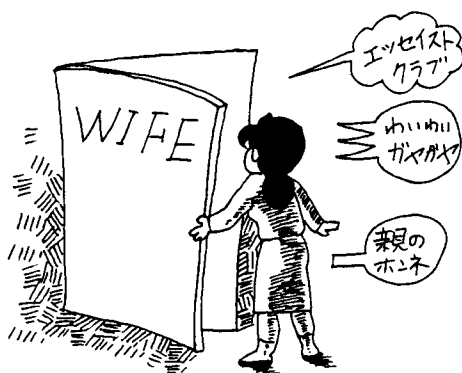
それにしても「……男女同権で外に働きに出たいというのわかるが……」の文相の発言、私には少し腑に落ちません。というのも、家計に占める家のローンや教育費の割合が大きくて、やむを得ず働きに出る人も多いのではと思うのです。かくいう我が家も、子供が塾へ行ったり、私立高校へ進学すればもう大変です。不本意な働き方しかできなくても働かざるを得ないかしら、とよく思います。

## 新参者の所感

東京都世田谷区 西山美沙世(41歳)

本誌を手にとるようになってから、三冊目に入りました。率直な読後感としては、女というのは実に容赦ない人種であるなというところでしょうか。

中でもゲンナリするのが「ファミリー・イ



ン・ブルー」。こういう文にばかりつき合わされると、本当にブルーになってくる気がします。家族とか係累ってそんなにやりきれないものでしょうか。対抗するコーナーとしては非、「ファミリー・イン・ピンク(?)」でも題をつけて、家族万歳、姑礼讃、子育ての幸福という趣のあるものを載せてくれないかなと願います。

とは言うものの、私も家族の煩わしさ、姑

への恨みつらみ、ガキ共の自己中心に、ウツウツとしている身ではありません。でも、こんなことを活字にするのは、私の美意識に反します。せいぜい、日記に書いて溜飲を下げるか、友だちにブチまけて、スッキリして日をしていける有様ですが。

ギスギスと周囲を糾弾するのではなくて、世の中って、いろんな人がいるから面白いだねと思えてくるような、ユーモアと、ゆとりに溢れた一文を読みたいものです。でも、書かずにおれない切羽つまった状況にあられるから、投稿しておられるのかも知れませんが女同士として、共感し、連帯するべきなのではないか。自戒の意も含め、本誌を低俗な告白モノで埋めるような雑誌にはしたくないと考え、願うものです。

それから、誌友の皆さんに、実に、エネルギーに溢れ、日々に寸暇の無駄もなく、努力精進の、ぐあんばりまーすというライフスタイルを保持している方々が多いらしいということにも、めげそうになっている私です。本の虫とか、活字中毒とか、自分でおっしゃる

のは、スゴイ！ 私も本は好きですが、読もうとしている本に囲まれて、だから手紙を書いたり、延々と考えごとをしたり、布切れをいじりまわしたりという時間を持っていることのほうが多いようです。好きな作家の新しい本を買々と、読み惜しみしてとっておき、（今日は、何もしないで読める！）という状態で、一気に読んだりもしますけれど。

そんな中で、二〇八号山田さんの自分という人間を、本当の意味で磨きあげてゆくことという一文は、じわりと心にしみ入りました。何をそんなに焦っているの？と問う山田さんはきつと、しっかりと地に足のついた、自信に溢れた暮らしをしておられる方ではないかと想像しました。それからときどきお見かけする田無市の法村さんの文には、ほんとします。失礼ながら七十五歳の大先輩のたくまざるユーモアには脱帽します。お会いしたい！読んで心が和むもの、力を与えてくれるもの、はっと緊張させられるものも、少なくはないと思います。目指すものはお互い、いろいろでしょうが、どうぞ末長くよろしく。

## 「うつ」にならないための 五か条を読んで

神奈川県 匿名（36歳）

この文を読んで、まず違いを思ったのは、匿名ではなくて住所氏名が明記してあったことである。うつ病経験者として、今とても書きたいと思って投稿したのだが、やはり匿名としなくては書けない。これが心臓病などだったら堂々と名前を出せるのに、と思うと悲しくなる。いくら新聞に堂々と「読むクリニックうつ病」という記事が連載されるようになって、現実には、「私は今、うつ病でつらいのよ」という一言が、親しい友達にも言えない。

今までに二回うつ状態を経験して、精神科へかかったが、土子さんの言われる通り、趣味を持っていても駄目なのである。普通のとくは比較的好奇心の旺盛なほうの私なので、テニスをしたり、婦人問題勉強会に参加したりするのが、一たんうつ状態になると、その



テニスへ出かけるのに準備してお化粧をして、ということが煩わしくて、それよりは家でジッとしていたいということになるのである。ジッとはしていたいのが、心の中は淋しくてたまらないのである。誰かと話したい。けれども、全くやりともしない状態なので、掃除はしていない、台所は片付いていないという雑然たる部屋なのでとても人を呼べない。しかも、どうしてやりともないのか、どうして何でも悲しいのかと聞かれたら、どんな返事をしたらいいいのか。「うつ病なのよ」という言葉は、かなりわかっている友達でもそれに

よって以後、白い目を向けられないかと考えると、口にできない。

かくしてうつ状態のときは一人で泣きながら必死で、何とか食事を作り洗濯を三日に一度か、一週間に一度か、夫に手伝ってもらって、やっとやる、という事態になる。夫もどこまで分かってくれているのかは疑問である。ただ、子供にとって母親は必要だという信念で、自殺されては困ると思ってやってくれていると思う。こんな精神的弱さを持つと、主婦の殻からなかなか出られないのである。

## 「些細なことが大きなこと」を読んで

東京都豊島区 長谷川裕子（32歳）

匿名さんの文章を読み、私は不謹慎ながら笑ってしまいました。そこには実家の両親の生活が上手に書かれてあったからです。それも、十年前の実家の生活です。

張り紙の箇条書きは、本当に納得です。しかし、少ないですね。私などその後に何十項



と書けるぐらい父に注文をつけて生活していました。たとえば、次のようなことです。

一、テレビを独占しない。（家族のことなど考えないで、ドラマの途中でも勝手にチャンネルを替える）

二、電話や友人との会話を立ち聞きしない。

三、酒を飲み、大声で歌って帰ってこない。

こんな父をどんなにいらなかったか思いません。

しかし、こんなダメ親父を見て育った子供達は、人を見る目を養い、向学心を培ったようです。生活していく中での子供達の知恵だったと思いますが、あのような父がいたからこそ身につけたものと思い、今は少しだけながらも感謝もしています。

十年前、母は専業主婦で、父とことごとく対立していました。今は仕事を持ち、忙しくて大変なようですが、イキイキしています。精神的、経済的にとても安定していて、子供達が見ても素敵な人になっています。父との対立は、今は少なくなっています。母は、昔、家族・夫婦の形にこだわっていました。

す。夫はこうあるべき、男はこうあるべき、という考え方は窮屈すぎます。もっと、夫を含めた他人に対して、寛大でよかったのです。人間はいつまでも成長していくもの。死ぬまですっと成長していくもの。今日の自分は明日、少しでも大きくなっていたいものです。他人の言動ばかり考えて生活していたら、自分は成長しません。自分の心をみがくのです。自分のために。たった一度しかない人生を、精一杯生きるのはです。

夫でも子供でも、何かこだわりだしたらきりがありません。離婚を考える前に、ほかのことを考えて成長していきましよう。あなたが今のままで悶々としていたら、子供は心配で仕方がないでしょう。子供に心配させないためにも、自分の人生をしっかり見つめ考えるべきです。

心情的なことですけど、子から考えると、あんな父でもないほうが良いのです。離婚して、母はせいせいするかもしれませんが、子にとっては大きなショックです。当事者でなく、いろいろな細かい部分がわからないだけ、

子の心に傷を残すと思います。

また、良い本を紹介します。斎藤茂太著、「いま結婚が危ない」です。この本の最後のほうに「危ない夫と妻のための章」というのがあります。匿名さんの今の生活、気持ちここに、たくさん書かれています。そして、この生活から脱するアドバイスもたくさんおさめられています。力強く生きて下さい。

「些細なことが大きなこと」を投稿なさったあなたへ

神奈川県横浜市 酒井智恵子

あなたは今、小さな不満が集まってふくらんだ風船のなかにいらっしやいますね。でも第三者からみればずっと分恵まれておいでです。家族は健康、ご自身は何かの講師としての能力を持ち合わせている。その上百坪強の土地に住まわれていらっしやる。

だいたい男って家の中では気を許し、やりたいことをする人種なのです。対する私達女も結構好きなことをやっています。おあいこ

です。つまり家庭の中はありていの姿をさらけ出し、受容しあう所なのです。

私もかつて子供達を社会に送り出す前、イライラした時期を過ごしました。経済的にも大変、更年期も重なって、今にして思えば主人にそれをぶつけていたと思います。子育ての生き甲斐を失った私は、その情熱を夫の言動にむけ、つまらぬことに目を吊り上げていました。もしかしてあなたも家の中の検察官となってしまうのでは……。

それで発想の転換を提言します。この夫と世帯を持たなかったならば、家庭を築く幸せも、女の喜びも、子育ても経験でできなかった、トレースバックしてみてください。花嫁のときあなたは何を決心しましたか？ あなたの顔はピンクに輝いていたことでしょうか。あなたは気付かれませんが、ご主人を傷つけてはいませんか。あの貼紙です。とってあげて下さい。相手は大人よ。

夫婦って不思議ね。こっちが嫌だと思えばピンと伝わるし、反対に有難いと感じれば優しくなること受けあい。先日どこかで書いた

のですが、豚でもおだてれば木に登るんですって。どうぞ気にさわることに一旦目をつぶり、良いところを拾い出し、ほめて上げて下さい。ご主人様も真剣に家庭のこと考え出しますよ。

決定的なことを口に出すのはよくよく考えてからに願います。一回出した言葉はちつとやそつとでは消せませんもの。勝手なこと書きましたが、どうぞ許して下さい。あなたのご家庭の平和を心から祈りたいと思います。

## 嫁姑問題——私も言わせて！

栃木県 匿名(24歳)

二〇八号「わいわいガヤガヤ」の「嫁の心姑分からず」の由美さんの投稿を見て、書かずにはいられない気分になりました。私も、結婚後一年足らずの間にたまりにたまった思いを一気に吐き出してみようと思います。

私の場合、主人の実家が車で十五分のところであり、同居はしていないもののトラブル

が続出。思えば結婚式直前からその兆しがありました。

新居に決めた借家が汚いからと、姑は主人の二人の妹達まで動員しての大掃除。そして、カーテンやカーペットを買ってあげるから……と、主人と私を連れて店に行き、好みの柄を選ぶ間もなくせきたてられて「これにしないさいよ」と半ば強制的にインテリア選び。部屋に敷くカーペットにしても、家具の置き方にしても、「この位置はよくない。カーペットを敷くのはあっちの部屋のほうがいい」などと、まるで自分の新婚家庭のように指図する



のです。好意からしてくれているのだから感謝しなければいけないとわかっていても、親切の押し売りの態度が目立つ姑の姿に、一抹の不安を感じずにはいられませんでした。結婚してから不安は的中。見知らぬ土地でまだ仕事にもつく予定がなく、一日家にいる私の所へ、二三日に一回は姑から電話がかかってくるのです。

「今何してるの？」から始まる他愛のないものですが、「自転車を買った」と私が言えば、姑は「ちゃんと大安か友引のいい日に買ったの？」そういうのはやっぱりいい日に買わないとね。私はいつも気をつけて買い物するのよ……また、電気代や水道代などを銀行から引き落とすやり方に反対したり、全てにおいて自分のやり方を喜々としてしゃべる姑。結婚して間もない私は反発するのも気がひけて、適当にあいづちをうって電話を切るのですが、何しろ二三日に一回と度重なる電話にストレスがたまり、しまいには電話がなるとイヤでイヤで受話器をとらないようになってしまいました。

決定的に姑に嫌気がさしたのは、今年に入  
って妊娠がわかって、里帰り出産するかしな  
いか迷っている私に対しての電話での言葉で  
す。「私の主義としては、女はいったん結婚  
したら実家には迷惑をかけないっていうのが  
あるわけ。里帰り出産って私好きじゃないの  
よね」もうこのときはかなり怒り心頭に達し  
て、「それは人によってケースも違うし、夫  
婦で決めることじゃないんですか?」と言っ  
てしまいました。

主人や主人の妹達が言うには、姑は典型的  
な世話好きタイプで、決して悪意があるわけ  
ではなく、やってあげたいと思ったら徹底し  
て尽くしてしまう人だから、気にしないで…  
…ということなのですが……。

嫁の立場として私は声を大にして言いたい。  
お姑さん、自分の考え方、生き方を押しつけ  
ないで下さい。私はお姑さんと結婚したので  
はありません。お姑さんの考え方で生きてい  
くのもありません。結婚とは、それぞれの  
家庭から独立した若い二人が、力を合わせ話  
しあって、まったく独自の家庭を築いていく

ことなのではないでしょうか。外から口をは  
さむことが、結果的に息子夫婦の間に不和を  
生む原因になっていることを知って下さい。

嫁姑問題といってもいろいろなケースがあ  
ると思いますが、世間一般的に見て「嫁は姑  
の言うことを聞くもの」という固定観念が残  
っているのであれば、何をか言わんやです。

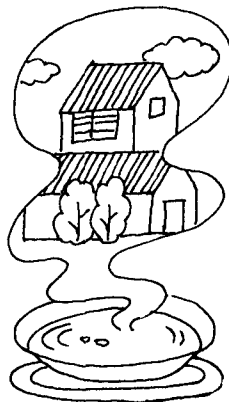
はっきり言って、これは人権侵害ではないで  
しょうか。実の親でさえ、自分の子供の生き  
方を束縛することはできないはず。なのにな  
ぜ、嫁姑の間には変な力関係が存在するのだ  
ろうか。

自分達だって姑に仕えてきたのだから、今  
の嫁もそうすべきだ、と言うのは自分がイヤ  
な思いをしたのだからあなたも……的なあま  
りに貧弱な発想ではないでしょうか。

今、イヤな思いをしているお嫁さん達、自  
分が姑になったとき、お嫁さんに干渉するの  
はヤメにしませんか。変な慣習は私達の年代  
で断ち切って、それぞれの生き方、考え方を  
尊重して仲良くやりたいですよ。

スーパのさめない暮らし

神奈川県藤沢市 関 米子



近ごろ、ずいぶん多くなったと感じるもの  
に、二世帯住宅というのがある。信じられな  
いほど地価が高騰してしまった今の住宅事情  
では、止むを得ず、それが自然な生活様式の  
一つになりつつあるような気がする。私の周  
りでも、このところ、その暮らしに踏み切る

人がだんだんにふえてきた。二階建て、上下二世帯の生活は独立してすべて別々のケース、ただし浴室のみ共有のケース……etc。

その新しい家の中での二つの世代の暮らし、ことに嫁姑のかかりを見聞していると、私たちの過ごしてきた時代とは、何と変わってきたことか。わいふ・二〇六号「一言の重み」の中に、六十三歳の方の「耐えたと思った三十年が、いまさらのように懐かしく」の一行には、全く同じ思いであった。私自身は三十年まではゆかず、その半分の十五年ほどではあったけれど。

我が家の場合、姑は後添いの人で、主人とは義理の仲であったから、嫁である私とも、良くも悪くもワンクッション置いた関係で、思い出も薄い。だが舅のほうは、遠慮とか、気がねとかいったものは、どこかに置いてきてしまったような明治の人であったから、よくぶつかりもしたが、それだけに、かえって親しみも湧いたような気がする。

舅は、至ってのん気な家庭に育った私を、我が家の嫁としてしつけることに、どうも老

後の生きがいを見出してたふしがあった。

何と云うさいことかと、当時は反撥もしたが、言われなければ気づかないことも多かったと思うと、うるさがられることを承知の上で注意した、そのエネルギーに、年月がたつほど懐かしさを感じるのである。

それに比べると、今の快適な二世帯住宅の中で、なるべく当たらず、さわらずに暮らしている親子関係の中からは、こうした思い出は作られることもないのであろう。スーブのさめない距離よりもっと近いはずなのに、言いたいことも言わず、お互いに離れた気持ちで暮らしているもどかしさを、少なくとも親の世代は感じているに違いない。現代は一代限り、と、割り切って考えなければならぬのか。今の日本式、スーブのさめない暮らしは、何か中途半端な気がしてならない。

お互いの生活に立ち入らないことが、昨今の同居生活のモットーのようだけれど、ときには思い切った率直な気持ちで当たってみてはどうか。そこからまた思いがけない、新しいふれあいが生まれてくるのだと思う。

## わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いでない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又→また 程→ほど 位→くらい 為→ため 事→こと 丈→だけ 方→ほう 様→よう 御→ご 迄→まで etc

◆送りがないについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変(わ)る→変わる 浮(か)ぶ→浮かぶ 話(し)合う→話し合う 気持ち(ち)→気持ち 行(な)う→行なう 表(わ)す→表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお願い致します。

投稿ホットライン——ずっとこけた・ぶったまげた・頭にきた・ジーンときた

# エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。  
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

## 絵が売れた

東京都江東区 藤枝まさ子

区民まつりの一坪ショップに出店した。  
十月の土曜日の午後、店開きをして品物を並べ終わるか終わらないうちに、Nさんの紙粘土の人形が次々と売れた。開店一時間後にはNさんの人形だけで七千円も売れていた。Nさんは腰痛で今回は作

品だけの参加となったが、出店歴三回目ですが売れ筋を掴んでいる。あどけない顔がふつくとかわいらしい人形で、そういうものは年齢を問わず人の心をとらえるようで、客がためらいもせずに出ていく。Nさんの手ごころな人形がひと

通り売れると、次にTさんの籐の壁掛けが売れ出した。  
三時になった。私が作ったブロンズふうのレリーフは一つも売れない。一瞥さえしてもらえない。私の作品はかわいさを狙ったものではない。かわいい物を侮



った私は独りよがりだったかも知れない。数年前に、紙粘土が主婦の間でブームになったときにたくさん作られた人形は、可愛いがために多くに愛され、今でも老若を問わず売れる。

売れなければ自分の家に飾ればいいさと腹を据えたところになって、一人の黒いセーターを着た女の人が、人混みの中から歩み寄ってきて、迷わず私のレリーフの前に立った。

「マンシヨンの壁に飾ったら素敵ですね」  
彼女は今まで誰もさわりもしなかった私の作品を見比べて、額にも入っていない単に板の上に浮き彫りにした作品を選んでくれた。

「これは額に入れたら良いですね」  
そう言って買ってくれた彼女に、私は深くお辞儀をした。ともかくも一つ売れて安堵、これで今夜は眠れる。

「油絵も持ってきたら売れるわよ」とTさんが言うので、翌朝油絵も一枚荷物の中に加える。もちろん、私の描いた油絵

を、お金を出して買っていく人がいるとは思えないから、粘土や藤製品の後ろに控え目に並べる。

台風一過の空に色とりどりの風船が舞いあがり、鼓笛隊の音楽が賑やかに響き渡る。日曜日の朝なので人出は多い。Nさんは今回は腰痛で専作だったので、粘土人形は残り少なく、今日は藤を売るのが主眼だ。

通行人は多いのに、今日の人出は売り上げになかなか結びつかない。藤をばつばつ売っているうちに昼ごろになった。私のものは今日も何も売れないのかなと思っていると、年配の夫婦連れのご主人のほうがち止まった。どうも油絵を見ているらしい。暫く眺めているようなので「如何ですか」と声をかけたが、少しにこやかな顔をしただけで、人の流れにのまれて行ってしまった。少しがっかりして座っていると、さっきのご主人がまた店の前に戻って立っているではないか。この機を逃さじと私は立ちあがり、ダン

ピングを始める。正札よりも五百円千円と下げて、下げ幅が百円刻みになったとき、今まで静かに笑っているだけだったその人が、こくりとうなずいた。売れたのだ。

私は信じられなかった。用意してあったなかで一番きれいな紙袋に絵を入れて渡すと、横につきそっていた奥さんがTさんに聞いている。

「どのくらいの額縁を買えば良いのですか」

「六号です。六号の額縁です」

私は興奮して言った。今まで額縁は高くて買えないので、裸のまま廊下に掛けておいた絵に、あのご夫婦は額縁をつけてくれるというのだ。最敬礼をして二人を見送った。油絵が売れるとは全く考えていなかっただけに、あとはもう何も売れなくても結構だと思った。

ところが勢いがついたのか油絵が売れたあと、昨日売れなかったヌードのレリーフも男の人に買われ、ポインセチアの

モザイクも良い値段で夫婦連れが買っていった。

一段落したところ、Nさんが家でじっとしていられずに、一坪ショップに顔を出した。人出を見て彼女は血が疼いたのか、癪りかけのぎっくり腰をおして再び家に戻り、小さな顔のついた可愛いお手玉を持ってきた。お手玉は店先においただけで人が群がり、何の苦勞もせずに瞬く間に売り切れた。可愛いものを作るNさんのセンスには脱帽だ。

四時ごろ、持参したものを完売して文化センターから引きあげる。売り上げは三人で六万円余り。一坪ショップ経験者のNさんでさえ売り切ったのは初めてのことだそうだ。

帰宅して油絵の消えた壁をながめる。売れた絵は油絵を習って二作目の風景画だ。自分では稚拙で不満だったが、「この絵はまぐれでできたのかも知れないな」と先生に寸評されたものだ。その後描法を変えたところ、ヌードは別にして風景



画に関しては不評で、「去年のもののほうが面白いじゃないか」と先生に言われて、二枚も塗り潰している。

家にあるときは特に大事にしていたわけでもないのに、風景画がなくなつてヌードの絵ばかり残った壁を見てみると、何だかもったいないことをしたような気

になってくる。写真でも撮っておけば良かったと二、三日は思い、その後では、あんまり安く売りすぎたと悲しくなった。「絵がなくなつてさびしくなつた？」と言ったら、配偶者が素っ気なく「別に」と答えた。

# 小説「桑の実」に寄せて

東京都江戸川区 荻田 一枝

神保町駅のホームの階段を上り、舗道に出ると、八月の真夏の陽はぎらぎらとアスファルトに照りつけ、むっとする熱気が返ってくる。ここは二年前まで、週に一、二回は必ず通った街角なので、神保町の交差点に立った私は迷わず、駿河台の方角に足を向けた。九段通りの右側は、九段下から駿河台に向かって軒並みに古籍商が並んでいる。古い作家の小説なので、新書はすぐには手に入らないと思っていた私は、端の店から一軒、一軒店内に入っていた。どの店も鰻の寝床のような店構えで、真ん中に仕切りの本棚があり、両側にも天井に届くまで、文学書、科学書などの専門の古書がぎっしり詰まっている。どこから搜してよいの

か見当もつかないまま、私の目は鈴木三重吉の背文字を追いか求めた。

「桑の実」は明治、大正時代の作家、鈴木三重吉の書いた小説で、私の拙い私小説を読んで下さった「わいふ」の和田さんに、ぜひ読むようにすすめられた本だった。夏目漱石の弟子であることだけ知っていたが、作品は一つも読んだことがなかったのが、私としては、どうしても手に入れたかったのだ。

漱石やその他の作家の全集や単行本はいくらでもあるのに、三重吉の本は一冊も見当たらない。

三、四軒の店を回った後、自分で搜すのは止めて店員に尋ねてみた。案外親切に、明治大正時代の全集物の中をあれこ

れ見て回ってくれたが、「済みませんがうちにはありませんね」と残念な返事が返ってきた。次の店で、高校野球のテレビを観戦していた主人に遠慮勝ちに尋ねてみると「ないですね」とけんもほろろの返事をされてしまった。いっそ三省堂書店まで行って、版元に注文してもらったら手に入るだろうと思ったが、それでは一週間か十日はかかってしまう。私は今日、ぜひ手に入れて帰りたいのだ。

もう少し根気よく搜してみようと思い、次の店で、客待ち顔にしている女店員がいたので尋ねてみた。さすがに本屋の店員さんは本の名も知っていた。「その本なら岩波書店で出している本ですから、この先の交差点を渡ったすぐの所に岩波

ビルがありますから、その二階の山陽堂ならあるかもしれません。行つてごらんなさい」と教えてくれた。ほっとした思いで礼を言うと、もと来た雑踏の街を小走りに引き返した。

交差点を渡り、銀行の隣に岩波ビルはすぐみつかった。山陽堂の看板が目に入ると、私は階段を駆け上つていった。三十平方メートルほどの狭い店だが、岩波書籍と岩波文庫の古書ばかりぎっしり詰まつて並んでいる。レジの前に座っている店員さんに聞くと、気軽に立つてあちこちあたつてくれたがすぐ「お客さんありませんが、大分傷んでいますがいいですか？」と言いながら、ピンクの薄い文庫本を渡してくれた。

絶版になっている本だと聞いていたので、どんな本でも手に入りさえすればいいと思ひ、代金を払い、包んでくれた本を大事にバッグにしまふと店を出た。三省堂書店に寄り、以前から欲しいと思つていた新刊書を一冊買つて、地下鉄に乗

り込んだ。

昼下がりの車内は空いていた。一番隅の席に腰掛け、私はバッグの中の紙包みを取り出した。店員の言葉が気になつていたので、家に着くまでにもう一度みてみたのだ。本は破れた箇所もなく表紙も綺麗だったが、ページを繰つてみると、周囲ばかりでなく、中まで茶色っぽく色褪せていた。少し乱雑にページを繰つたら破れてしまふようだった。永い間店頭に並べられていたか、本を大事にする人の本棚にひっそり眠つていたのかもされない。

老眼で読みづらい目をすかしてみると、昭和廿七年第十一版発行となつていた。

廿七年に印刷されたものなら、まだ本の紙質も余り良品でないころなので、無理もないことだと思つた。私は欲しいものが手に入った満足感に嬉しく、再び紙包みに包み直し、丁寧にバッグにしまひ込んだ。

「桑の実」は、画家の未亡人が経営して

いるカフェーに、おくみという生い立ちの薄幸な二十ばかりの娘が世話になつてゐるところから物語は始まる。おくみは、そこに出入りする画家で、妻と離婚し、四歳の男の子と、受験のため上京している弟のいる三人家族の家に、次のばあやさんが来るまでのほんの二か月ばかり、家事手伝いに行つた。その間の出来事を書いた小説だった。

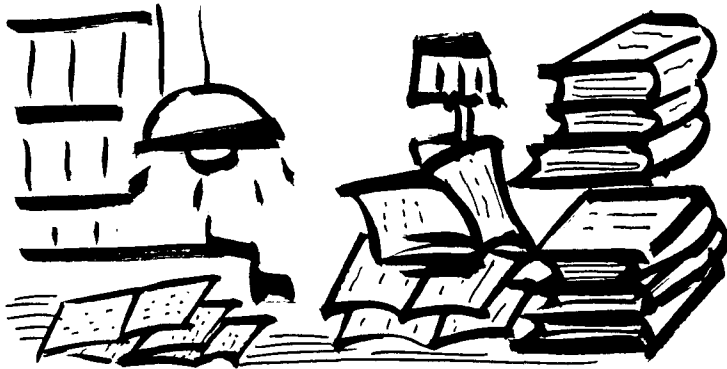
読み始めたときは敬語ばかり多く、文字も現在の仮名遣いと違い、今の国語辞典からも消えてしまつたのではないかと思われる字に出合い、大正生まれの私も、なんともまとつたが、読み進んでゆくうちにその文字や敬語も気にならなくなり、次第に文章の中に吸ひ込まれ、夢中で読み続けていた。

男の子の世話をし、食事の支度や家の中の掃除をしたり、画家と、家事にまつわる会話をなんとなく交わし、変化のない家庭内の出来事をただ、丁寧に、淡々と書き進んでゆく。プラトニッククラブな

どという言葉も遣われない時代の作品で、この言葉を遣うのははなはだ不似合いなのだが、おくみの淡い恋心を偲ばせ、画家とのプラトニッククラブで小説は終わるのだった。

作中には愛という字も、恋という字も出てこない。それなのに読んでいる私にはおくみの優しい繊細な心遣いがせつなく胸に伝わってくる。画家の弟が坊やを連れて遊びに出た留守のとき、画家は裏庭で桑の実をみつけ、おくみに手伝わせて摘んでくる。彼女に紅茶を入れさせて二階で桑の実を食べつつ、子供のころ食べたと同じ甘ずっぱい味を語り合う二人。画家は弟が国に帰った後の部屋をおくみのために飾り、自分の描いた静物画を掛けてやったりした。画家の心の中には次第におくみの存在がぎざまれてゆくのだった。

そんな矢先、未亡人が、後に来るばあやさんが見つかったと報告に訪れる。おくみがその家を去っていく日が近づいて



きた。画家は一日でも長くおくみにいてもらいたくて、いろいろ話し掛けるところに来ると、私の胸は一ぱいになり、目頭が熱くなって、その先が読めなくなってしまったのだった。

ここまで読み進んで、私はこの小説を読むようにすすめた人の教えて下さりなかったことが、理解できてきた。なんとも説明できないこの感動を与える作品。ありのままを掘り下げて丁寧にみつめて書いているだけの文、それなのに読む者に別れの悲しさをひしひしと感じさせる。なんとも称賛の溜息のつきたくなる作品である。一つの物語を書くいろはを、改めて知った思いであった。

解題として鈴木三重吉が最後のページに書いている文には、この小説は漱石先生にも大変はめて頂いたとも書き添えてあった。私は明治大正時代の作品には、やはり読みごたえのする傑作がひそんでいることを知ったのだった。

## 三度目の下車

グループの例会が井の頭線「駒場東大前」下車、近代文学博物館で開かれることになった。

その日「駒場東大前」で降りて私は懐かしさで胸がいっぱいになった。六十四歳まで生きて「駒場東大前」に降り立ったのはたった三度しかないことに気がついたからである。

一度目は女学生時代、当時駅名は「一高前」だったように記憶する。学校が渋谷にあって、たまたま級友の兄にあたる人が一高生であったことから、何人かの友人とともに誘われて「一高祭」なるものに行ったのである。

生まれてはじめて男性の学校の門をくぐった。男女間の交際は禁じられていた時代ではあったが、一高祭だけはまた格

別、若い男女の学生達で学園内はあふれていた。

制服をみただけでどここの学校とすぐわかった。弊衣破帽が一高生のシンボルであったが、それがむしろ魅力的ですらあった。中でも「かっぱおどり」には仰天した。裸で手をたたいたり、うたったり、おどりまわったりするのだ。それはまるで青春、そのものだった。

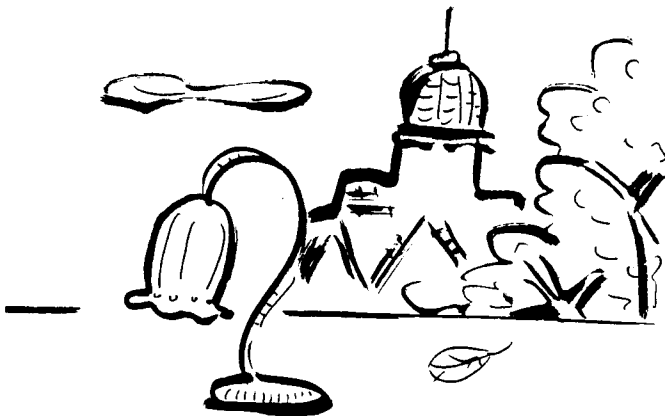
いまから思うと、第二次世界大戦の前のつかのまの平和だったのだろう。あれがおそらく最後の平和の光景だった。

二度目の下車は戦争が終わり世はまさに平和、高度成長期にわいているころだった。戦後「駒場東大前」とかわった駅に降り立ち、一人、近代文学博物館への道を急いだ。

東京都品川区

椿

芳子（64歳）



そこで開かれる今は廃刊となった「児童文芸」のゼミに参加するためだった。

講師のメンバーの中に小学校時代体育だけを受け持たれたK先生がおられた。もしかしたら、お目にかかれたら……そんな淡い希望を抱いていた私だった。

会の終了後、私は思い切ってK先生に声をかけた。「ああ、椿さんがあのKさんだったの」先生はびっくりした顔をされた。私が投稿した作品を覚えていられたのはうれしかった。

「作品持ってあそびにいらっしやい」その言葉に甘えて五十枚、百枚と書きためた作品を持って先生のお宅に伺った。先生の前に出ると私は少女にかえる。あのころのわくわくした思いの懐かしさ、思い出すだけで胸がいっぱいになる。けれど、子供の病氣、入院、家事の繁雑さ、家族のしがらみが私を離さない。

「書くということはマラソンのようなもの、くじけず、めげず、書くこと、あなたならきつと書けるよ」先生は励まして

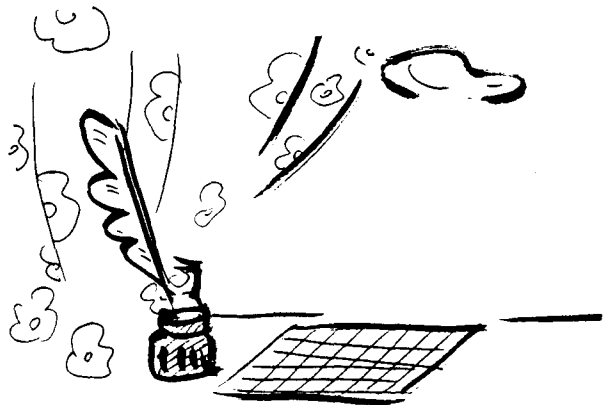
下さったが、私は家からとび出すことはできなかった。才能の限界も見えてきたのである。先生の期待に応えられぬままに年は過ぎて、ある日先生の突然の死の知らせは私を童話から遠ざけた。

それでも私は書くということから遠ざかることはできなかった。一向に芽が出ないことを知った上で、夫の見えないところで自分の思いを原稿用紙にうめた。まるで一つの業のように同じことをしている私。

そして三度目の下車。やはり書くことで結ばれたグループの集いである。三十代からやがて六十代。女学生のころの校友会誌の作品から数えると十代からともいえるよう。六十代に入って白内障が私のペンをにぶらせる。

前日まで晴天続きであったのに、その日はなぜか朝から雨が降った。涙雨と私はつぶやく。一度、二度、三度、下車するたびに街は変わっていた。

六十四年の間に三度しか降りなかった。



十代の私、三十代の私、いま六十代の私。これからの私の前にあるものは何だろう。それでも、かすむ目を原稿用紙のマスに集中させ、書くという業から私は自分の存在を確かめていこう。本当の自分の姿が見えるにちがいないと思って。

# 万平物語

## ケチのつけ

神奈川県 山田さとみ

世間にはケチンボーな人もいれば鷹揚な人もいる。しかしY村に住む万平ほど、ドケチな人生をしている者を、他に知らない。

万平は今年八十五歳。皮の下には骨しかない。皮膚の色は黒曜石と見まがう。もし人間の欲の度合いを測るコンピュータがあるなら、人智で作ったそれでは「E」の字がピーピー鳴るだけ。あるいはコンピュータが爆発する危険さえある。

まず万平は食うものを惜しむ。できれば食わずにその分貯金したい。日没もないほうがよい。ずっと働いていたい。大雨の日以外、家でテレビをみたり、じっとしていることは罪を犯した気分になる。万平は山へシバを刈りに通う、ついでに

杉山の下草取りをする。山をそっくり移したほど庭のシバ山は高くなっているのに、もったいなくて、風呂もめったに沸かさない。したがって生来の皮膚の色が黒いのか、茶なのか白いのか、全く見当がつかない。

万平には四十年前死別した妻との間に四人の息子がいるが、二男夫婦をのぞいて誰もY村へ訪ねる者はなく、再婚相手のハナとの二人暮らしである。ハナは八十歳、万平と三十九年暮らしているというのに、シトネを一緒にしたことが一度たりともあったのだらうかと疑いたくなるほど、じっくりしていない夫婦である。二人の不仲は、万平の持病ともいえる「欲」が齢とともに膨らむほど、ハナの

対応が鈍くなった結果ともいえるのだが――。また、鈍くなった分、ハナは嘘をつくことで万平との間柄を繕うことも学習しようだ。

万平はハナのことを「この嘘つき婆さん」とののしる。ハナは「うちの爺ちゃん、貯めた金を持って墓へ行くらしい」と近隣でふれまわる。

ハナは最近、嘘の種類を一つふやした。意味のない、方便にならない嘘をつくようになった。たとえば西へ向かって歩いているのに、「どちらへ」と問われれば「東へ」と平気で答える。

だが、たいていの場合ハナの嘘は方便が伴う。

けさも、ハナはカゴを背負い、地下足





袋をはいて畑へ行くふりをして、峠の先を左側の広い道へ下りていった。畑と反対側の町場のスーパーへ好物の茶鰻頭を買いにいったのである。泥のついたネギ、カボチャも買ってカゴに背負い、畑から帰ったふりをするためだ。

老人会の民謡や踊りを見に行くときも、ハナはカゴを背負って、峠のほうへ行く。家の前には町場へ行くバスがとまるのに……。

このごろ、ハナは自分の嘘にも追いつけなくなったらしく、茶鰻頭を買ってきたのを忘れ、一日に三度も峠を越すことがあり、部屋のあるここにバックのままの茶鰻頭があらわに放り出されていることがある。万平は「モウロク婆さん」となじる。

万平の持病も日に日に悪化していく。卵を三つ食べた、ハナを詰問する。床下の卵のカラを見つけ、つなげて三分と確信した万平の声はいっそう荒く、高らかになって「もったいない」と叫ぶ。

庭続きの畑にもいくらでも転がっているカボチャを、一個の半分を煮付けよ、とハナに命令する。

けさ掘った竹の子ももったいないと、庭の隅から何日も前に掘ったしなびたものを、ハナに渡す。

竹の子といえばこんなこともある。万平の山から竹の子が三本盗まれた。万平は隣山から竹の子を三本盗み返した。「竹の子を盗るな」隣山に向けて、早速立て札をした。万平の竹山の竹の子は、掘ってもらえないかわりにいびつな姿でやっと立っている。

万平はもらったものなら喜んで食べる。ハナは半分のスイカを実家でもらったといつて、膳に出した。万平は素早く、土間の隅のゴミ袋を一瞥し、血相を変えた。——真新しいヘタはスイカの一つ分からは切り落した形をしている。ならば半分はハナが隠れて食ったにちがいない。実家の跡取りである甥はスイカを一個丸ごとくれるような男ではない。ハナはまたス

ーパーで買ったのだ——万平の疑念はとどまるところを知らず、「金遣いの荒い婆さんだ」と怒鳴ってスイカに見向きもしない。

夜中に懐中電燈で他人の田の落ち穂を拾い、倉に隠し、半分のカボチャを残して、鼠をふやし、倉の中の俵の米までエサにされているのも知らず、万平はあすも、才覚の欠けた身辺の欲にうつつをぬかすだろう。そして金を貯めるための三角法、すなわち恥を欠く、義理を欠く、人情を欠く……こそ金を残す必勝法である、いつものように呟く。

万平よ／ あなたは一杯の茶と一台の酒を惜しんで高校の校長にもなれず、定年退職した。また、その後勤めた私立高校では一着の服にこだわって、臭い先生と生徒たちに嫌われ、すぐ辞めさせられた。村でただ一人しかいなかった大昔の「大卒」の学歴を、活用する知恵さえあれば、いまカボチャの半分にこだわり、他人の

田の落ち穂まで拾わなくともよかったのでは……。

最後に、あなたに緊急に報告せねばならないことがある。

妻、ハナにあなたが現役時代のボーナスや退職金で買ひ与えた（働かせるために妻名義にしたとあなたはいうが）田畑の一町五反、つい先日、ハナの甥夫婦の名義に書き換えられたのですよ。

ハナは「爺ちゃんに盗られると甥にいわれ、印鑑と権利書を預けた」といっているが、小水もときどき洩らして知らんぷりしているハナには、事実の確認などもうできないでしょう。あなたも「株券」を持ち逃げされたとか、万平／ 才覚を使わないあなたの小さなケチは大きな得を逃がす結果になったようですね。

二男夫婦も、もうＹ村を訪ねたりはしないでしよう。

二男の妻である私は、あなたの上に、一日も早く安らかな日が来ますよう祈ります。いまのあなたとても可哀想ですもの。

# オットどっこい

粗大ゴミ予備軍の生態記録をとろう！

## 背中にもたれたい

兵庫県 匿名

夫が亡くなって半年になる。その間実にさまざまな経験をした。家庭の外に出たことのない私にとっては、広い海にはうりだされたのも同然だった。喪主として葬式の大役を果たし、夫の勤務先や近所の挨拶まわりもした。忙しくて泣いている時間もなかった。

逆境に陥ると、不思議に人の本性が見えてくる。夫との結びつきが余程深かつ

たのだろう。残された家族を心から心配して下さった、上司、友達、かつての部下の人達。その反対に口先だけの親類や近所の人もいた。醒めた目でそんな人を見て、気を許さないようにした。そして、私なりに精一杯頑張ってきたつもりである。

だが、このごろ無性に疲れる。慣れない勤め、帰ってからの家事、自我の強い高校生の息子とのやりとり、そんなとき、広い背中にもたれたいと思う。好きな人ができたわけではないが、たとえ五分でも休んだら、傷ついた身体も心も元にも



どる。山で冷たい水を口に含んだときのように、また元気になれる。しかし、私のもたれる背中はない。周りを見ても、どの人の背中にも家庭がある。夫がいたときはこんな気持ちになったことはない。仕事一筋の人だったが、いざのときはそばにいてくれた。

これから、子供達の進学、就職、結婚が待ちかまえている。末っ子はまだ中学一年である。ふた親がそろっていても大変なのに、長い道のりを思うと、夜半に目がさめてしまう。

今日も私は重い腰をひきずって、仏壇の前に座り、夫に語りかける。

(元・片岡悦子)

---

# がんばれ！ 職業高校



新潟県中蒲原郡  
小林 智枝

---

## 合格通知を待つ日々

私は現在県立N商業高校の事務職員として働いている。

今朝は珍しく事務室は静かだ。いつもは先生がつぎつぎとやってきて、賑やかで電話も聞こえないことがときどきある。事務室の前は中庭で、たくさんの木があり、一日一日伸びてゆく新緑は、乾いた私の心をうるおしてくれる。藤の花、椿の花、バラ、こでまり、その他たくさんの花もつぎつぎに咲いて、心を豊かにしてくれる。

「おはようございます。午前中の郵便は何時ごろ届きますか」

上越市から単身赴任中のM先生が、いつもの甘えた調子で入ってきた。私は瞬間的に、この四月に情報処理科の生徒達が受験した、情報処理検定の合格通知かなと思った。しかしそのことを口にする、と、M先生の胸がますますキュンとする、と悪いので、黙って仕事をしていた。

「床やへ行ってきましたね」K子が言った。「うん、PTAの総会用だよ。短くしちゃった」

今日は六月一日、PTA総会の後、学年懇談会、個別懇談会と予定されている。

## 予算なしの学科新設

M先生は情報処理科の学級担任だ。

N高校に情報処理科が新設されて、一年が経過した。この一年間のM先生と、若いY先生、H先生の苦労は、はかりしれなかった。

N高校は創立百三年の歴史の中で、現在の新潟県の経済界を支える多くの人材を生み出してきた。しかし最近、大学進学率が高まり、普通科志向が強くなって、職業高校は人気がなくなり、低迷していた。女生徒が七割を占め、能力的にはいい資質を持ちながら、それが伸ばされない状態にあった。そんな中で、昭和六十年四月から、時代の流れに対応し、職業高校の活性化をめざして情報処理科が

一学級新設された。それまでに幾多の困難があった。

「日本商工会議所の情報処理検定二種を合格させること」というアドバリンだけが高く上がっていた。それは今までの高校生には考えられない目標だった。普通は高校卒業後電算機専門学校で二年間学び、二種を取得するというのが常識とされていた。それを高校在学中に、他の教科の勉強もしながらやるうというのだ。三人の先生は何から手をつけたらいいのかわからない手さぐりの中で、苦しみながら、情熱だけはあふれんばかりだった。

パソコンも商業科用に二十四台あるだけのため、目標を達成するために、県立教育センターへ毎週土曜日に生徒達を送りこみ、援助を受けることにした。それに対し、学校の中からも教育委員会からも批判されたが、実行した。

情報処理科新設に批判的な教師達は、ことごとく足を引っばった。援助の手を

さしのべなければならぬ商業科教師の中にさえ、厳しい批判と中傷があった。

何故そんなに反対するのか。

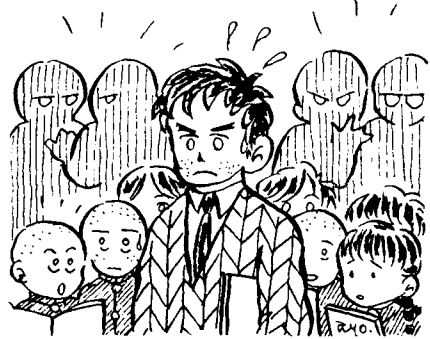
大きな理由は教育委員会がそれだけの予算を学校に配当しないこと。そのためにそのしわ寄せが他の教科に及んでいることだった。

確かにそうだった。

情報処理科と言えば、お金がかかるのはわかりきっているはずなのに、特別予算が配当されないとは。

学校を運営する経費は、三年連続のマインスシーリングで、もうこれ以上はどうにもならない状態だった。学校から見える新県庁の建物がうらめしくなるほど、オンボロ校舎のあちこちが壊れ、どうにもならない状況の中で、情報処理科にかかる経費をどうやって捻出するかと頭が痛かった。

ほとんどの学校には、教具教材にかかる予算を審議する機関として、財政委員会が設置されている。教頭、教員、事務



## 教師間での 足のひっぱりあい

一学期の期末テストの最中だった。  
テストが終わると、先生は自宅研修と  
いう名目でほとんど帰ってしまう。

私が教務室へ行ったとき、M先生はポ  
ツンと机に向かって仕事をしていた。

「M先生、がんばってますね」

「うん。何から何まで大変なんだ。教材  
もみんな手作りだから大変なんだ」

「予算も少ななくてごめんなさいね」

「仕方ないですよ。それよりもねえ、商  
業科の先生の間でも足引っぱられるだけ  
でねえ」

M先生の胸の中は苦しみと悲しみに満  
ちていた。私はM先生の顔を見ただけで、  
不思議と心が読めるのだった。

「先生がんばってください。新しい仕事  
するときってどこでもそうなのよね。他  
の先生方のことなんか何を言われようと  
気にしないで、生徒達のことだけ考えて」

こんな素晴らしいチャンス与えられるな  
んで、めったにありませんよ。自分のや  
りたいように、自分が納得する仕事をし  
てください。予算のことでどうしても困  
るときは、私に聞かせてください」

M先生は笑顔を見せた。図太くて、態  
度と声が大きいせに、感受性の強い面  
もあり、その感性が何故か私にはピンピ  
ンとわかるのだった。誰にでも言いたい  
ことをずけずけ言うくせに、私を信頼し  
ていた。

三人の先生達は夏休みも冬休みも、そ  
して春休みもなかった。毎日夕方七時に、  
学校にアラームがセットされるために帰  
らなければならぬとばかりやっていた。

生徒達も休みなしで登校してくる。

「いつも君達のトイレを清掃してくれて  
る用務員のおばさんに会ったら、ありが  
とうって言うんだぞー。教育センターへ  
行ったら靴はきちんとかたづけろんだぞ  
ー」

M先生は四十五人の生徒達を愛してい

職員で構成され、私も加わっていた。  
財政委員会は情報処理科の扱いに苦慮  
し、事務長は教育委員会に特別再配当を  
要求した。

いろいろクレームがついた後、わずか  
十五万円が配当されたのは、夏休みに入  
ってからだった。何とも情ない話である。  
予算の裏付けもなく、設備もないまま  
スタートしたのだから、学校現場が混乱  
するのは当然のことで、情報処理科に対  
する風当たりは校内でも強かった。

た。

三学期の一月に行なわれた全国商業高校協会主催の情報処理検定を全員受験し、一級に二十二人、二級に四十二人合格した。彼らは全国の情報処理科の生徒達の目標を、一年もたたずに達成したのである。そしてさらに二年生になったばかりの四月に、生徒達は日本商工会議所主催の国家検定試験を全員受験した。

四月七日の歓送迎会の席で、M先生は銚子を持って私の席にやってきた。

「ボク今本当につらいんです。もうすぐ検定受けさせなきゃならないから、それだけの力をつけさせたかどうか、胸が痛

くてどうしようもないんです」

「先生そんなにあせらないで。この一年間本当にがんばったんだから、努力は必ず実りますよ。もっとゆったりと気持ちを持ってください」

M先生の目はお酒のせいかわかった。

私は他の先生達には内緒で、支払い担当の職員と話し合っ、ソフトや生徒用フロッピーなどを買った。年度末には立派な書棚もそろえた。

プライベートな用事で上京し、秋葉原へ行ったとき、百枚入りのフロッピーディスクケースを、新潟では考えられない安値で売っているのが目についた。私は

即座に決めた。ポケットマネーで情報処理科にプレゼントしよう。

大きくて持って帰るのが大変だったけれど、いつも私の話を聞かされている夫は、快く新潟まで持って行ってくれた。

合格のかげに見えるもの

「小林さん、お陰様で三人合格しました」  
M先生が興奮した声で、合格通知を持ってきた。

「わあ、おめでとうございます。良かったですねえ」やはり今日の郵便はこれだった。

男子二人、女子一人ついに合格した。

粗食派の饗宴

大河内昭爾



粗食派の饗宴

粗食にこそ食の志がひそむ

大河内昭爾

文芸評論家で「食の文学館」編集長が、古今の作家と食のかかわり合いを探り、自身の味覚フィールドをたどる。食を通して人を語り、人を介して食のありようを考える食味エッセイ。  
発売中／●定価1,500円

文化出版局

〒151 東京都渋谷区代々木3-22-1 ☎03(370)3111(大代表)

「この学校へいらっしやってから四年目で、最良の日になりましたねえ」

「うん。よくやってくれたよ。秋には一種だ」

「今PTA総会やっているから、すぐに知らせて、父兄に報告するといいですね」

「うん、そうするよ」

M先生は宙を飛ぶようにして事務室を出ていった。

三人の先生と、四十五人の生徒達がやったこの快挙は、新潟県の高校教育にとって画期的なことであり、波紋を広げた。

「これだけのことをやったのは、もちろん三人の先生方のたまものだけど、教育センターの先生方とか、多くの人達の援助のおかげですよ」校長が言った。

「生徒達の就職のためにも、このことを新潟日報の記事として取り上げてもらいたいですねえ」私は言った。

「もう承諾とってますよ」

情報処理科新設のために、あらゆる方面で努力を重ねた校長にとって、それは

当然考えていることだった。（その後、

「コンピューター戦士初陣の快挙」と大見出しで新潟日報に載り、一躍脚光を浴びた）

私はまた心配になった。ただ単に成績が良いとか悪いとかでなく、合格する者としらない者とはつきりしてくると、ついていけない生徒達にとって、これはどういったことはないだろう。

翌朝も素晴らしい青空だった。鳥の鳴き声が聞こえた。ときどき中庭の木にやってくる。

「おはようございます」

M先生がにこにこ得意そうな顔をして事務室に入ってきた。

「おはようございます。昨日はよく眠れましたか」

「背中と首が痛くて眠れないんだよ」

「昨日の祝賀会で胴上げされたっていうから、そのせいかしら」

「違うよ。オーバークワークなんだよ」

「本当ね。大変な代償ですね。その上ま

だお願いなんだけど」

「なーに」M先生の顔が一瞬ひきしまった。

「先生も大変だろうけど、一種目標と同じに落ちこぼれ出さないようにお願いします」

私がそんなお願いをする筋合いはないのだけれど、情報処理科を応援する気持ちから自然に出た言葉だった。

「そうなんですよ。できる生徒なんて放つといたってやるんだよ。気持ちが悪にいつてしまった生徒の心を、どうやって軌道修正するかが大変なんですよ。一人いるんですよ。何回も話をしているんですよ。うちの学校の生徒達は優秀なんです。教師が生徒に限界をつけちゃだめなんだよ。これからは先生を乗り越える生徒達がどんどんでてくるんですよ。ボクだって二種持ってますからね」

頼もしい言葉だった。

情報処理科、がんばれ。

（え・田井亮子）



特集

# わがふるさと の現代史

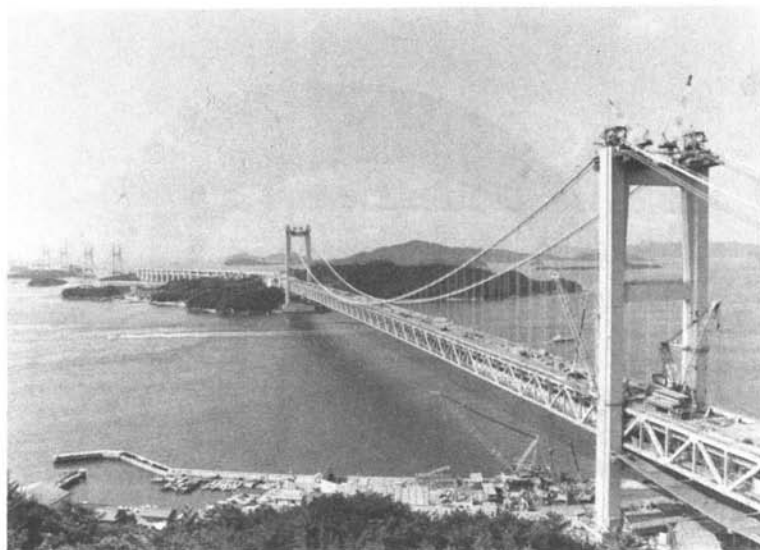


# ふるさととは魂のよりどころ

家守 恭子 (57歳)

大阪市鶴見区

ついに完成、瀬戸大橋



(写真——岡山県東京観光案内所提供)

わしうざん  
鷲羽山の頂で

前後して自転車で走る従兄の背を目印に、離れぬよう付いてベダルをふむ私。敗戦の色も濃い昭和二十年五月の生暖かい闇夜のことです。

従兄に召集令状が来たので、親類へ別れの挨拶に行くのに付いて出たのです。

つい二か月前、私も大阪空襲から疎開して父のふるさとに帰ったばかり、地理も距離感もわかりません。

二人は小田川に添って下り、味野の町なかを抜け、山と海が迫る低い防波堤が続く細い一本道を走り、軒と軒が合うほどにたて込んだ漁師町から上り坂になり、自転車を押して登り始めます。

「大丈夫か？」

「……うん、なんとか」

口では言ったものの、ふんばる足元もさだかに見えず、砂地の山肌にすべりながら、たびたび松の枝に遮られしかね、峠とおぼしいあたりでやっと一息入れま

す。

見はるかす海はただ黒く、点在する島々の中に家もあるのか、かすかに三つばかり、星のまたたきほどの明かりがのぞめるばかり。押し包む静寂から逃れるように下り始めますが、ありやなしやの坂道を、ひたすら体を固くしてブレーキを掛け掛けの道のりは、とても長く感じました。

その山が鷺羽山だったのです。

八月終戦。九月から地元の女学校へ通い始め、校外授業に鷺羽山へ登りました。味野駅<sup>あじの</sup>から狭軌二輪連結の、走りだせば自転車ぐらいの速度。

色づいた柿が車窓からもぎ取れそうで、垂れた稲穂が車輪にふれる田の中を、山の中腹に向かってゴットン、ゴットン走ります。

鷺羽山駅からゆるい坂道を登るにつれて、瀬戸内の指呼にある島々は重なり離れたり、白い日除けを張った釣り船

が浮かんでいます。

潮風にさらされる松は山地を這うように枝を張り、常緑の針葉樹のたくましい香気に驚き、対岸の讃岐富士を教えられて感激。歩み進むほどに、三方に海は視界を開き、ただただ造形の妙に息をのむ思いでした。

ふるえるほど平和を実感したのも鷺羽山の頂です。

## 工場群と競艇場と

私のふるさと児島は、瀬戸内海に右向きの長靴の形をした半島で、上部前が岡山、後ろが倉敷、ヒールの先が下津井であり、鷺羽山の景観がある。かかところ底部は、長い海岸線が伸び、宇野に至ります。

沃野は少なく、山と丘陵を複雑な海岸線が包み、気候温暖、山、海の幸に恵まれ、繊維縫製の地場産業も営まれて、人は遠い源平の昔から住んでおりました。扇の的で有名な、那須姓ばかりの「ひつ

石島」も下津井港から近い島です。

戦後地方選が行なわれ、同じ部落の方が市長に立候補したとき、村人総出で運動に駆り出されました。若者は銀輪隊を編成、小田川を遡り山ひだを分け入り、勾配のきつい所は自転車をかきいでよじ上り、息を切らせながら前面を見たときは「あっ」と声をあげました。

パノラマのように丘から海が広がっているのです。聞けばその浜はずっと沖まで遠浅で、春の大干潮には貝が浜を埋めて、潮干狩りも面白くないと申します。

十数年後、煙突が林立し、夜も昼も赤い舌を天に向かって吐き出すように炎がもえ続け、黒煙が空をおおい、全国にさきがけて公害地区に認定され、山の木も野菜すら生育できなくなった水島工業地帯への変貌を、誰が想像し得たでしょうか。

工場群の中に、こんもりした山があり、遠浅の浜の沖にあった「高島」がその姿

だと聞いても、すぐには信じられません。工場の排水に海は汚染され、高級な桜鯛などは激減し、代わりに汚水に強い魚が排水溝にむれ集ってくるそうです。大手企業が水島進出のたび、補償金が漁師に渡され、その額やわり振りの話に一時もちきりだったとか。

同じころ、児島競艇場ができました。前述の海と山が迫って一本道の海岸に、大きなスタンドが海に向いて建ち、塩田を埋めたてて駐車場ができ、駅とレース場をピストン運転するバスの発着場、ボート整備工場、飲食店など、おだやかな山ふところの入海は、雑多な建物が西部劇のように建ち並び、開催日は早朝からヘリコプターが野山を飛び、やかましく宣伝します。

収益金は自治体の財政を助けるでしょうが、善良な市民が賭場の虜となり、家庭不和の原因など、マイナス面も伴います。レース場の砂はこりや紙くずのちらかり、場内をひしめく人達は、とても健

康的とは申せません。

地場産業の紡績、縫製工場は、戦中軍需一色に切り替えられ、県北の女学生までもが児島に来て働きました。粗末な食事、味付けに海水も利用したそうです。

戦後、民需でわきかえたのも一時期で、時の趨勢に自然淘汰されてゆきました。敷島紡績味野工場も例にもれず、撤退した跡地に、スーパーマーケット、駐車場、市民会館に商店街と駅前が一変し、工場敷地の広さを物語っております。

### やさしく心をいやして くれるふるさと

平和を迎えて四十二年、日本経済の発展とともに、ふるさと児島も目まぐるしく成長、変化しましたが、人々の知恵と努力によって、行き過ぎはあと戻りし、ひずみは正され、それなりに落ち着いてきました。

水島の公害は企業の自粛と行政の指導が効を奏して緑が甦り、ボートレースは



マニアに止まり、地元の人はレース場職員として職場を得、縫製業は時のファッションに應えて、ジープ、トレーニングウェアに活気を呈しています。

道路は整備され農道は幅広く、市内すみずみまで車が通れるようになりました。水不足のため、下津井の漁師町は全員トラホーム患者だと言われたのも昔話で、高梁川から水を引いて上下水道も完備しました。市役所、市民病院、保育所から高校まで建設され、児島スポーツセンターはナイター設備も整い、水泳に、テニ

スに市民は気軽に親しんでおります。

明けて六十三年には瀬戸大橋が開通します。それぞれの起点である児島と坂<sup>さかい</sup>出は一躍名を馳せ、本州と四国が陸続きになるとは、正に夢のかけ橋そのものです。

完成間近の橋を所用も兼ねて、去る六月見に帰りました。バスに乗って岡山平野の穀倉地帯を過ぎ、直進水島、左児島の標識のあるあたり、ゆるやかな丘陵地の雑木林も田畑も一掃され、大橋へ導入の土木工事がすすめられています。列車も、洪水のように通過する車も計算の上なら、その規模の大きさもさこそとうなずけました。

鷺羽山展望台で降り、塩飽<sup>しほく</sup>諸島や工事たけなわの橋を眺めました。橋上の資材を運ぶ車の小ささから橋のスケールが計れます。

頂を通りすぎ鷺羽山駅へ下っていききました。駅はポートレース場あたりから上りつめた山あいの無人駅なのです。木

々の間を縫いながら駅近くに来ましたら、線路をへだてた向かい側の山がありません。山はえぐられて平らになり、地肌をむきだした巨大な茶の帯が、線路の下へ突っ込んだように見えます。今歩いてきた山道の下にトンネルが掘られていたのです。自然破壊と環境保全のかねあいにプロジェクトの人達はさぞ苦労されたことだろうと思いました。

古来、川の流域から文明の花が開いたように、人智と科学技術の究極を結集してできた一本の道は、二十一世紀にはどのような図式を画くでしょうか。

ありていに言えば、児島は父母、夫のふるさとであり、私は十五歳から二十七歳まで住んだに過ぎません。大阪（本来の私のふるさと）へ戻ってから児島へはたびたび帰りますので、ずっと暮らすよりふるさとの移り変わりが、より鮮明に見える場合もあります。

表面に現われた変化は種々あっても、

私にとってふるさと児島は魂のよりどころとも申せます。何があるうと最後の逃げ場はある、という心のゆとりが持てるのは確かです。

一度だけでしたが、大阪へ戻って数年後、人と人の軋轢に耐えられず、心が爆発し、家を飛び出したものの行くあてもなく、気が付いたときは「わしう」の夜行に乗っておりました。そのころ四国へ渡る宇高連絡船に通じるため、山陽線から岡山經由宇野行きがありました。

夜も明けぬ午前三時ごろ宇野に着き、一番のバスを待つて児島に帰りました。

小田川の川口は両岸が埋め立てとともにならずと沖になり水も、激んでいます。岸壁に腰をおろし半日海を眺めました。ときおり風の向きで、ポートレースの喧噪が聞こえます。誰にも会わず、何も語らずお昼過ぎ、ずっと立ち上がりパタパタ砂を払って、児島駅から大阪へ戻りました。ふるさは、ただ、やさしくやさしく心をいやしてくれたのです。

# 故郷の螢は消えた

山中 宮枝

高知県高知市

南予の山村の水田



(写真——愛媛県東京観光物産センター提供)

忘れられない春の麦畑

私の生まれたところは愛媛県の南予なんよと  
いって有名な米どころである。遠くに雄  
大な鬼ヶ城山が長い裾を引いて、大へん自  
然に恵まれたところである。戦前までは  
十一の部落からなつて二名村ふたなと呼んでい  
たが、戦後近くの町村が合併して三間町みまちょう  
というようになった。

私が子供のころは、米作りと養蚕が盛  
んな純農村で、勤め人といえば一部落に  
一人か二人くらいのものであった。それ  
も家では百姓をしていた。

恵まれた自然の中で生まれながらの野  
育ちの私は、四季おりおりの中での農作  
業や季節の移り変わり、春や秋の祭りな  
ど、みな美しい野や山と重なって、懐か  
しく思い出される。

それをみな書いていては果てがないの  
で、私はもっとも印象に残っているもの  
を拾ってみたいと思う。その忘れられな  
い風景や思い出が、今の子供達には到底

味わうことのできない過ぎ去った夢なのであるから……。

南予地方は南予と字では書くけれど、冬はいたって寒い。一冬の間に三十センチほどの雪が積もっては解けて、これを三回ばかりくり返さないと本格的な春は来ない。

三月になってようやく桃が咲き出すと、それを追うようにこぶしや木蓮が続く。四月に入ると桜が咲く。やがて菜の花やれんげが田圃を彩ってきだすと、春もいよいよよたけなわというわけである。こういうこともたしかに春の風情に違いはないのだけれども、私の頭に一番残っている春のけしきは、何といっても一面に続く麦畑なのである。麦畑こそ春の象徴だとさえ思っているくらい好きであった。

三月初め、固い凍った土にへばりついていた可愛らしい麦が、ポカポカとした陽気にふいと目覚めたように、一斉に活動を始める。雨でも降ろうものなら、ぴんと葉の先を立てて、もりもり養分を吸

い上げて、その背丈を競い出す。

五月、十分に太陽の光を受けて成長した麦は、次第に緑の色があせてきだすと、ツンとした茎の先に柔らかいピンと張った針のような長いトゲのある穂をつける。この穂が出揃ったところによく病虫害にやられる。やられた麦は穂のところが真っ黒になるのでよく目立つ。大人は、病氣におかされた黒い穂はほかの穂にもうつすから、みな嫌って、根から抜き取ってしまう。けれども広い麦畑にいちいちそういう手間はかけられないので、ほとんどは放ってある。子供はよくそれを知っていたから、大好きな麦笛を作るにはちょうど都合がよかった。

自分の家の麦なら誰はばかることなく畑に入ることができたが、子供はどこへでも出歩くから、いつもいつも自分の家の畑が手近にあるとは限らない。したがって他所の家の田圃のมือを出すことになる。が、子供は他所の田圃に入ること

くのをこっそり引き抜いたものである。

私は子供のころはよく男の子と遊んでいたので、この笛作りは隣の光ちゃんに習った。

先ず穂を引き抜くと、柔らかく大きな中ほどの茎を、十五、六センチくらいの長さに爪で切る。それはナイフなど使わなくても爪で簡単に切ることができる。今度はその茎の中ほどに、やはり爪で二センチばかり切り込みを入れれば、それで出来上がりである。上手下手はこの切り込みの加減できまった。黒い麦の穂は黒んぼと呼んでいたが、その黒んぼは畑の中にはいくらでもあったので、子供は手当たり次第に引っこ抜いて、何本も作った。

私はおおかた光ちゃんと一緒だったので、男の子に負けまいと作りに作った。そうして足元を茎でいっぱいにして、やっと気に入ったのができると、自慢気にピーピー鳴らして光ちゃんに見せた。光ちゃんは男の子のせいかな細工で、あま

りよく鳴らなかつた。それでも二人はピーピーやって、麦畑や菜の花の道をあてもなくほつつき歩いた。疲れると川の土堤に足を投げ出して、日が暮れるまで遊びほうけた。眼の前に蝶がヒラヒラしたりして、それは夢のような春だった。

### 待ち遠しい螢の季節

麦笛の季節が終わるともう六月になる。麦の穂が黄色く色づき始めると、蚕が上る(蚕が桑を食べなくなると繭を作る)ころと一緒に、農家はいいよ忙しいくなる。猫の手も借りたいとはこのころのことである。麦刈りが終わると、今度は田植えの支度だ。田植えは梅雨に合わせて仕事を進めなくてはいけないので、人々は道を歩いても、前かがみになってセカセカと行く。ついこの間まで黒々とうっとうしかった桑畑がすっかり裸木になって、そこらあたりが急に広々と見えると、何となく明るい気持ちになったものだ。

やがて梅雨になって、田植えが始まる。子供まで動員されるけれども、もうすぐ螢の季節だと思つと、気が浮き立って待ち遠しかった。

ある晩、ふと一匹か二匹の螢を見かける。二、三日もすると螢は無数に飛び交つて、初夏の夜を賑わすのである。日が暮れると、どこからともなく子供達が、手に手に長い竹ぼうきや竹笹などを持て川ぶちに集まつてくる。

螢は遠くに、近くに、そして頭の上をかすめるように飛んでくるので、せっかちな子供は飛び上がって手で押さえようとするが、それがなかなかむずかしく、すいとそれて逃げてしまう。やはり螢狩りは竹ぼうきか竹笹が具合がよくて、面白いほどにとれたりする。何も持っていない子は、草むらの中でチカチカするのをとろうとするが、これもまたむずかしい。草を分けてつかまえたかと思つと、光はすいっと草深く沈んでしまう。草をかき分けてやつとつかまえて歓声をあげ

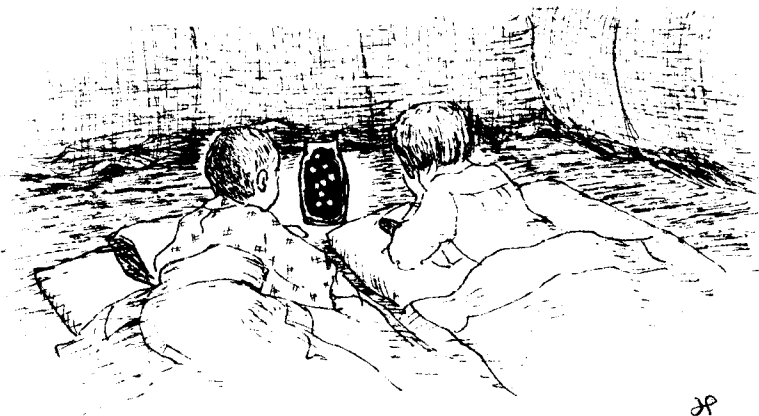
たりする。

質素な田舎の子は、店で買った螢かごなどを持っている者はめつたになかつた。おおかたは小さい葉びんを持ってくる。びんの中によもぎの葉を入れて、その中に螢を入れると、螢の黄緑がかった光とよもぎの緑がガラスを通して、何ともいえない美しい光を放つのである。

びんもかごも持たないで手ぶらでやってきた子供は、そこらあたりの葱畑からポンと一本手折ってきて、その中へ入れる。葱はねばねばした液が出て気持ち悪いけれど、螢が死ぬようなことはない。

この葱の光はまた格別である。螢の黄緑が葱の緑を透かして、びんとはまた違った一種妖しくやわらかな光になった。このほうがかえって美しかった。「ホーホーホータルコイ」誰かが呼んでいる。するとまた誰かが「ホーホー」とやる。賑やかに川辺を騒いでいた子供等もびんの中がいっぱいになると、潮が引いたようにいなくなる。チカチカと手元を光





✕

らせてあぜ道を歩いていると、闇の中にその光だけの輪廓が、まるで寶石をちりばめたように輝いて見えた。

私が家に帰ると、いつも母は、

「逃がしてやりよ」と言った。びんから今とったばかりの蛍を放ってやると、闇の中にすーっと光を放って飛んでいった。中には飛ぶ力がないのか、暗い足元に落ちるのがあった。

翌朝その蛍は死んで動かなくなっていた。

## コンクリートの川に

### 胸が痛んで

麦を作らなくなったのはいつのころからだろうか？ それは戦後もずっと後の、食糧事情がよくなってからのことである。それから今に至るまで、麦の混じったご飯を食べている農家ははいらないらしい。終戦後も細々と続いていた蚕も、全く飼わなくなったのは、高度成長の後からである。今どきそんな金にもならない仕事に、

忙しい目を見るような人はありやしない。農家のほとんどは町へ勤めに出ている。お百姓仕事はほんの片手間といった感じである。

桑畑の中へもぐり込んで、唇を紫色にして桑いちごをもいだり、麦畑の中でピーピー麦笛を鳴らしたことも、今ではすっかり遠い昔になってしまった。

私はときどき考える。私が幼いころに味わった自然の中の遊びを、現代の子は知らない。この子達が大きくなって、次の世代に何を残してやれるというのだろうか……。これはよけいな老練心かしら。

昨年の夏、私は二年振りで里帰りして驚いた。何に驚いたかというと、それは家の前に広がっている稲田の眺めであった。家の前の景色は向こうの山際まで広々と稲田が続いており、東から西に黒みがかった夏草におおわれた、幅一間ばかりの小川が流れていた。一本の緑の線であった。それが何と白々としたコンクリ

ートの長い帯に変わっていた。さらに驚いたのは、そのコンクリートの帯に沿って、小型トラックが通れるくらいの高いい農道が、緑の稲田の上に浮き上がるように見えたことである。

「すっかり変わってしまったのね」と母に言くと、「便利にはなるし、気持ちにはよかったが、蜚が一匹も飛ばんようになつたよ」

「一匹も……」

「一匹もおらんよ、あんなに川を塗りたくつたら蜚もおるところがないよ」

「谷にもいないの」

「ああどこにもいない、つまらん世の中になつたよ」

そう言う母は本当に淋しそうであった。夕方私は川辺に行つてみた。

母が言つたように、川底は上げ底のように高くなつて、セメントで塗りつぶされてた。兩岸はすべり台のような傾斜で、白々とセメントで固めてあり、それが夕日に冷たく光つて見えた。なるほど

これでは魚も蜚も棲める所ではない。

私が子供のころの川は、兩岸に茅やら灌木やらが茂つてた。川底には大きな石や、子供の頭くらいな石がごろごろしていた。私は夏になると、光ちゃんと一日中川に浸つてた。大きな石のある所は深く水が溜つて、フナがいたり水スマシがいたりした。流れのところで小石をそつとのけると、さつと水が濁るが、すぐ水に流されて、赤い沢がにが現われた。ときには一センチばかりの可愛い小がにがにょごにょごと這い出して、ギョツとしたりした。思い出は尽きない。

また、カラス目も忘れることはできない。洗い場の下の方のドブの中にあの貝はいた。大きいのは大人の持つガマ口ほどあつて、一つ見つけただけでも胸はずんだ。だが焼いてふたを開いて見ると、大きな図体の割に身が小さくて、がっかりもんであつた。そして味もあまりよくなかつた。

フナもかにも、水スマシも、もうこう

もセメントで固められては、再び見ることはできないだろう。

私は農道を歩いてみた。昔のあぜ道と比べたら、話にならないくらい広くて、真つすぐであつた。せめて舗装がしてないのが救いに思われた。

川や農道の改修工事は、大きな山まで崩している現代の自然破壊からいったら、本当に微々たるものかも知れないが、妙に胸が痛むのはなぜだろうか。

人はみな住みよくて便利に快適に暮らさなくてはいいけないのだから、これもやむを得ないことかも知れない。それを嘆くのは、ふる里を離れている私だけのエゴなのかも知れない。

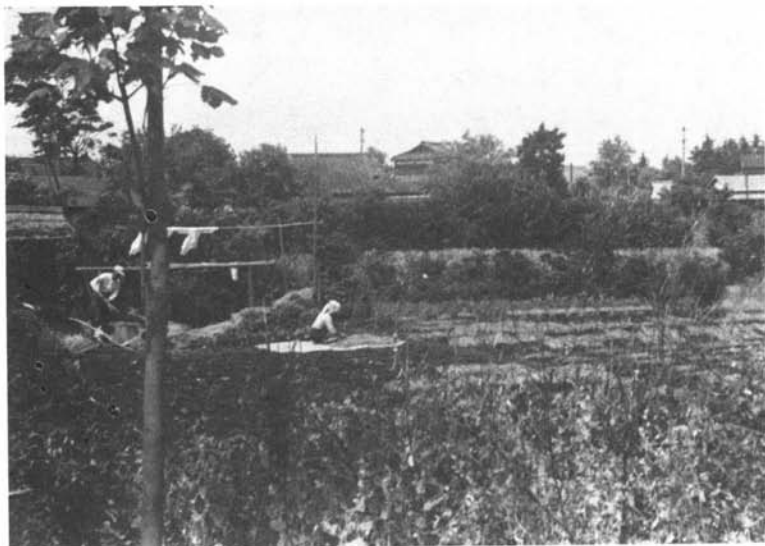
そうは言いながら、やっぱり私は昔の面影を追つていたのである。蜚狩りや麦笛の吹けるふる里が懐かしいのである。そしてそれをこれからの子供らに残してやりたいのである。

# 子供たちと赤マント

桜井 淳子

東京都世田谷区

田園住宅地だった昭和21年の目黒



(写真——目黒区役所広報課提供)

地価狂乱のふるさと

「坪、八百万円だって！」

母は溜息をつきながら話した。

「すごい！ン億の財産じゃない。でも買う人があつての話でしょう」

「欲しい人がいるんだって」

「売るつもりなの？」

「売りませんよ、でも相続税が大変なんだって」

「そんなこと、母さんが心配することないわよ。妙子姉さんのものだもの」

「そうだけど、考えると頭がおかしくなってくるわ」

東京の地価高騰のおおききを受けて、私のふるさと、目黒も地価暴騰に踊らされている。

姉妹ばかりだった実家には、現在、未だの妹夫婦が母と暮らしている。不動産は他家に嫁いだ姉名義。表通りに面し、隣は公園、静かな住宅地にある家は地の利

が良い。

税務署に駆け込み、中町一丁目にある  
実家の税務署査定の価格を聞いたところ、  
一・一平米四十八万円、坪価格百五十八  
万四千円とのこと。時価八百万円。

そのような現実にある私のふるさと。

タイムマシンに乗って半世紀ばかり前に  
戻ろう。

私は、まだ小学校に入っていなかった。  
昭和十二年ごろだったろう。

## 子供をさらう赤マント

当時、子供たちの間で噂になっていた  
のは、げにも恐ろしき赤マントであった。  
ここ、油面（あぶらめん）の子供達も  
例外ではなかった。

よると、さわると赤マントの話ばかり。  
姉たちが学校で仕入れてきた情報を、  
私は耳そばだてて聞いていた。

夕闇迫るころ、赤マントは町角から町  
角へと赤いマントをひるがえしながら走

っていく。途中に子供がいると、マント  
の中にくるみこんでさらう。

さらわれた子供は声を出そうとしても、  
マントの中なので、声が出せない。

さらった子供は、曲馬団へ売られたり、  
遠い満州や支那へ売り飛ばされるという。  
だから、夕方には子供は一人で外に出  
てはあぶない。

そんな噂話を身が凍るような気持ちで  
聞いた。

シルクハットを被り、顔はマントで覆  
っているのだから、チラリと見  
た子供の話だと、青ざめた恐ろしい形相  
をしていたと言う。

少年倶楽部に連載されていた江戸川乱  
歩の少年小説、怪人二十面相の変装に違  
いないと言う説までもとびだした。子供  
達は小説の世界も、現実と混同してしま  
う。

ある子供は、三角山で赤マントの後ろ  
姿を見たという。椎の木屋敷の角ですれ  
違った子供もいると言う。原っぱを風の

ように駆けぬけていったのを見た子供も  
いた。

私は怖かった。原っぱと続いている我  
が家は野中の一軒家だった。

当時の目黒は、新開地であり、たんぼ  
や畑の中に家を建てていた。空き地はい  
たる所にあり、草や木が自然に生えてい  
た。

三角山とは、すこしばかり小高い雑木  
林で、格好の子供の遊び場だった。



椎の木屋敷とは、大きな藁葺屋根の屋敷で、庭に椎の木が茂っていた。秋になると子供達は屋敷にこっそり入りこみ、椎の実を拾った。風の吹いた翌日などは、大きな袋一杯に拾えた。

拾った椎の実には洗面器の中で洗う。ガチャガチャと音を立てて洗い、水を一っばいに張ると洗面器の底に沈む。水面上に浮き上がっているのは虫食いか、でき損ないで食べられない。

ほうろくで煎るととても美味しく、子供達は、ちいさな固い椎の実の皮を石やトンカチで叩いて割り、中の実を取り出してたべた。味は栗に似ているが、もうすこし淡泊であった。

## 少年少女探偵団

ある小春日和の日、私は文子ちゃんと椎の木屋敷へ遊びに行った。垣根の破れた場所から小さな女の子が二人屋敷へしのびこんだ。

椎の実の落ちていた場所にたどりつく

と、いつもはしまっているはずの雨戸が開いていた。そして、やさしそうな老婆がにこにこして縁側に座っていた。

びっくりした二人を、老婆は縁側に呼んでくれた。老婆は奇麗な端布でお手玉を作っていた。中に小豆をさらさらといれると袋を閉じてお手玉のでき上がり。お菓子やお手玉を頂き、二人は満足した。

その後、雨戸は二度と開かなかった。あの椎の木屋敷のあたりに赤マントは出没している。

考えると私は眠れなかった。噂はエスカレートしていく。

男の子は、探偵団を作り、油面の町を赤マントから守ろうと相談した。

女の子も一緒に守りたいといった。

学校から帰ってくると、少年少女探偵団は原っぱに集まった。私も姉にくっついていった。

文子ちゃんも、彼女の兄さんの等君にくっついてきた。

子供達はそれぞれの役目を団長の清君から与えられた。

姉は斥候から報告された情報を、団員に知らせる役だった。

文子ちゃんと私はみそつかす団員にされた。それでもうれしかった。二人はビール瓶の王冠をアブチャン（子供が服の上から着る袖のない上っ張り）の胸につけてもらった。

薄暗くなった原っぱに、赤マントが出るといふ情報に探偵団は緊張した。団員は全員原っぱに集合した。

原っぱの草や葉は深みゆく秋の色に変わっている。枯れ草色の野に子供達は散っていく。冷たい風が吹き始めた。

原っぱのはずれに立っている松の木や枯れ木になった桜の木に、風はヒューヒューと音を立てて吹いた。

みそつかす団員の二人は、暗くなってくる原っぱの片隅で息を殺してうずくまっていた。

誰かが合図の口笛を吹いた。赤マント

が出たのだ。二人は震えていた。おたがいの手を握り締めた。汗でびっちょり濡れていた。

子供達の声があちらこちらからあがった。そして、声は遠くへ消えていった。長い長い時間がたった。

等君と姉の声がきこえた。

「文子／＼」

「淳子／＼」

二人は泣きながら兄や姉のところに駆け寄った。

子供達が赤マントと思ったのは、山高帽子を被り、二重回しを着た男の人を夕暮れの中で赤マントと間違えたのだった。暮れになり、町はなんとなくざわめいてきたある日。

団員の一人が椎の木屋敷の中に赤マントが立っていたと報告した。この前の失敗もあるので、団長は慎重に事を運ぶことにした。

私が得意になって話した、椎の木屋敷のことを姉が団長に報告した。



文子ちゃんと私は偵察に選ばれた。二人はいつものように垣根の破れた所から忍び込んだ。椎の木の前に立って堅く閉ざされた雨戸を見た。

怖さよりも、好奇心のほうが先にたっていたので、二人で雨戸をトントン叩いた。

「おばあちゃん、おばあちゃん、ここをあけてちょうだいな／＼」

雨戸は開かなかった。

団員達は、次々と屋敷に忍び込んできた。庭の隅から隅まで調べた。縁の下までもぐってみた。シーンと静まりかえっている屋敷からは猫の子一匹出てこなかった。

お正月になると子供達は、目の前の楽しい遊びに心を奪われて、赤マントのことは忘れていった。

幸子ちゃんの家には子供達は集まって、かるたやトランプ、家族合わせ、動物合わせなどに興じていた。

夕がたになり、すこし疲れた子供達は、二階の部屋から物干し台のほうをみてギョッとした。境のガラス戸に何かの影がうつっていたからだ。

「赤マントだ／＼」

みんなの顔色は変わった。

勇気のある義雄君が、そっとガラス戸によった。そして、思いきってガラリと戸を開けた。物干し竿に幸子ちゃんのお母さんの着物が冷たい風に揺れて人影のように見えた。

時が流れ、子供の世界にも、いろいろなことが起き、忘れられていく。

昭和六十二年、かつての私のふるさと、油面には、あの三角山も原っぱも、椎の木屋敷の面影だにない。あるのは、舗装された道、ぎっしりと並んだ家々。アパート、高級マンション等々。

ひろがる都 まちも新た  
目黒は開け 日に日に進む  
われらの体も のびのび強く  
うれしうれし われらは通う

油面

大空晴れて 富士もま近か  
かすみに雪に 朝夕仰ぐ  
われらの心も 清らに高く  
たのしたのし われらは学ぶ

油面

この油面小学校の校歌は現在でも、こ



のままの歌詞で歌われている。

地元の詩人だった、土岐善麿氏の作詞である。

昭和の初期、この地は校歌にあるように、新開地であった。人々は下町から、この地へ移ってきた。朝夕仰いだ富士の姿は、林立するビルの影でもう見えない。かつての田園地帯、のどかだったこの土地も、今や、地価狂騰に踊らされ、悲喜こもごもの話題に満ちている。

(え・早乙女光子)

## ★わいふバックナンバー

- 176号 わたしの恋愛体験
- 177号 肉親の老いを見つめる
- 181号 PTA・その苦しみと楽しみ
- 183号 特集なし (近代恋愛婚姻史)
- 186号 お医者さんを診断する
- 191号 集合住宅で生きる
- 195号 特集なし (私の昭和史)
- 202号 住めば都? 私のまち
- 205号 ある日曜日・夫婦の会話
- 208号 わが子の留学

四五〇円 以下同じ

送料は一冊二〇〇円、二冊三冊二五〇円、四冊六冊三〇〇円、七冊九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。  
Tel (〇三)二六〇一四七七一・四七七三

投稿ホットライン——能ある鷹は爪をかくす

# 職場は多面体

愛すべき職場——死角の部分に何があるか？

## 当店はマンガ図書館

東京都 匿名 (49歳)

有線放送から流れる「アースウィンドウ」の歯切れの良いリズムが「マイケル・ジャクソン」に変わり、続いて「マドンナ」が歌っている。

どれも激しく賑やかな曲だというのに、誰ひとり顔も上げず、話し声すら聞こえない。

注文したコーヒーを前に置いても暫く口をつけず、温まってしまった水を取り

替えに行っても気付かないくらい、それぞれがマンガの世界に浸っている。

全席ほぼ埋まっているというのに、こんなに静かな喫茶店は珍しいのではないだろうか。

この何年来、マンガブームであることは知っているが、目の当たりにして、これほど人々を熱中させるマンガの威力に驚き、それを描いている人達に脱帽する。

この店を始めたのが五年前。最初の一年ほどは珍しさもあって、ま

あまあの入りだった。二年目の終わりごろから、立地条件の悪さや、ファミリーレストランの林立も手伝って、下降線を辿りつつあった。

「マンガをたくさん揃えてみたら？」と言う夫のアドバイスに従って、コミック雑誌とシリーズものの文庫本を何種類か置いてみた。

同時にスポーツ新聞も三種類に増やし、硬い一般週刊誌を減らして、軟らかいものを置くことにした。

気が付くと、毎週決まった曜日に開店を待って入ってくるお客様がいる。

その日発売のコミック雑誌を見るためである。

スポーツ新聞も朝のうちは三種とも指定の場所にあることが少なく、スポーツ新聞を読むために来店するらしい人もいる。

男性客も女性客も、硬い雑誌や少々読



み応えのある本には見向きもせず、マンガ本を手にして席に着く。男性用、女性用コミック雑誌は、それぞれ数種置いてあるが、どの雑誌が何曜日発売で、その日出るのは何号、などというのは私よりお客様のほうがよく知っていて、「○○はまだ？」などと聞かれるときがある。毎日この人達を見ていると、日本中誰もがマンガしか読まないのではない、という錯覚に陥る。

開店当時、新聞は「朝日」「読売」「経済流通」、雑誌は「週刊朝日」「サンデー毎日」「週刊新潮」そして「文芸春秋」「婦人公論」などを置いていた。この中で今でも続けて置いているのは「朝日新聞」だけである。

週刊誌は一冊だけ硬いものを混せて、「週刊大衆」「週刊宝石」「アサヒ芸能」にしてから手に取ってもらえるようになった。

今、ベストセラーの「サラダ記念日」や、「ビジネスマンの父より息子への三

十通の手紙」なども置いてみたが、私の知る限り、それらを手にした人は三人だけである。

「わいふ」も残念ながら、パラパラッと捲るだけで、席へ持っていくまでには至っていない。

幼児連れの母親が、子供を放ったらかしでマンガに夢中になっている姿を見る

と、食わず嫌いでマンガを読もうとしない私でも、そんなに面白いものなら一度読んでみようかしら、という気持ちさえ起きてくる。

ただ今、当店には雑誌以外にマンガ六百冊ほど揃っている。

店名入りの看板を、「マンガ図書館」でも書き換えたほうがいいかもしれない。

(え・角南有加)



# 護』 日誌

彼女の身体は不自由かもしれないが  
彼女の心は私よりもずっと自由だ

東京都江東区 田口けい子

## その人との出会い

一九八五年の夏だったと思う。朝日新聞の「街」という小さなコラムに一人の障害者の記事が載った。「重度の障害を持ちながら、ボランティアに支えられ一人暮らしをしている女性」として私はそのときはじめて高木さんのことを知ったのだ。

そのころの私はフリーでライターの仕事をしていて、時間を自由に使うことができた。お調子者の私は軽い気持ちで「自分にできることがあれば……」と、朝日新聞に問い合わせの電話をかけてみた。介護をすることの重大さみたいなことを、私はそのときまだ全然実感してはいなかった。

担当の記者が電話に出て、高木さんから直接連絡をとるようにしますから、待っていてください、と言った。他にも多くの申し込みがあったというようなくちがりであった。

ボランティアはたくさん殺到したらしく、高木さんからの返事が来たのは翌年の夏のことだった。

一九八六年の夏、私は友人と二人で小さな編集プロダクションを設立した。私の生活は突然あわただしくなり、高木さんという障害者のことなど、私の頭からはすっかりふっとんでいった。

ある日電話がかかってきた。おかしい電話だった。いたずら電話だと思い私は二回その電話を切った。そして三回目のベルが鳴ったとき、ふと高木さんという障害者のことを思い出したのだ。受話器の向こうから聞こえてくる激しい息使いは変質者のそれとよく似ていた。「もしかして、高木さんですか」と聞くと、電話の相手はかすれた息で「ハ……イ」と答えた。

話の内容はほとんど聞きとれなかったが、来てほしいと言っていることだけかろうじて理解できた。ボランティアが足

# 私の 『ボランティア』

りなくなったらしいのだ。はっきり言って迷惑な申し出だったが（ま、いいか。一回だけ行ってみて、後は忙しいからって断わればいいんだ）、「じゃあ、水曜日にでも伺います」軽くそう答えて、私は電話を切ったのだった。

高木さんを初めて見たときのことを、私は今でも忘れることができない。彼女は不自由な体で、なんと私を駅まで迎えにやってきたのだ。

狭く、しかも車の通りのやたら激しい駅に続く坂道を（しかもこの道には舗道がない）、いまにもバラバラに解体してしまいそうなボロボロの電動車椅子に乗って、高木さんはよろよろとやってきた。遠目に見てもその車椅子はみすばらしくて、私はなんだか恥ずかしい感じがした。電動車椅子に座った高木さんはひどく小さくやせていて、糸のゆるんだあやつり人形のようなだった。電動車椅子は不安定にヨタヨタと揺れていた。その後ろから何

台もの車が車椅子をおおるように通り過ぎていく。危なくて見ておれない。

私は自分のほうからかけよって行って、「高木さんですね、田口です」と声をかけた。近くで見ると、さらにさらに車椅子はみすばらしくった。

高木さんは黙って、あいうえおが書いてあるビニールの文字盤を取り出すと、指で「オクレテゴメンナサイ」とひらかなを指さした。

「いいえ、気にしないでください。だいじょうぶ」と私は緊張して答えた。

彼女は黙って車椅子をユーターンさせた。「あの……、車椅子押しましようか」と私が言うと、彼女はまたも動きを中断して文字盤を取り出し、

「コレハデンドウクルマイスタカラダイジョウブ」と指さした。それで、私はしかたなく彼女の車椅子のあとをチョコチョコと付いていったのだった。

電動車椅子をあやつる高木さんは、向かってくる車なんかものともしない。ひけ

るもんならひいてごらんさいよ、と言わんばかりの気迫が感じられた。思えばこのときからすでに、私は彼女のペース、彼女のパワーに巻き込まれていたのかもしれない。

## はじめて経験した「介護」

断わるつもりで出向いたのに、週一回来てほしいという彼女の頼みを私は断われなかった。優柔不断なせいもある。だが一番の理由は、高木さんの生活に対する気迫に圧倒されたのだ。半分逃げ腰で、半分は不安。それが私の「介護」の中身だった。

いつか機会をみつけてやめちゃおう。そう思いながら、私は機会を見つけてることができないまま、一年が過ぎた。よくぞまあ続いたものだと思っても不思議に思う。会社のパートナーたち、主人、看護婦の友人Yさん、いろんな人の助けがあつて、やってこれたというのは言うまでもないが、なにより私をひきつけたの

は、高木美鈴という障害者の人間的魅力だと思ふ。私は彼女と付き合うことによつて、今まで知らなかったたくさんの自分を教えられたのだ。

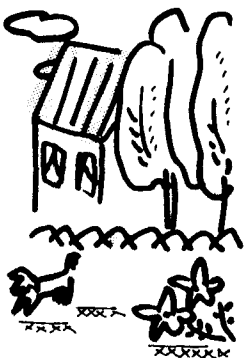
私は自分自身のことを、どちらかという人に対して偏見のないほうだと思ひ続けてきた。だが、高木さんにつき合うようになって、いかに自分が独断と偏見にみちみちた人間であるかを思いしらされることになった。

たとえば、高木さんの部屋には私の家にはない電化製品が所せましと置いてあつた。電子レンジ、加湿器、空気清浄器、電気カーペット、などなど。そして、私はこれらの電気製品を見て心の中でこうつぶやいていた。「私ですら持っていないものを（障害者の）この人が持つてゐる。私はなぜ、障害者は貧しくなくてはいけなないと思つてきたのだろう。よくよく考えてみれば、こうした文明の利器は、高木さんのような身体の不自由な人のため

にこそ利用されるべきものなのだ。

「障害者ハ性欲ガナイ、ト思ッテル人多イワヨ」と高木さんは言う。性欲がないとまでは思つていなかったが、彼女から健康者と結婚した障害者の話をきいて、意外に思つたのは事実だ。障害者は障害者同士で結婚するのじゃないか……、そういう思い込みが私にはあつた。とにかく、私の頭は障害者に対してまだ暗黒時代だったのだ。

これらの偏見がじゃまをしてか、初めのうち私には高木さんの表情が読めず、彼女の声もほとんどききとれず、文字盤



を使つてのコミュニケーションさえあまりうまくいっていただけと言えない。まず、私の側に彼女に対する勝手なイメージと、なにやらわけのわからぬ恐れのようなものがあり、彼女とどう接していいのか見当もつかなかったのである。

「介護っていうのはさ、これでいいってことがないのよね。自分がやろうと思えば限りなくやることはあるわけ。で、いやいややって手を抜こうと思えばそれも限りなく手を抜けるわけ。ただ、限りなく手を抜くくらい嫌だったら、その人は他人の介護をしようなんて思わないほうがいいわね。介護されるほうもするほうも不幸になるだけだから」

と言ったのは看護婦をしている友人のYさんである。

「介護っていつでも、何やっていいかわからないんだよね」  
と私が言うと、

「そりゃああなた、自分がしてもらって

気持ちいい、と感じることをしてあげればいいのよ」

なるほど、そういうものかと、このとき私はいたく感心してしまった。だがさて、自分に気持ちのいいことって何だろう。いろいろ考えてみて、私は美容院に行つて洗髪するとき、首にあてがつてもらう蒸しタオルが実に気持ちのいいことを思い出した。で、次に行ったとき、私は彼女の首や顔を蒸しタオルできれいに拭いてあげたのだ。

首を蒸しタオルで拭いてもらったときの高木さんは、えもいわれぬうれしそうな顔をした。

「アア、イイキモチ、アアイイキモチ」

彼女は何回もそう繰り返した。高木さんの身体はまるで子供みたいに小さくて瘦せていた。あまり気持ちよさそうにするので、私は彼女を裸にして身体中をくまなく拭いてあげた。彼女の身体にしっかりと触れたのは、通いはじめて二か月が過ぎたころだったが、このとき私はは



じめて、介護をしている自分自身にも満足感を覚えることができたように思う。身体を拭いていながら、彼女の心地よさを私もいっしょに共有できたのだ。

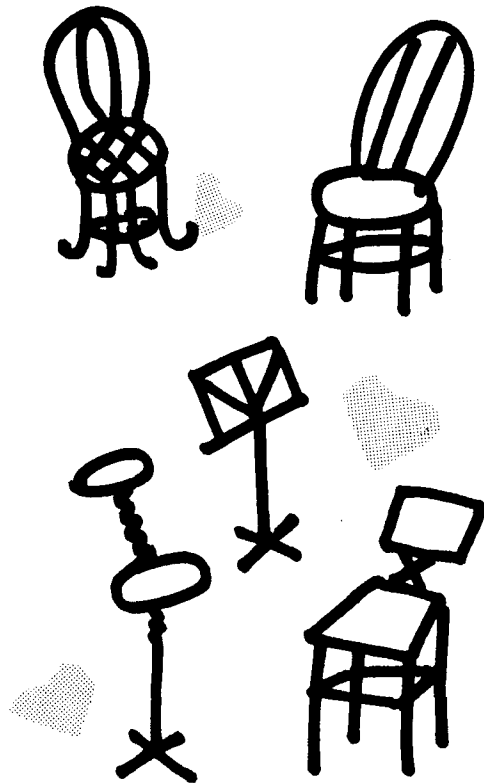
## 一人で生きられない人のために誰が?

介護をはじめて何が一番嫌かって、雑用を申しつかるときである。たとえば、急ぎの仕事の途中にぬけだしてやってきたときに（もちろんこれは私の都合にすぎないのだが）、夏物と冬物の衣類を繰入れ替えをさせられたことがあった。彼女

のためにあけてある時間なのだから、その時間はどう使ってもいいわけなのだが、仕事のことを思うとイライラしてやりきれない。(なんで私が他人の衣類の整理をしなきゃなんないのよ……) 会社で働いているパートナーのことを考えると、申し訳なくて涙がでた。帰りの電車の中で「もうやめよう。こんなことはもうやめてしまおう」とつぶやきながら帰ったことを覚えている。

精神状態の悪いときは、私はいつも高木さんから自分の時間をむしり取られたような気がしていた。自分の気持ちが少しでも消極的になってしまったら、その瞬間から介護は苦痛なものに代わってしまう。そして一度そうなってしまうたら、介護はそこから何一つ得ることのできない不毛な行為になってしまうのだ。

ガラス戸のさんを掃除する、留守番電話のテープをふきこむ、手紙の宛名書き、新聞を読む……。私が何の苦もなくできることが、高木さんにはできない。食器



の並べ方、台所の整理の仕方、食事の味つけ……。誰もが自分の責任において自分なりにこだわることを、高木さんはこだわるのが難しい。もしこだわろうとすれば、誰かにそれを依頼するしかないのだ。

「イロイロ、気ニナルコトハアルケレド、

ソレタイチイチ介護者ニ言ッテイタラ、  
誰モ来ナクナツチャウカラ、コツチモガ  
マンシテルノヨ」

毎日、部屋にいて自分の思うように部屋が整理されていないというのは、どういう気持ちだろうと思う。だがやはり、彼女のこうしたやりきれなさに気づくまで

に私は一年かかってしまったのである。

「その人そんなに障害が重いなら、どうして施設に入らないの」

と、ある友人が私に言った。

この質問を私は実に多くの人達から受ける。そして、私自身はまだこの問いかけに対して明確な答えを持っていない。なぜなら、私は一年たった今でも行きたくない、と思う日が多いのだから……。

一九八五年の夏、朝日新聞を見て介護を申し出てくれた人が三十三名いたそうだが、現在まで続いているのは、私とあともう一人、松戸から通ってきてくれるOLの女性の二人だけ。他の人達はなんやかやと理由をつけて来なくなっていた。

「デモネ、私ハネ、一度デモ来テクレタコトノアル人ニハ、必ズ年賀状ト暑中見舞イヲ送ッテイルンデス。私ハイツモ心ヲ開イテ待ッテイマス。アナタノコトヲ忘レテイマセンッテ、デモ返事ヲクレル

人ハメッタニイナイワネ」。

## 人生の不公平さを握け 合う社会にしたい

今また高木さんはかなり深刻な介護者不足に直面している。特に水曜日と土曜日と日曜日は決まった介護者がいないので、高木さんは毎日電話をかけまくり、来れる介護者を探している。もし、誰もこれないときは、彼女はパンをかじって食事を済ませ、掃除をしていないちらかった部屋で、誰とも話をすることもなく過ごさなければならぬ。

本当は昼と夜、一日に二人の介護者が来てくれるのがベストなのだが、昼の介護者は月、木、金しか来ない。今、残っている介護者のほとんどが千葉や松戸、多摩などの遠隔地に住んでいて、会社の帰りに高木さんの家に寄り介護をしてから帰宅する。やはり、都内のそれも世田谷区周辺の方で通ってくれる人がいてくれたら……とつくづく思う。

「ワタシノトコロニ来テクレルノハ忙しい人バカリ。トテモ介護ナンテスル暇ノナイヨウナタチガ、時間ヲツクッテキテクレテル。学生ハ一人シカイナイワ。ナンデカシラネエ」

でも私は時間がないからこそ、みんな高木さんのところに来るのではないか、という気がするのだ。毎日の仕事に追われて、本当に自分で選択したことは何だったのか、そんなことすらわからなくなってきた、どんどん消耗していく。忙しいときこそ人は自分を見失いがちになるところに来ることで、自分を回復し、自分の心と対話している。

介護によって仕事で消耗するような疲れ方は不思議としない。私が介護しているにもかかわらず、高木さんから支えられている……、そんな感じがすることもある。私は確かに高木さんからも何かをもらっている。それは目には見えないけれどとても大切なものだ。

だが、こうして書きながらも、私自身まだなぜ彼女の介護に通っているのかよくわからないし、これから先、何年経ていけるのかもわからない。今おぼろげに思うことは、障害のある人も、健康者も、はくちも、老人も子供も、さまざまな人間がよりあつまって生きてくほうが楽しそうだってこと。

そして、やはり高木さん一人を生かしていけない社会なんて、健康な社会ではないということ。そう、ある意味で高木さんは現代社会に対して、たった一人でテロしているのかもしれない。

高木さんは元気で頭の良い人だ。熱血漢で人情深く、勝ち気でおしゃれで、たまに落ち込むとキムチを食べながらお酒を飲む。「病氣ニナツテモ田舎ニハ帰ラナイワ。ダツテ親モ四十近イ娘ヲ引キ取レナイデショウ。ミンナフツウハソウシテ生キテイルワケダシ、具合ガ悪クナッタカラッテアナタ田舎ニ帰ロウト思ウ？」

脳性小児まひの障害者は生きてても五十



までだから老後の心配はあまりしていないのだ、と高木さんは笑う。

「私ヨリ母親ガソロソロ危ナイノ。ダカラ昨日喪服ヲ買イニイッタンダケド、親ノ葬式ノタメニ喪服ヲ買ウナンテヤリキレナイモノガアルワネ。ドンナ親デモ親ハ親ダモノ」

人生には、どうにも解決のつかないやりきれないことがたくさんある。彼女は私にそのやりきれなさを思い出させる。私にとって、重度の障害を持つ彼女もまたやりきれない不条理な存在だ。だが、彼女は誰も答えてくれない人生の不公平を、しっかり背負って歩いていく強さを持っている。その姿は、私にとって救いであり、大きな励みだ。

「人生ナンテ、悪ク考エタラキリガナイ」  
彼女の身体は不自由かもしれないが、彼女の心は私よりもずっと自由だ。

彼女は自分が何を望んでいるかを知っているし、その望むことを生きていこうとしているのだ。全生命をかけて……。

(え・カテスラネンコ)



## ●高木美鈴さんの生いたち

昭和二十五年七月十七日、高木美鈴さんは大阪の千里ガ丘に生まれた。生まれながらの脳性小児まひだった。

「気がついた時は、もう人と違ってた」と彼女は言う。障害者を子供に持った高木さんの母親は、極力、高木さんの存在を世間から隠そうとした。世間体が悪いという理由で……。いや、理由はそれだけではないだろう。このような重い障害を

持った子供は、とてもふつうの子供のように

生きてはいかれないだろう、という盲目的な愛情からだったかもしれない。とにかく、高木さんは母親の一存で、学齢期に達しても学校へも施設へも行かず、ほとんど家の中に隔離された状態で十六歳まで……。十六年を過ごした。

十七歳になって、彼女は初めて家を出て大阪の施設に入る。そしてその後の十三年間を高木さんは大阪と千葉の施設で過ごすことになる。施設の生活は障害者から自

主性を奪っていく。朝は早くから

起こされ、食事はまずく、おふろは週二回。くる日もくる日も、犬猫のようなアルミの食器でごはんを食べ、特に千葉のホームでは十年間ひたすら単純労働（スウェーデン刺しゅう）を強いられた。

だがこの施設で、彼女は多くの友人を得、障害者として自分はどう生きたらいいのか、何をしたらよいのかについて考えるようになった。本を読み、集会に参加し、

高木美鈴さんのボランティアを募集していただきます。都合のよい時間に、高木さんを助けていただけませんか。月に一度でもよいのです。あなたの力を借して下さい。田口けい子

## ●連絡先

〒155世田谷区代田四一三〇一二  
サンハイツ代田一〇八号

高木 美鈴

(ハガキにてご連絡下さい)

介護を拒否されるということは高木さんのような重度の障害者にとつて死ねと言われているのと同じである。彼女はもうこれ以上はこの施設にはいられない、と感じ、やはり施設を出たがっていた障害者の友人二人と、かねてから望んでいた共同生活を始めることを決意。千葉の検見川にやっと一軒の貸家をみつけ、三人のあたらしい生活が始まった。だが……。

共同で生活しようとするや

葉を離れて一人で暮らすとなると

新たな介護者を見つけねばならない。他人の世話にならなければ生きていけないのが障害者の宿命だが、高木さんはもうこれ以上のがまんができなかった。無理を承知で、高木さんは世田谷代田にアパートを借り、引っ越しを強行したのだった。

高木さんは自分でタイプを打ち、わらばん紙に印刷した「介護者募集」のビラを持って、毎朝毎朝、

世田谷代田の駅前まで電動車椅子で通い、道行く人達にビラを配った。とにかく介護者が必要だった。

りお互いのエゴが出る。しかも常に他人の介護が必要な障害者はプライベートルーム部分を守ることが難しく、相手の嫌な部分が、よく目についてしまふのである。また、障害者同士で住んでいることを知って、地区の民生委員が嫌がらせをしてやって来た。障害者は隔離しておかないと、普通の市民の迷惑になるらしいのだ。

高木さんは、千葉での人間関係に疲れ、共同生活に絶望した。千

ある日、どこからか噂をききつけて朝日新聞の新聞記者が取材にやってきた。彼らは高木さんの話を聞き、それは「街」という小さなコラムになって翌朝の朝刊に掲載された。

これで、介護者が来てくれるだろう。高木さんはほっと胸をなでおろした。一九八五年の夏の終わりのことである。

それから二年……。

# うちの悪ガキ

うちの子に限って！の大集合。汝の敵を愛すべからず…

## 一回だけの言葉

埼玉県羽生市 たかのようこ

何度めかの登園拒否です。マイペース

派の次男は、運動会や発表会のように並ばされたり同じことの繰り返し練習は苦手で、その時期は「休みたい」が口癖です。

三年前長男は、入園から夏休み以後も「こわいよォ」「たすけてェ」と、別れ際に泣き叫びました。幼稚園を選ぶとき、評判や条件・状況を考えて決めたのです

が、長期間泣かれるのは計算外でした。

そのころ、三歳と一歳の子どもの毎日アップアップしていた私は、長男の入園で子どもが一人になった解放感を失いたくなくて、「帰りはケロッとしているのだから、『別れの儀式』なんだ」と言い聞かせ、「あの幼稚園だから合わないんだ」と思い込み、ついに半年で転園させてしまったのです。



いま思えば、経済的にも精神的にも無茶苦茶なこと、私にとって苦しい思い出ですが、次男は嫌がっても泣かない分力は強気で、ともかく通園バスに乗せていました。いつになく何度も食い下がる次男に、いつか使ってみたいなと思っていた言葉がフツと出ました。

「休みなさい」——その言葉はNHKラジオの教育相談で、登校（園）拒否についての相談者への答えの中でよく聞かれます。

L.イリガライ／棚沢直子他訳  
**ひとつではない女の性**

〈女性的なもの〉を追求  
した現代女性解放思想  
の極北。 2700円＋300

N.ソコロフ／江原由美子他訳  
**お金と愛情の間**

マルクス主義フェミニ  
ズムの展開 女性労働  
の徹底分析 3800円＋300

R.リジェストローム他  
横村久子訳

スウェーデン／  
**女性解放の光と影**

女と男の新しい役割。  
2200円＋300

スタンレー、ワイズ  
矢野和江訳

**フェミニズム社会科学  
に向って**

経験と意識を解明。  
予2500円＋300

津久井佐喜男

**生活科学としての  
心理学**

生活心理学から「いの  
ち・くらし・生きがい」  
を追求。 1800円＋250

シャーマン、ベック編  
田中和子編訳

**性のプリズム**

解放された知を求めて  
女の視座から知を書き  
換える。 2600円＋300

 **勁草書房**

東京都文京区後楽 2-23-15  
☎ 814-6861 振替 東京5-175253

長男が幼稚園のときと違い、いま私は  
パートに出ています。急に決まったこと  
で仕事も休めず、「ピンポン鳴っても  
出ない」「電話も出ない」「テレビとお  
もちゃ以外は触らない」と指示して家  
を出たものの、落ち着かない半日でした。  
泣き叫ぶ長男を送り出したときも憂う  
つだったけれど、休日でも病気でない  
ときに家にいる次男のこれから憂うつ  
です。登園拒否のたびに、「休みなさい」  
と言えたら子どもも親も無理しなくて済  
むから、きつと心が軽くなると思ってい  
たのにです。この重苦しさは何故でし  
う。

私は小学校四年生のころ、「足が動か  
ない」と言って、父の勤務する病院に入  
院したことがあります。原因は何だった  
のか、本当にそうだったのか、記憶の断  
片しかないのですが、父も母も私に詰問  
することもなく二週間ぐらい、私は病室  
で「東京オリンピック」を見て過しま  
した。そしてある日、担当医に「足が動  
くようになった」と見せて退院し、再び  
学校に通い始めました。  
私の一度の登校拒否らしき経験から、  
学校の中に（先生や友人も含めて）魅力  
があれば、自然に戻っていくはずで  
す。一日休んで好きなテレビを好きなだけ見

て兄に支配されずおもちゃで遊んだ次男  
は、パートから帰った私にルンルン元氣  
で「あと十やすすみたい」と、思わず「か  
あさんね、お休みじゃない日に、しげと  
が家にいると心配で心配でお仕事できな  
い。きょうもドジってばかり、お願いだ  
から幼稚園に行って」と、考えとは別  
の本音が出てしまいました。  
次の朝、次男は「あとこんだけやす  
みたい」と片手を出す、  
「気の済むまで  
休みなさい」と言えない私を見ると、「い  
いの、いいの」と手を振って、園服に着  
替え始めました。

（え・角南有加）

# ワンポイント情報 15

## こうして語学をモノにした



### 夫をのしり七転八倒

東京都板橋区 志賀壽美子（44歳）

三十七歳でドイツ語を学び始めたのは、夫が西独の奨学金を得て留学することになったからである。

くのは嬉しかったけれど、今さら新しい言葉など勉強したくはなかった。

「少しは勉強したら——」夫の勧めで、ラジオのドイツ語講座を聞き始めたが、<sup>アベツエ</sup>ABCも知らない私は全然ついていけない。外国へ行

現地でドイツ語がひとこともできないようでは自分にかかる負担が多すぎる、と考えた夫が、一計を案じた。夫はマンハイムのゲーテ

・インスティテュートで、四か月の語学研修を義務づけられていたので、妻も同じ学校でドイツ語を学べるように手紙を出したところ、快諾の上、学費まで出してくれると返事がきた。

五十五年九月一日から授業は始まった。クラス分けの面接時には、助けを求めて夫にばかり顔を向けた。夫は「初級I」からスタートすることになった。授業は週五日制で、三日間は午前八時半から十二時半までだが、あとの二日は二時間の昼休み



をはさんで、さらに午後四時半まで続く。このペースで四か月間といえ、週二日、二時間の授業時間に換算すると、二年分に相当する。

最初の二か月間は毎日が楽しかった。世界各国から集まってきた二十名のクラスメートは、個性的で魅力たっぷり。自己主張が強く

日本でははみ出し者の私も、最年長の貫禄を示し、成績もつねにトップ。テキストはドイツで生活できるように構成されていて、会話中心なのも助かった。

その上実際に生活もしているから、食事、買い物、乗り物、銀行、パティなどの機会に現地の人達のドイツ語が耳にとびこんでくる。行動や表情が伴う言葉は、聞きとればすぐに覚えられるので、全身を耳にして聞きとるクセがついた。

学校で主催した秋のライン川下りと古城見学、市内の名所旧跡や美術館めぐり。二人ででかけた劇場音楽会。大家さんもお茶や食事に招いてくれ、知人宅訪問のときも連れていってもらった。すべてが学習の場である。

二か月経って十一月となった。「初級Ⅰ」終了試験は「大変良い」だ

ったから、意気揚々と「初級Ⅱ」へ進んだが、初日から仰天した。

新しい単語が怒濤のごとく押し寄せ、たちまちのうちにオチコボレの心境をあげわうことになった。

参加者はドイツでの生活体験の長い人が多い。たとえ初めての言葉でも、母国語と似ているから連想が働く上、覚えやすいと言う仲間に嫉妬を感じた。抽象的な単語は、

そうでなくとも暗記しにくいのに、家に帰っては机にかじりつき「もうやめる——」とふてくされたり、手伝ってくれる夫を、こうなったのもすべて夫のせいと恨めしく思い、ののしりながらの七転八倒。そうこうしているうちに十二月を迎えた。街を流れる川面からは霧がたちのぼり、寒さで耳はちぎれるほど痛い。凍てついた道路はすべり易く、転んだときも夫にあたってしまった。ドイツの冬は厳し

い——。

それでもどうにか最後の初級終了認定試験は合格した。試験の採点は五項目あり、成績の順序は「聞く・話す・文法・書く・読む」だった。「中級」に在籍して二か月前に同じ試験を受けた夫は「読む・書く・話す・文法・聞く」の成績順で、二人では正反対の結果がでた。

語学研修の四か月も終わりに近いころ、次の赴任地で住居探しをした。私達の出した新聞広告に応募してきた物件を、夫と見てまわった。最初に訪ねた大家さんは人の好きそうな老夫婦で、家賃を初めとする話にあいづちをうつのは、もっぱら私だ。話し終わってからその老人は私に言った。「今の話をあなたのご主人に通訳してくれないか」

その後二年間ベルギー、オランダ

国境に近いアーヘンに住んだ。ドイツ語をものにしたなどというに

はほど遠い段階だが、とにかく生活し、人との出会いや会話を楽し

めるようになったのは、のっぴきならない状況に身をおいたからだ

と思う。

## ユースホステルに住み込んで



①英語 中学・高校・大学での授業をまず熱心にやった。大好きだった。NHKの講座も聴いた。成人した後、青年海外協力隊に参加したとき、派遣前訓練で語学研修四か月。これが効いた。合宿形式で一日中、文法・会話とネイティブ・スピーカーの先生たちによつてきたえられた。夢にまで英語が出てきて、同室の人が言うには、英語の寝言を言っていた由。その後二年間、アフリカの馬拉ウイで仕事を（英語を使って）した。かくて、文書作成から電話までできるようになった次第。

「語学」というと抵抗があるけれど、とにかく私のかじった異言語は①英語、②ドイツ語、③デンマーク語、④チェコ語、その他。このうち読み書き会話電話までできるのは英語、やや苦勞しながらできるのがデンマーク語、読むことと買い物くらいできるのがチェコ語、といった「モノ」になり具合です。

②ドイツ語 大学で初めて学び、専門課程で原書講読をした。他にこのゼミを取った学生がいなくて、

先生ひとりに学生ひとり。毎時間きっちり、やれるとこまでやらされたので、脂汗たらしつつも、だ

いぶ身についた感じ。NHK講座も聴いたが、会話のほうはモノにならなかった。

③デンマーク語 デンマークの田舎のユースホステルに四か月住み込んで、自力で習得。全く未知の状態から始まり、ひとつひとつ言葉とモノとをつき合わせてはまわりの人々から教わり、カードに記して覚えていった。日本から送ってもらった入門書も続んだ。帰国後も、世話になった人たちとの手紙のやりとりのため、英語⇄デンマーク語の辞書と首っ引きで手紙書き、読み……でなんとかやって

いる。

④チェコ語 日本人補習校の教師の仕事で、一年間プラハに滞在。買い物などの必要に迫られ、チェコ語教室に通った。チェコ人で日本語の話せる先生だったことと、生徒というのが日本人主婦ばかりだったので、あまりがむしゃらにならず、ダメ。そして文法のむずかしさにだんだんついていけなくて、買い物とあいさつ程度（それも身ぶり手ぶりまじえて）にとどまる。

以上ですが、要は言葉に関心をもつこと、短期に集中徹底してやること、実際に使うこと、の三点につきるような気がします。あれだけ使いこなしした英語もその後十

東京都日野市 服部 深雪

年間、使わずにいと、忘れてい

ます。しかし、いったんモノにし

たものは、また使っているとよみ

がえってきますが……。

## 英語は生甲斐

神奈川県 畑 世津子

「英語なら私におまかせ！」と胸を張って言えたらどんなに嬉しかろう。英語が好きで長年勉強し、また、教えてきたのに、道はまだまだ遠く勉強しなくてはいけないことがいっぱい。まあ、だからこそ面白いのかもしれないが……。

先ず、私の英語に関する略歴。

学生時代は英語はあまり得意ではなかったし、大学の専攻は英語ではない。二十二歳のある日、偶然松本亨先生のラジオ英会話を聞き、突然英語に目覚める。もっぱらラ

ジオ、教育テレビの英語番組、中学、高校の教科書で勉強（当時は田舎に会話学校もなし、ガイジンも見たことはないくらいのもだった）。二十五歳、英検二級合格。結婚後、育児の間も暇を見つけて、

FENのドラマ、グループ英会話、通信教育などで勉強を続ける。三十五歳、英検一級と通訳ガイド国家試験に合格。当時より中学生、後に高校生も自宅で教えて現在に至る。

今もテレビの二か国語放送、英語の小説、英文創作コースでエッセイなど書き、勉強は楽しみながら続けている。そうしないと忘れそうだし、進歩もしないと思うから経験上効果のあった方法。

先ず英語を好きになり、映画、カセットを聴き、小説も読み、英語に親しみ楽しむこと。生徒を見ても易しい英語の小説を読んだり、カセットを聴いて楽しんでいる人は必ず伸びる。

次に、英検などテストを受けるこ

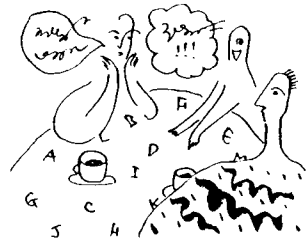
と。生徒は必ず受験。励みになる。また、ヒアリングの力をつけること。生徒はラジオの基礎、統基礎英語、英会話など実力に応じて聴く。聴いた人と聴かない人の進歩の差は大きい。聴いて分かるとい



うことは、英語を英語として理解できるということであるから、速読即解もできるということになる。外国語は、逐一訳さないで理解す

ることが大事（大学入試の長文読解を訳しながら理解しては、時間が足りない）。さらによい方法は、高校生に英語を教えること。大学入試には高度なものもあるので、教えるほうもつねに勉強していなければいけない。従って実力もつく。また、英語で文章を書くの力がつく。文通、日記、エッセイなど。英作が速くできるということは、会話力にも通じる（英作文のできない人が英会話を習っても、上達が非常に遅い）。

最近、一番良いと思っている方法は、家族どうして英語で話すこと。ときどきでいいし、簡単な文だけでも効果がある。これは最初は勇気がいるが、照れくさがなくな



きるし、英語に慣れ、英語が非常に身近に感じられるようになる。会話も結局は「慣れ」なので、これによって英文が比較的早く口をついて出てくるようになる。

さて、英語をある程度習得したメ

十回のレッスンより十日間の滞在

夫の在外研究に子供二人を連れ同行し、西独、フランクフルトに一年間滞在した。「一年間といつても、あつという間にすぎるから、なるべく早めに行動を開始するこ

リットは、言わずと知れたことだが、外国へ行ったとき便利だし、安心もでき、その国の人達とも話ができ旅がより興味深くなる。また、子供の勉強にも役立ち、信頼されるのも気分は悪くない。映画を聞いて理解し、小説を原書で読む楽しみもある。

さらに、高校の教科書、問題集の英文は、高名な人達による優れた内容の文が多いので、興味深いし読むと少し賢くなるような気さえる。また、勉強を通じて、尊敬でき鼓舞されるような素晴らしい人にとときどき会えるのも嬉しい。

と」という先輩の忠告に従って、到着して二週間目、市主催のドイツ語講座の申し込み受け付け開始と同時に申し込みに行った。

それに、好きな英語で仕事ができるのは有難いし、生徒が上達するのを見るのも楽しみだ。人の役に立つのも嬉しい。

幸いなことに、家族が皆英語好きなので、ときどき英語で話し合ったり、英語の勉強法について話し合ったり、家族間のコミュニケーションとしても大いに役立っている。また、英語をある程度習得したことによって、自分自身に少し自信がついた。勉強は続けていると少しずつでも上達するので楽しい。それに奥が深く、いくらでもやることはあり、退屈ということ

が一度もない。

外国旅行兼研修を計画したり、英語仲間で作るの英語劇を演じたりするのも楽しい。いつの日か英語好きが集まって英語サロンみたいなものを作り、英語でおしゃべりしようとか夢も広がる。

今、振りかえってみると、英語を勉強したおかげで、いろいろのチャンスに恵まれ、心に残る人達にも会えたし、自分も少しは成長したように思う。英語に興味を持って、ほんとうに良かったとつくづく思う。これからも、英語とは一生付き合っていくつもりである。

福岡県久留米市 島村 雅子





二週が一期となっていて、費用は一期八十マルク（約六千四百円）。その他、テキスト代が四十マルク（約三千二百円）。

申し込みに行くともまずテストをうけさせられ、その結果でクラスを指定される。基礎コース一、二、三、四とあって、私は二のクラスをうけるようにいわれる。が、このクラスの九月開講のものはすでに満員で、十一月開講のクラスに入られる。

最初の授業に行ってみる。二十人の生徒中日本人が九人。全員企業駐在員の妻。他は米、仏、中国、韓国、トルコ、グアテマラ、アルゼンチン。授業方法はテープを多用。後、生徒同士の応用会話テキストはきわめて実用的な話ばかり。面白いのは、けんかをしたり、相手を非難したり、腹を立てたりする場面のあること。クラ

スも先生もいい雰囲気で和気あいあいの授業。

二月にこのコース終了。証明書をもらい、すぐに次のコースを申し込み、四月から基礎コース三の授業開始。同様にして受講し、七月にコース三終了。私の滞在は八月末から翌年八月末まで。講座をうけたのは二コースあわせて正味六か月だが、一年では二期しかうけられなかった。他に短期集中コースもあったが、毎日授業なので、子連れの身としては無理。

この間、住んでいたところは大学のゲストハウス、住人は外国人ばかりで会話は主に英語、管理人兼掃除の人達との会話はドイツ語のみ。最初のうちは彼らとの用事はもっぱら夫まかせであったが、最後のころはどうやら勤を働かせて、いつていることがわかるようになった。

他にフランス語講座にも出て、ここでドイツ人女学生と友達になり、彼女の家に何度か招待され、両親達とも会話、どうにかコミュニケーションできたと思う。残念ながら彼女とつきあいだしたのが帰国一か月半前。この間、集中的に会ったが、もっと早くからつきあっていたれば会話も上達しただろうと思う。日常的には、市場などでの買い物で数字をききとるのは二か月目ぐらいにできるようになった。日本での私のドイツ語歴は、友達から十年前文法を習ったあとドイツ語とは無縁。今回渡独前にベリリッツで個人レッスン十回受講（週一回ずつ）一回四十五分で約七千円、ドイツでの三か月分である。なにしろ高い。だが私は集中的にうけなかったためか、それほど効果は感じられなかった。とにかくこういふところへ十回い

くよりも、その国に十日間でも滞在したほうがいい。ただし観光旅行ではなく、あくまでも根をおろした生活という条件で。地下鉄にのっても街に出ても、きこえてくるもの、目に入るものすべてドイツ語。これが陳腐ながらやはりとても重要だと感じた。

ちなみに、私は二十年フランス語をやっているが、ほとんど予備知識も語彙力もないに等しいドイツ語のほうが、今ではしゃべれる。生活というものは実に重いと感じたり一年間であった。



# サークル だより

## 取手周辺サークルへの お誘い

茨城県南端に位置する取手市およびその周辺の会員によるサークルが誕生しました。

積極的、消極的、両メンバーは合わせて十一人ほど。十月十六日の初顔合わせに集まったのは、たった五人というささやかなサークルです。

今後月に一回ぐらい集まり（金曜日になり

りそうですが未確定）、さしあたり「わいふ」に話題を

拾ったおしゃべりや、メンバーの有志が輪番で発表者をつとめるミニニ講習（各人が関心、知識を持つ分野について、ちょっとした話をする）など、できるところからしてみようということになりました。

次回は十二月十八日（金）午前十

時半、取手市福祉会館（取手駅東口、徒歩十分ぐらい。Ⅷ〇二九七―七三―三二五二）の間に、各自、お弁当と「わいふ」最新号持参で集まる予定です。

子連れも、他に方法がなければ可です。参加ご希望の方は直前でも結構ですが、神谷麻理子（Ⅷ〇二九七―七四―六八九六）までご連絡下さい。（勝浦恵美子記）

## 合評会だより

思い切って合評会に参加してみました。当日の出席者は編集長を含めて全部で七人。名前と二〇八号に掲載された文の題を聞くと、急にその文にも人にも親しみを感じます。

特集について手に技術を持っているAさんから「女にとって大学は必要か」というテーマを取り上げてはどうかという提案がありまし

た。その後は二〇八号の内容について次々意見が出ます。「ほめられるって好きですか」がきっかけで、しばし「すなお」について話が弾みました。私はすなおが大嫌い。女の子に対してだけ望まれるところがいや」というのはお舅さんと同居のCさん。合評会には息抜きも兼ねてみえたそうです。

「わが家の受験戦争」についてはそれぞれ自分自身の体験も重ね、いろいろな意見が出ました。Dさんの中二の長男の受験についての不安には先輩たちからアドバイス。子育て中は当然とはいえ、受験の話になると盛り上がるのはどの会合でも同じです。

和気あいあいの「女の言いたい放題」会でした。合評会だよりはBさんの提案、書き手はあみだくじで決まりました。

（谷口淑子記）

投稿ホットライン——物いわぬは腹ふくるるわざ

# マジの発言

黄色い声、赤い声——五色の声でももの申そう！

## 「ああ、敬老の日」

神奈川県横須賀市 細野 清美

九月十五日の日はみなさんどうして

ましたか。単なる祝日として休んでいま

したか。九月に入るとテレビ、新聞など

で「老人問題特集」が盛んになりますね。

私は今、寝たきりの姑とともに暮らして

いるので、九月になると、何かと「贈

り物」がきます。寝たきり老人になると、

どんな福祉サービスが受けられるか、知

らない人もいると思いますので、その一

部を参考にお教えしましょう。

まず、県の福祉部からバスタオルとフ

エイスタオル三本入りセットが。市の社

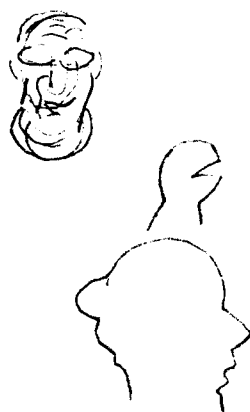
会福祉協議会というところからやはりタ

オル二本入りが届く。さらに県より姑に

見舞い金三千円と、看護人の私に三万五

千円の為替が贈られる。同じように市か

らは姑に五千円と（これは年齢によって



金額が異なる。長寿によって贈られるものである）、私に「慰問金」という名目で、五万円が、これらは民生委員を通して一年に一回届く。家庭で看っていてご苦勞様というところか。

この看護人の手当ては地方自治体によって、ちがうようだ。ある所では、月々四千五百円ないし五千円ぐらいが、年に何回かに分けて支給されているらしい。

他に割引購入券（市指定の店で決められた期間中に使用のこと）が、六十五歳以上の人全員に。ほかに各種催し物の招待などいろいろな葉書きがくるが、これらは元氣なご老人のためで、我が家には関係なし。

神奈川県には京浜女子大学という学校があるのだが、この高等部の女子高校生から毎年姑に手紙がくる。学長の「本校の福祉教育の一環として、若い人たちに県内の寝たきり老人の方のことを考えるということ、このようにお手紙を出している」という主旨の手紙が添えられている。毎年別の人からなので、内容はたわいないものだ。だいたいが自己紹介程度のものである。

私は毎年この手紙に対しては、姑の状態やら私の思いを書いて返事を出すのだが、それっきりで終わる。ていねいに返事を書くだけ手間がかかるという思いに変わりつつある。来年も手紙がきたら、今度は学長に手紙を出そうと思っている。

「せめて三年間は、毎年同じ人あてに手紙を出してくれたほうが、貴校の福祉教育をより効果的に実践できるであろう」と。

そんなことが十五日前までにあつて、さて当日。兄弟たちからは何の音沙汰もなし。夜になって近くに住む長男がくりご飯を持ってきてくれて、ちよっぴり救われた。夫は五人兄弟である。他の三人は何を思っているのだろう。今日を何の日と思ひ休んでいるのだろう。夫と私はそんな思いを感じながら、その日が過ぎ

## 七五三について

現在私が住んでいる土地での、七五三の習慣について書いてみたいと思います。七五三という呼び方より、帯解きおびどという言い方のほうが一般的なこの地では、男女とも、数えて七歳になると、盛大にそのお祝いを行います。ほとんどが披

た。後日になって三男家族が来てくれた。さらに後日になって娘も来てくれた。

敬老の日だけがもちろん敬老の日ではない。しかし、敬老の日と銘うって休みがある以上、私としては、その当日に、言葉なり、何か形のもののがほしかったというのが本音である。

みなさんの身内に、六十五歳以上の人が誰もいないということはないでしょう。元氣な人はともかく、体の弱っているご両親に対してはどうぞこの日をお忘れなく。

茨城県電ヶ崎町 小川 文子

露宴会場を借り切り、結婚式さながらの招待客と酒肴をそろえ、司会者の齒の浮くようなお世辞にのせられて、ドライアイスの煙の中から現われるのが、ときとしては白無垢の七歳の少女であり、カミシモの少年であり、その両親であるので

す。

女の子が振り袖を着、お色直しにヒラヒラのドレスを着るのは、まあほほえましいにしても、男の子が、二度、三度とお召し替えるのは、ひとえに親の見栄以外の何ものでもありません。あそこの家が何回着替えたから、うちではこのく



らいはガンバルノという、つまらぬ張り合いが、子供を着せ替え人形に仕立て上げ、バカげたお披露目をエスカレートさせるのです。

さて、当日、主役の子供といえば、本来なら、新郎新婦の座る金屏風の前に、親が結婚した際の仲人にはさまれて座っているはずが、すぐに飽きてしまい、会場を走り回ったり、隅にしゃがんでイタズラしたり、まるで無関係なのを尻目に、招待客は、大カラオケ大会。めばしいお客に一曲ずつお願いし、満足していただき、数時間を過ごした後に、おじいちゃん、おばあちゃんに花束贈呈に至り、やっと第一部は終了、引き出物をお持ちいただき、ほとんどの方々は、その足で主催者の自宅に向かい、二次会が夜遅くまで延々と続くのであります。

ある年のこと、仕事の関係上つきあいの多い我が嫁入り先では、十、十一月に数回に及ぶ七五三にお招きいただき、週に一、二度はエビ、タイの折り、直径二

十センチはある紅白餅が食卓に並び、もうタイは結構と叫びたくなったことがありました。その間、一件だけホントの結婚式があり、主人の両親が、一日違いで七五三と結婚式に出席したところ、式場も一緒、料理も同じ、違っていたのは、七五三のほうの引出物に餅がついた点だけ。七五三のほうが費用がかかるという事実が浮き彫りになったのです。

さて、今年も七五三シーズンに入りました。先日は親戚で帯解きがあり、義母がよばれていきましたが、招待されるほうも、御祝儀持って着物着つけて、髪結ってなどと大変です。

義母曰く、「○○子ちゃん、きれいなお嫁さんになってたっけ」

「お母さん、みんな二回結婚しなくちゃいけないの？」とたずねた我が息子は今五歳、来年はどうなることやら。七五三には海外にでも脱出したいけど、帰ってきたら村八分かな。その前に義父母が許さないだろうけど……。

# 本で再会した彼女

東京都世田谷区 田中 睦子

図書館で借りた著名なカウンセラーの本を読んでいた私は、あるページにきて胸が震えました。いつまでも心のしこりになっていた彼女に再会することができたのです。

十年前、私は私立大病院の精神科病棟で看護婦をしていました。一般の精神病院とは少し異なり、縁故関係でノイロゼ気味の人など、患者さんとは言えない人も入院することがありました。ある深夜勤務（夜十二時〜朝八時）のとき入院してきた女性も、そういう一人でしたが、事前に本人にも私達にも詳しい話はなく、夫が知人の医者を紹介して入院させて欲しい、と頼んでいたようでした。

彼女は入院するという話だけで、まさか精神科に入るとは思っただけで、ドアには鍵、窓には鉄格子という病

棟で、眠れるはずもなく、何度も看護室に来ては話していききました。しかし、担当医師から詳しい話を聞いていなかった当直の私達二人は、差し障りのないことを説明するという態度に終始していました。最後に彼女は「とにかく一度だけ家に電話をかけさせて欲しい」と頼みましたが、ここでは、それさえも医師の許可制です。でも彼女の落ち着いた態度をみて、私の判断で電話をかけさせてしまいました。

「もしもし、私です」と彼女が言ったとき、相手も彼女も無言のままでした。とうに心の離れていた夫婦なのでしょう。電話をしたことで、よいけい彼女は「このまま、精神病院に閉じ込められてしまふ」と絶望したのでしょうか、私には、そこまで汲み取れませんでした。



朝七時ごろの忙しい時間に「ガチャーン」と大きな音。急いで駆けつけると、椅子でガラスを叩き割り、鉄格子の隙間から飛び降りた彼女の後ろ姿が見えました。

両足陥没骨折でした。その後の教授回診で精神異常はなし、と認められましたが、皮肉なことに退院したくても、ベッドから起きられない状態になっていました。彼女は家柄も良く才色兼備で大学を卒業した後、有名会社の重役に望まれて結婚しました。三人の子をなしましたが、夫婦仲がこじれ、同居していた舅、姑からも孤立してノイローゼ気味になったようでした。

当初の彼女の荒れようは凄いもので、その憎しみは、まず私に集中しました。「あなたが頼りないから私は飛び降りたのよ。もっと、しっかりした人だったらあんなことしなかったのに。もう一生、歩けないかもしれない」レントゲンを撮りにいくと大きな悲鳴をあげ「痛いノ

あなた骨折したことある？ 人の痛みなんて、わかるわけないわねノ」それらの言葉は的を得ているだけに、私の胸に突き刺さりました。付き添いさんに物を投げることもあり、何人が替わりました。

しかし、二か月ほどして、歩行訓練をしながら電話を自由にかけられるようになったところから、彼女は落ち着いてきました。半年ほどして、リハビリの病院に転院するときには「どうも、お世話になりました」と柔らかな笑みを浮かべていました。

心にかかっていた退院後の彼女について、前述のカウンセラーの著者で知るところができたのですが、著者のカウンセリングを受けたのです。「まず、自分が再起の気持ちをもつこと。現在の境遇に落ちこんだ原因を他に求め、人を怨むような心を一切もたないこと」とアドバイスをうけ、リハビリの病院を退院した後、郷里の実家に帰って、再出発したそうです。

今、私は当時の彼女と同じ三十代で子供も三人、姑と同居しています。結婚して十年間、いろいろなことがあり、また、これからの自分の人生についても思い悩む年です。自ら望んで精神科に勤めた私は、あのとき、何もできなかったけれど、今なら彼女の立場や気持ちを少しは理解できる。その後どうしているだろう、と気にかかっていたところでした。若いときの失敗で、今になって冷や汗をかくことも多いけれど、それを理解するためには、ある程度の年月が必要なのでしょう。ともあれ、彼女のその後を知った私は、心から喜び、気持ちが温かく広がりました。

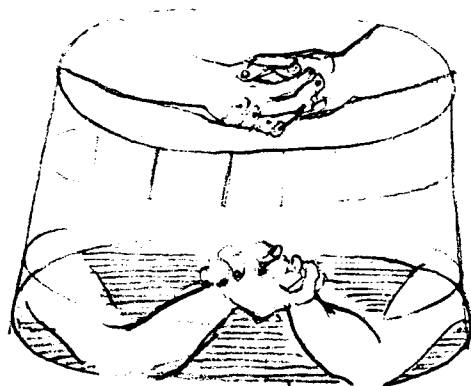


## 国籍と愛国心

四十九年に長男、五十年に次男を出産した。何度も、役場や教育委員会、学校にも頼みに行ったのにもかかわらず、子供達に公立の小中学校からの通知は来なかった。私が出張所に聞きにいくと、五十年配の女性の事務員がうるさそうに、「本庁に行つて聞いて下さいよ。ここには外国人の子供なンか載ってないンだから（外人には住民票の交付がない）。外人の子なンだから、その国の小学校にいられたらどうなんですか」と、いわれムツとしたが、子供のためにまた、小学校に頼みに行った。

五十九年に長女を出産した。町の広報の戸籍だよりに長女の名が載ってないの、役場に問い合わせると、外人、および外国人の子は町の人口に数えられないといわれ、びっくりした。東京の中

埼玉県入間郡 呉 恵子



心には、外人のほうが、日本人より多く住んでいる地もあり、それでも人口として数えられないのだろうか。

人口とは人が住んでいる数をいうのであって、日本人、外人の差別があつてい

いものだろうか。外国人に対する扱いは、それぞれの窓口に任せられていて全国統一はないと聞き、埼玉の日高町は外人が少ないから、それだけ差別意識も強いのかもしいれなと思った。我が町の隣には高麗神社が祭られている。高麗には帰化人の歴史の跡がある。日本人に水田を教え、焼き物を伝えた高麗王物語の伝説にひかれて私達一家は五十三年に日高町に移ってきた。

しかし、理想とはほど遠く、ここでも在日外人に対する偏見は強い。

他人は、「帰化すればいいじゃないですか」と、一しゅうする。しかし、日本において、外国人として暮らすと、何故差別を受けなければならないのだろうか。税金やその他取るものは日本人並みに取っておいて、国民としての権利は与えないという外国法にはくやしい思いがする。選挙権はない。住民票の交付がない。国家及び地方公務員になれない。従つて教員になれず、政治家にもなれない。銀行



などの金融関係に入社できず、日本人経営の企業に入社も難しい。資格として、年齢、学歴制限の他に、「日本国籍を有する者」と必ずある。

役場に行くと、差別撤廃のビラやちらしが、目に入る。おそらく、地元の部落民に対する日本人同士の差別問題を指すのであろうが、役場、法務局が一番法による差別をしていると思う。

外国法の一部が改正されたのを機に、三人の子供達の国籍を日本国籍に移した。昨年の八月である。日本で暮らす場合、在日外国人としては生きていくのに厳しすぎると思えば、便宜上、日本国籍が有

利だと思っからである。

歌手のアグネスチャンは、自身は英国籍（香港籍だがまだ英国領なので）、夫は日本国籍、生まれた和平君は、カナダで生まれたから、カナダ籍だという。国籍にこだわらない人は、まだ他にもたくさんいる。しかし、国籍にこだわる人はその何倍も何十倍もいる。

私のように国籍にこだわらない人間のほうが、異常者扱いを受けるのかもしれない。国籍を替えることにより、国を捨てた、先祖を捨てた裏切り者というらしく印を押されるのかもしれない。国籍は便宜上であって、着物から洋服に着替える

ように替えるのであり、愛国心とは関係がない、と声を大にして叫んだとしても、一体何人の人がわかってくれるのだろうか。アメリカやカナダのように生地主義（生まれた地で国籍取得が可能）に日本もなればいいのに。でなければ、もっと在日外国人にとって住み易ければ、せめて人種差別や偏見がなければいいのになあ、と思う日々である。

国際化とは名ばかりで、国籍法は三十年前と大して変わりなく、日本人の心には相変わらず、アメリカやヨーロッパに對するあこがれが強く、反面、アジア蔑視の根が深い。

## ●好評発売中

# 算数 つまずき診断 テスト

相原 昭著 学年別全6冊 定価各九八〇円

だれでもつまずきが発見でき、どんなに忙しくてもすぐ採点できる。つまずきの診断法と治療を具体的に詳述。明日からの指導にファックスしてすぐ使え、子どもが楽しく取組む

〒112 東京都文京区春日2-17-3 ☎03・815・5511

あかね出版

# 算数大好きに 26章 意味の授業

笠井 一郎・西尾恒敬・畑野和子著 「わり算の3つの意味」など 定価一七〇〇円

# わが子の進路を考える

山田暁生著 切実な悩みと関心にこたえる好著 定価九八〇円

# 左利き

東京都秋川市 岡村 和代（37歳）

私は師範台のガステーブルで、スパゲッティを茹でていた。「師範台」というのは、この公民館主催の料理教室の講師である塩入先生と助手の先生が実習に入る前に、模範調理をしてみせるテーブルであり、私達生徒が実習を始めると使わないのだが、その日のように、茹でたり煮たりするものが多いと、師範台のガステーブルを使わせてもらうことになっている。

その瞬間、講師の塩入先生が風のように（私にはそう見えた）飛んでいらして、「手はどちらを使ってもいいんです。手は二本あるんですからどちらを使ってもいいんですよ」とおっしゃった。

私は驚いた。左利きの私に向かって、このようにはつきりと「左を使ってもいいんです」と言ってくれたのは、塩入先生が初めてだったのである。

スパゲッティは、茹でている最中にお互いがくっつかぬように、箸でさばかなければならない。私は、いつものように何気なく左手で箸を使っていた。すると突然、私の背後で、

「あら、ぎっちゃなの?!」

という声が飛んだ。私は、はっとして、箸を右手に持ち替えようとした。

を始めたころ、社員食堂で昼食をとっていると、「しかし、親もいい加減なもんだよなァ。女の子なら、どんなことしたって、右利きに直すもんだがなァ」とか、忘年会の夜、酒の酔いにまぎれるように、「やっぱり左手っていうのは下品だよなァ」と言われた。そういう人達は、仕事で接する場合、優しいし、親切だし、「いい人」であつたから、そのトゲも私には応えた。

塩入先生はさらに、現在、大学生の長男が左利きであること、小学生のとき、先生に右利きに矯正されそうになり、かけ合いに学校まで出かけたこと、外科医を志した息子さんのために、左利きでもメスを使わせてくれる全国の医学部を調べたとおっしゃった。

私自身は家庭に入ってからのは、子供達二人がたまたま右利きだったので、「左利き」について、思い煩うこともなく、何年も過ぎていった。ただ、たまたま開いた「暮しの手帖」の何号かに作家の住

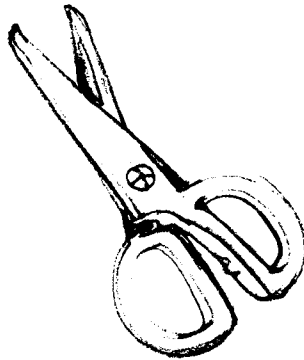
井すゑさんが、左利きについて歴史的に考察しておられ、左手が右手より劣る、あるいは不浄とされる（これは茶道において顕著）のは、何ら意味のないことであり、これは一種の差別である、と長文で論じておられるのを拝見し、もっと早くこういう文章を読みたかったと痛切に思った。

これは先日、下の子の懇談会の資料として、担任の先生がコピーして下さった松田道雄著『こんなときお母さんはどうしたらよいか』——左利き——の一部である。

「左利きというのは、生まれつき左の手がつかいというたちです。たまたま人間では、左手のつかいという人が右手のつかいという人よりも少ないというだけのことです。ところが右利きのほうがおおいので、右利きに都合のいいように風習ができあがっています。礼儀作法はすべて右手のほうがつかいという人の、やりやすい仕方にきまっています。障子のあけ

方、お茶の立て方、食事の仕方などすべて右利き用です。

しかし、人間は自分の生まれつきやりやすいようにして生きるのが便利でし、自分のやりやすい仕方をおしとおす権利が



あります」

娘がお誕生前に、頑固な左利きだと気づき、着物の袖口を縛るなどして矯正し

ようとし、ついには「無理に直すと、どもったりの情緒障害を起こしますよ」と小児科医に忠告され、それ以来、右利きを強要するのを断念した両親に、そのころ、こういう文章を読ませたかったと切実に思う。

「女の子は右利きが当たり前」とされていた三十七年前、左利きのまま育て通すのは、相当の覚悟がいったのは、私もうすうす感じていた。

私が小学生のころ、若い先生は柔軟だったが、中年の女の教師など左手で運針する私の手元を、すさまじい目付きで眺めていた。そして、家庭科の評価が前年度「五」であったものが、その教師に替わった途端、「二」に落とされたのも、納得いかない出来事だった。

今、私は、自分がたまたま左利きであったために、本来なら見えなかったもの、人間のつねにもっている差別心とか、異なるものへの排他心とか、が見えるのを感謝すべきかとも思っている。

## 「銃後の守り」

愛知県名古屋市 岩田 和子

「女の敵は女」とは考えたくないのだが、近ごろ、それも当たっているのかも、と考えてうんざりすることがある。

旧友で、ベテラン教師の某女と話していたときのこと。彼女が、昼間家の仕事と二人の子供の世話をしてくれている姑さんのことを愚痴りだした。同居していれば、いろいろとあるだろう、と初めは聞き役にまわる。うん、うんと、相槌を打ってひとしきりついたところで、こう言ってみた。

「でも、お姑さんだったいへんよ。二人の孫と一日中いっしょにいて、その上家事では」

するとすかさず彼女、

「そりゃそうよ、だから私たち、義母には毎月ン万円わたしてるわ。日曜は家事も育児も私がやるし。だもの、ふだんは

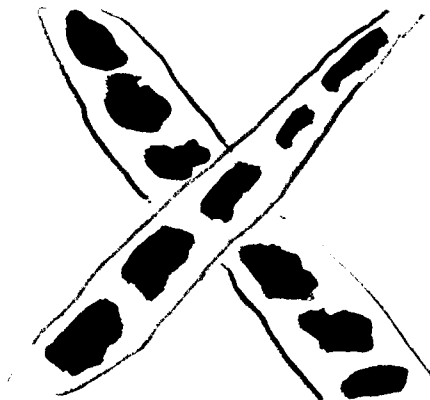
働く者の身にもなって、もう少しきちんと家の中のことをやってほしいのよ。別に外で働いてるわけじゃないんだからさ……」

また、こうも言う。

「そりゃあ、子供と一日中いるのはたいへんかも知れないわよ。でもあと何年でもないんだし……。それに呆けの防止にもなるわ」

ふー。私はため息が出てしまう。同世代で、同様の教育を受け、ともに妻で母でありながら、私と彼女の間には、広くて深い溝ができてしまった。こちら側からしか見えない溝が。

彼女は、女も男も同様に働くという正論をそのとおり実践している畏友であり、知的な面では私も大いに敬服している女性だ。しかし、現在の私が共感するのは、



彼女ではなく、「主婦」であるお姑さんのほうだ。すなおに、たいへんだろうなあ、とシンパシイを感じてしまう。畏友の言う、「外で働いてないから、うちのことはきちんとやっつけ」式の発言は私たち被扶養主婦が、年中夫族から言われていることではないか。また彼女の言葉のウラに感じられる「うちにいる人なんぞ、大したことしてるわけじゃない」と

いうのも、「男の論理」と、日ごろ私たちがタメ息まじりにあげつらっているコトバではなからうか。

もう一歩進めれば、「大したことしてわけじゃないんだから、ストレスなんかたまるわけではない」、「外でたいへんな思いをしている人のために、うちの中のめんどくさい用事は、みんなやってくれてあたりまえ」の人Ⅱ主婦が必要、という構図ができあがる。(腹のたつことだが、ときどき有能な女史が、「忙しくて『奥さん』が欲しいくらいです」なんて言ったりするではないか)

だから、畏友のうちのお姑さんは、二人の夫を持つて主婦、みたいなんじゃないか、と思えてしまうのだ。

世のエライ女史たちが、女性も社会に出なければダメだ式の発言をなさる。それは正論だが、そうはいっても、家庭にまつわる諸事は決してなくなりはない。専業主婦を否定するエライ女史(確かにごもつとも)にしても、留守中の宅配

便やら、知らぬ間に猫が食いちらかした生ゴミの始末など、けっこう近所の主婦やおばあちゃんの世話になっているはずなのだ。ところがエライ女史の中には、そういうことに対して全く気付かず、私はだれの世話にもならず自立してます、といった面構えで、他の女性を啓蒙している人もいる。

## 人間の価値

久しぶりに都心に出た帰り。さんざ待たされたバスに乗りうとしたら、中から何やら男の大きな声。運転手さんではなさそう。乗ったとたん強烈な酒の匂いにドキッ。運転席のすぐうしろに、迷彩帽をかぶった五十がらみのおっさんが、はすに構えて座っていた。

「あと五年やったらって先輩がいった。五十五から五年やったら六十だ」  
住宅街を通るバスにしては珍しい。午

私は賃労働も多少するが、限りなく専業に近い主婦なので、こういう同性をみると、「君あってこそその僕」などとおだてる夫族のほうはまだマシだ、と思ってしまう。確かに、近所の主婦たちに助けられている部分というのは、気をつけていても見つかりにくい、いわば死角にある、とも言えるのだが。

神奈川県川崎市 麻生 ゆり

後四時を過ぎた車内は、学校帰りや、買物帰りで朝のラッシュ並み。なるべく奥にと思うが、そうもいかない。せめて目が合わないように、そちらのほうへは、背中を向ける。満員のバスの中は、しわぶき一つ聞こえず、おっさんの声が通る。「新宿の、歌舞伎町の、組に行ってきたんだカーチャン」

どうやら、そばに立っている中年のご婦人を、話相手にしているようす。チラ

ッを見ると、ご婦人は五十代半ばぐらい。大きなマスクをしている。おっさんの連れではなさそうだ。おっさんは、休みなくまくしたてている。「山中」までは、降りる人より乗る人が多い。女子高生が、けっこう乗ってくる。女の子たちからまなければいいと気になる。

「新宿公園で……の写真をとったりするやつがいて、カーチャン」

マスクのご婦人は、立っている所を動かない。それどころか、ことばは聞こえないが、相づちをうっているみたい。「シカトしておけばいいのに」

徐々に降りる人が増え、ようやく中ほどの降車口付近に立つ。

「おれの住所は、○○だ、奥さん」

いつのまにか、「カーチャン」から「奥さん」になっている。○○は終点近くの停留所。まだ大分先だ。内心ウンザリ。「今の若いもんは、先輩の洗濯もしない。おれが若いときは……」

スーパリーのある停留所で、乗客がドッ

と降りた。やっと座れた。見通しがよくなって、ご婦人の全貌が見えた。あい変わらず、おっさんのそばに立っている。

その方は、グレープフルーツの袋、スーパリーのポリ袋、ブティックのナイロンの袋、その上、手のついた紙袋と大変な荷物。おっさんもさすがに気がついて、「荷物もってやるよ、奥さん」

ご婦人は、すぐ降りるからとか何とかいったのだろうか。丁重にお断わりした模様。

車内のアナウンスが、次のバス停を告げたとき、不意におっさんは立った。

「日米安保条約が……」

とかいいながら、降車口に立つ。近くに立っている男子高校生の肩に手をまわし、「力、強そうだなー」

背は高いけど、さして強そうに見えない高校生は、バスが停るのを待ちかねて、降りていった。それに続くと思われたおっさんは、

「奥さん、ごめんください」

と、ご婦人に別れのあいさつ。

「今日は奥さん荷物もってっから、握手できないけど、明日は握手するからね」

それから、仁義を切るときのように、足を開いて腰を低く、頭を深々と下げ、

「お世話、なりましたっ」

と、ドスのきいた声。この間、バスは降車ドアを開けたまま、じっと停っている。おっさんは最後に、「ヨロシクッ」と、一声。気分よさそうに降りていった。

走り出した車内に、ホッと安堵の空気が漂う。降りた人はどちらへと、後ろの窓に目をやろうとして、ハッとした。六人掛けの最後部席に、一人で座っている女の子。前ばかり気にして、気づかなかったけれど、この子も同じバスだったのか。前門の虎後門の狼ではないけれど、まったく変なバスに乗り合わせてしまったものだ。

その子は高校生ぐらいなのだろうか。ダウン症のような顔つき。初めて知った

のは、駅前のバス停。待つ順が、その子が一番、私が二番。やたら大きな声で独り言をいっていた。

「ドリフのビデオ見てたら、お母さんが、おもしろいって聞くから、ウンていったの。志村けんが、かつらかぶって、おばあさんになって……」

話は筋が通っている。しかし、すぐに、同じことを繰り返して話すのだ。

「この間、お母さんがお父さんに、たま

には二人だけで、旅行したいわねっていつてるの。行ってきたらって私がいったら、いいのよだって」

聞いてて深刻。その子が乗っていたのだ。おっさんの降りた次が、私の降りる所。マスクのご婦人も、どうやら降りる気配。その方は、出口の棒につかまる。

と、その子が後ろから、とっとと降り口に来た。「あ、この子も同じバス停だったか」

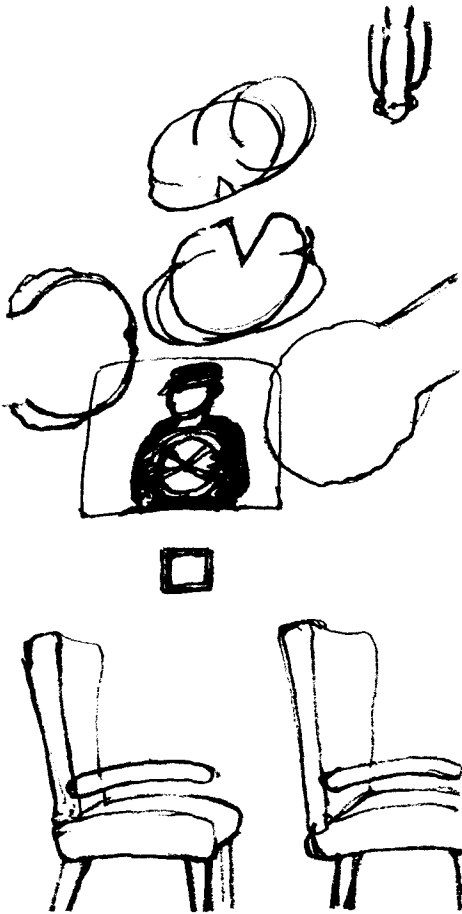
すると、その子は、マスクのご婦人に、「大丈夫でした」と、やさしく尋ねた。ガーンという衝撃。「ええ」と、ご婦人。「何かあったら、警察に届けるといいですよ」

「ただ、話を聞いていただけですから、大丈夫でしたよ」

すいたとはいえ、バスには良識ありそうな紳士が二、三人。分別あり気な主婦もまだ何人か乗っていた。誰一人、ご婦人へことばをかけた人はいなかった。自分か、かわり合いにならなくて良かったというふう。

女の子がいったのは、もしかすると、ふだんその子が、両親や周囲の人からいわれていることばだったのかもしれない。たった十五分なのに、長いバスだった。下車して、ご婦人は道を渡り、女の子は何事もなかったかのように、ゆっくりとした足どりで、歩いていった。その姿を見ながら、目の奥がジーンとしてきた。

(元・岡田正子)



# 貸したい方・売りたい方もお電話を！

遠方から東京へご転勤の方

お電話下さればおのぞみの地域を

代ってお探しいたします

進学・初就職のお部屋も

わが社の情報網をご利用下さい

どうぞダイヤルを！

探し回らなくても、ちょっとしたお時間で

効率よく下見ができ

ご納得のいくお住居が見つかります

## 甲 南 不 動 産 (株)

社長・支店長はじめ、全員女性の会社です。

当社をご利用になれば、駅前の不動産屋さんを

足で回るのとちがい、首都圏一円、または関東

一円でも、広域の物件情報がすぐ手に入ります。

お貸しになる方も借り主を広くえらべます。

土地建物の売買部もぜひご利用を。



# 1988年

新しい年のご計画は？

お子さんの進学

あなたの職場進出

夫君の転勤

広がる未来への

新しい動きがあるのでは？

## ぜひお手伝いさせて下さい



**甲南不動産株式会社**

代表取締役 南 かつ子

本 社 東京都新宿区百人町1-17-5メゾンオグラビル101, 102

TEL 03(362)9311

代々木支店 東京都渋谷区代々木1-21-11トキワビル3F

TEL 03(374)2511

高田馬場支店 東京都新宿区高田馬場2-14-4八城ビル3F

TEL 03(208)7531

売 買 部 東京都新宿区百人町1-17-5メゾンオグラビル1F

TEL 03(363)9971 (土地建物の売買はこちらです)

# とともに

## ——私の放浪の旅——

法村香音子



連載 6

# 八路軍



## みずうみを渡るクリ

トウモロコシの茎を一行に並べた粗末な垣根は、耳もとでカサカサと枯れた葉ずれの音を立て、乾いた地面に優しい影を落としていた。それはただ、小さな家畜たちが野放図に出歩くのをさえぎる役目を果たしているにすぎなかった。

そのとき私は垣根の横の道にしゃがんで、地面に五寸釘で穴を掘っていた。よその庭先に大勢集まり、文字や数字を掘って書き、軽く土をかぶせ、それをなぞって字を当てる遊びをしていたのであった。

ふと背後に異常な動きを感じた私は、何気なく振り向くと凍りついたようになった。

退屈しのぎに綱を咬み切ったクリが、毛が生え揃っていない羽根をダランとさせ茶色のヒヨコを鼻の先で転がしていたのである。

向こうを向いて、各々の膝がしらに顔

を伏せている子供たちが「まだか……、もういいか」と言ったとき、金縛りが解けた私は、咄差にヒヨコを後ろ手に隠して立ちあがっていた。それは、もう子供の両手のひらでは包み込みきれないほどに育ったヒヨコであった。首がふにゃつとして、脇の下に毛が無い感触が気持ち悪かった。

そつと握っている鳥は、なま温かいがピクリともしなかった。胸はドキドキ早鐘を打ち、汗がでてくるのに顔が冷たくなるのがわかった。

私が立ち上がったのを、もういいよ、の合図だと思ったのか、子供たちは一斉に頭を集め、

「ソォイ！ ソォイ……（3だ！3だ……）タッス！ タッス！（5！5！）」

と、口々に言いながら指で地面をほじくりはじめたのだった。

そろつと後ずさると、まったくわからん子のクリが後ろ手にじゃれついてきたので、私は驚いてクリの首にぶらさがっ

ていた短い紐を引っ張って家に向かって駆け出した。

家の裏にまわってウロウロしたが、どこに埋めても見つかるとような気がして川のほうに走っていった。気が動転している私は、自分がしようとするにだけ夢中になっていた。

母が摘んでゆでてくれた雑草はもうノッポになり、草叢に一步入ると草いきれでむせかえるようだった。あたりを見回しながら草をかきわけ、誰もいないのを確かめてからしゃがんで棒切れで小さな穴を掘り、ヒヨコを埋めた。

ヨモギの上から目だけ出してキョロキョロしたが、やっぱり誰もいなかった。

安心した私はそこから出ると、蛙を追いかけて遊んでいたクリに「ちょっと来なさい」といって捕まえて、腕をまわして首を挟みこみ、

「どうしてあんなことしたの！ 駄目でしょ！ 駄目でしょ！」

と何度も何度もおでこをぶった。クリは

キャンキャンと啼いてお尻で跳ねまわり、私の脇の下からすり逃げようとするのだった。私はクリをぶちながら、いつも私と同じように何か食べたがっているクリが可哀想でしかたがなかった。

物を食べている子につきまとっているクリが、誤って落としたものを子供が拾おうとする前にいち早く食べてしまう。すると子供が泣き出して、クリが取ったと勘違いされる。

そんなことがしょっちゅうあってよく言い訳したが、こんなに困ったことは初めてだった。

「もう、あんなことしちゃダメよ？ クリ！ わかった？ わかったね？」

それで、もうおしまいのはずだった。私とクリだけの秘密であった。のんちゃんだって知らないことだ。

叱られて、神妙な顔つきで私に遅れてしおしおとついてくるクリには困ったものだと思い、しっかり繋げる綱を探してクリをしっかりつかないでおかなければ……

……と、私は当惑していた。クリを拾ったときから、丈夫な綱を手に入れるのほとてもむずかしいことだった。そんなものはどこにも落ちてゐるわけがないからだ。た。

その日の夕方、思いがけないことが起きたのである。

おもてで甲高い声がして、ギクツとして思わずお尻を浮かしかけたとき、母が台所の土間を出て行く気配がしたのだ。た。

（あ、あの声……。あの家のオモニ……だ！）

私の心臓がふたたびキュツと縮まったとき、母の声がきつく響いてきた。

「香音ちゃん、ちょっといらっしやい……」

これはもう、あのことに違いなかった。（どうして知られたのだろう……。クリがヒヨコを咬んだとき、オモニが見ていたのだろうか……）

恐ろしくて、家の中がグルグル回って

いるような気がし、たましいが身体から抜け出たように存在感がなかった。ためらいがちに返事をしながら、オンドルに置いた私の机がわりの黒い小さなトランクの前からよろけるように立ち上がる、と、蠅が入るからと閉めておいた縁側に寄っていった。

「母ちゃんがあんなに言ってるのに、あんなクリを縛ってなかったの？」

（いいえ、今も縛ってあるし、あのときだって縛ってはあったの。それなのにクリが食いちぎるから……）

「わたし、ちゃんとしばってたよ？」

私は精一杯にとぼけたふりを整えて、障子を細目に開け、母たちのほうを覗いた。

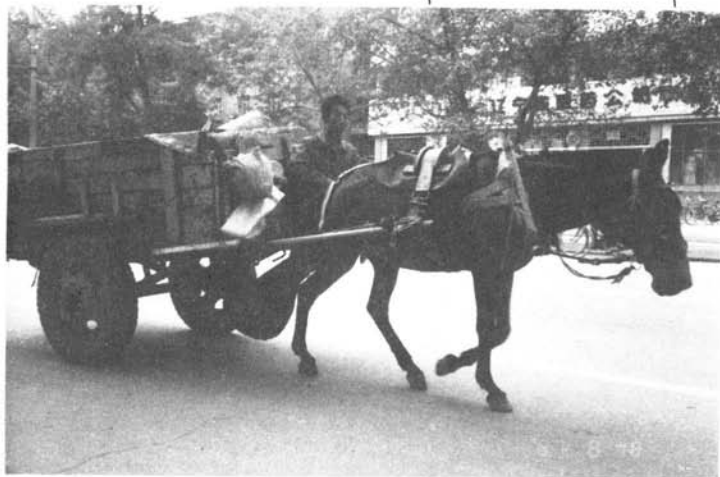
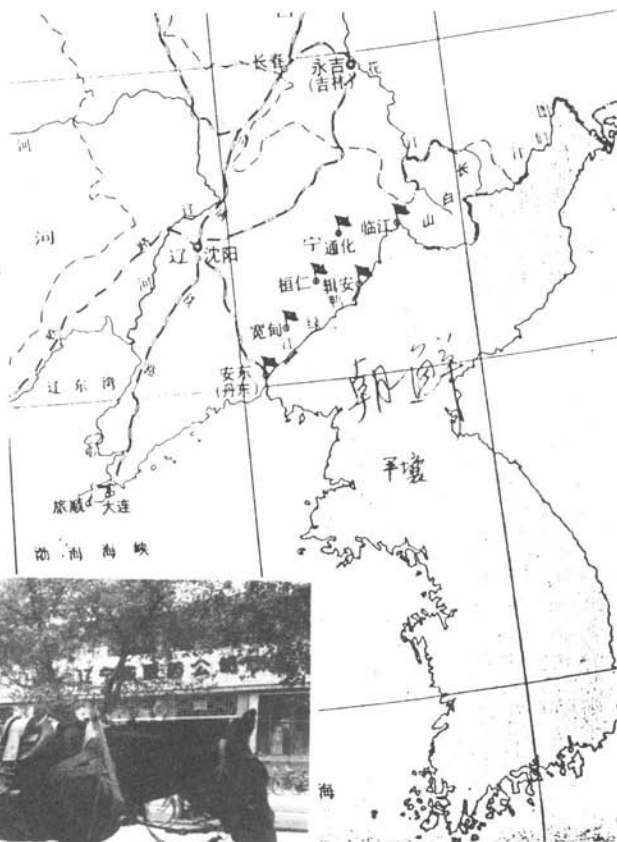
（あっ！）

子供たちを従え、目を三角にしたオモニが、母の鼻先に泥にまみれたヒヨコをぶらさげていたのである。

帰ってきた父は台所で母から「事件」を聞いた。身の置きどころをなくしてい

当時旅をして歩いた鴨緑江流域  
の道すじには武装蜂起の赤旗が—。  
彼の昔から革命的土壌がつかかわ  
れていたのだ。

「中国人民革命戦争地図選」  
中国人民革命軍事博物館編輯  
地図出版社編繪  
出版1981年7月第一刷より転載



これと同じ馬車で移動したのだが、当時もこん  
なゴムタイヤだったらどんなに楽だったか。  
車夫までが（もしや、この人だったのでは……）  
というような見馴れた顔つきをしていた。

た私は、外に出ておいでといわれて庭に出た。用意ができていた夕食も食べずに、私達は庭の棒クイに短い紐で首を吊られたようにつながれたクリの周りに集まったのだった。

「父ちゃん。母ちゃん。これから私、どこにも遊びにいかないで面倒をみるから！……ご飯も私の分を半分クリにあげる。だから……」

全部あげてもいいと思ったが、そう言うとお本当にしてはもらえそうになかった。「のんちゃんも！ のんちゃんも食べないでいい！」

と、のんちゃんが叫ぶように言った。「本当に、もう絶対よそに迷惑かけないよ！く面倒見て、クリがいたずらしないようにする……」

これからは遊びにいかないで、クリの面倒をよくみることにしようと決心しながら私が気弱く言うと、

「あんたの絶対はあてにならない絶対だものねえ……。悪いことは隠すし……」

絶対という言葉は一生にそう何度も言わないものよ、といつも言う母が言った。「そんなことない！ 今度はほんとの絶対よ！」

何もわかつちやいないクリの顔や足が泥だらけなことが、腹だたくて悔しくて悲しかった。綱をさがしているあいだに、いつのまにやら、埋めたヒヨコを掘り返してうちに持ち帰っていたのだ。数が足りない鶏たちを捜していたオモニや子供が、動かない証拠をうちの庭で見付けたのであった。

「いや、クリが悪いことしたから、だけじゃない。香音さんがご飯を食べなくても犬は飼ってはいられないんだよ。そうして済むことじゃないんだよ。みんなに悪いと思わないのか？ もともと、クリは中国に置いてくるべきだったんだ。父ちゃんがそうさせればよかった。一番可哀想なのはクリじゃないか。だから、あんたたちも我慢しなさい」

父は白菜地でのことには一言も触れな

かったが、私はすべてを思い出し後悔していた。

そこへ、ダブダブの木綿の八路服の袖をまくりながら小劉がやって来た。小劉は小鬼のなかでは一番年下で背丈もずんぐりとチビだけど、陽気で、くるくるとうちのためによく働く子であった。幹部たちに注意されても彼らがいらないところでは帽子をあみだに被り、口元までゆがめて格好をつけている小劉が、真面目な顔でツバに手をやって被り直した。

「嫌ーっ！ いやだーっ！ 絶対いやよーっ！」

私は悲鳴をあげてクリの首っ玉にしがみついた。のんちゃんと私はクリを手放せなかった。父と一緒に仕事から帰ってきて、もう夕食をすませたらしい侯さんも隣の家から出てきた。

「先生……。お嬢さんたち、可哀想ですよ。飯はもう大丈夫ですよ」

父も私に劣らず犬好き人間である。それを思っ望みをつなぎ、もう心配はな

いと言ってくれる侯さんの言葉にほっとして父を見上げたが、その厳しい表情はかわらなかつた。

「いつまでもわがまま言うんじゃないぞ！」

父に大声を出されて私達はしぶしぶクリから離れた。小劉が棒くいから綱を外すと、クリは窮屈な姿勢から解放されてホッとしたように身体を振るって喜んだ。だがそれはつかのまのことで、小劉が引っ張っていかうとすると、クリは連れられなかつた。いかに全力で足をふんばるのだ。

「ほらあ！　クリが嫌だつてよう！」

私とのんちゃんにはクリを取り戻そうとして泣きわめいた。侯さんや後から出てきた人たちが、二言、三言とりなしてくれたが、後は困った顔で立っていた。母は怒ったようにくるりと踵を返すと、生子ちゃんを抱いて家のなかに入ってしまった。いつもクリにご飯をやったのは母であつた。

クリは湖の向こうの部落の人に貰つてもらうのだ、と父は言つたけど、そんなことはウソに決まつていた。今日の今日、そんな話をつけにわざわざ行つた訳もないし、そんな形跡もなかつたから、ただ捨ててくるつもりに違ひなかつた。

クリには自分の運命が分かつているようだった。父に引つ張られても嫌がつて脚をつっぱり、助けを求めるように首をめぐらせて啼きながら、暗くなりはじめた道を引きずられて出ていった。

私たちはせめて船に乗るところまでクリを送つていきたいと思つたが、父に付いてくるな、といわれ泣きじゃくりながら庭の真ん中に立っていた。

木立ちさえ身じろぎもせず、日暮れの部落は、ひたと声をひそめたように静かだった。

ここは中国に近いと父が教えてくれた。あの茜雲が浮いているあたりがクリの故郷だろうか――。

悔いと、やり場のない悲しみに胸がふ

さがり、打ちひしがれて倒れ込むように縁がわから家に這い上がると、私は夕飯も食わずに布団を被つた。

クリの思い出は尽きることなく頭のなかを横切つていった。あの寒い移動の日々、いつも私の足元に寝てくれた温かだつたクリ。父や母に叱られたとき頬を舐めてくれ、もの言いたげに黙つて私を見ていたビー玉のようなあの茶色のきれいな目。三角の耳が垂れ、しっぽは垂れていても、何かに気づいたときに見せる、私には雄々しく見えたあの姿……。吠える声も野太く力強くなり、もう少年になつていた。クリ、クリ……。大好きだったのに……。

――クリが船べりに手をかけて、私を見てクンクン啼いている。小劉の漕ぐ、父とクリが乗つた船が、油を流したようになみずうみの上を音もなく滑っていく……。月夜なのに何故かみずうみは真ッ暗。今夜は山も騒がない……。船が、クリが遠ざかつていく……。ただ聞こえるのは



クリのクンクンだけ――。

私はうとうととしていた。いつ戻ったのか父のいびきが聞こえる。泣きはらしたまぶたでうつつのように薄目をあくとき、真夜中の空が暗れていることをうかがわせた。

さんざん流した涙と汗が枕がわりの風呂敷包みに拡がって気持ちが悪く、泣きながら寝たのだったと思い出し、クリはどこに捨てられたのかと思うと新たな涙が枕を濡らした。

顔のほうに布団を引き揚げようとしたときだ。かすかに犬の声がしたように思った。

(……もう、諦めなきゃ……)

思い直して再び目をつぶろうとしてハッとした。確かにクリの、遠慮げみだが近い声。思わず身を起すと、「クン……、クン」に続くカサコソとした物音だ。夢中で飛び起きると父を跨いで飛び越え、障子に飛び付いて勢いよく両側にバ

アッと押し開けた。家のなかに月の光が飛び込んできた。

夢ではなかった。びっしり濡れたクリが縁がわに前脚をかけ、つま先立ちになってちぎれるように旗のように、激しくしっぽを振りながら私を見上げていたのである。

「クリだあ……！ クリだ！ クリだあ！ クリが帰ってきたあ！」

私は気が違ったように叫びながらはだして庭に飛び降り、びしょ濡れのクリを抱き締めた。クリも狂ったように身体じゅうで私にじゃれつき、私に続いて飛び降りて来たのんちゃんにも飛び付いた。

父も母も生子ちゃんも起きて縁がわに出てくると、私の腕から抜け出たクリは、また縁側に前脚を掛け、捨てられたことを恨みもせず「帰ってきました」と報告するように父たちを見上げてシッポを振るのであった。

「おお……！ クリがああ湖を……なあ」うめくように言って、父はクリの頭の上

にかがんで絶句した。

私は父と小劉が、本当にクリを湖の向こうの部落の家に置いてきたのだということを知り、改めて驚いた。

魚を追いつながら川をジャバジャバ下っていったら湖が黒く大きくひらけ、つま先立って首を伸ばして見ると、対岸の山裾に小さく固まったその部落は、中国みたいにみはるかす彼方にあったからだ。

私はクリの濡れた身体にひたいをこすりつけ、大きな湖の真ん中を必死に犬かきで泳ぐ小さなクリの姿を想い浮かべ、声をあげて泣いた。

父の目にも母の目にも、涙が光っていた。

この騒ぎに真っ先に飛び出してきたのはやはり小劉だった。閻同志や王さんたちも服の袖に手を通しながら隣の家のなかから出てきて、驚いたり喜んだり「心配するな、飼ってやれ」と口々に言ってくれた。私は今までの嬉しかったことはすべて忘れ、こんなに嬉しいことは生ま

れて初めてだ、と思った。

のんちゃんとかりと三人で抱き合って地べたに座り込んだまま、私はこうこうと照る月を見上げた。暗い湖を泳ぐクリを見守ってくれた月に、心から何度も何度も、

「お月さまありがとう！　ありがとう」と感謝した。

春の夜風が柔らかいハケのように心地良く涙の頬を撫でてくれ、冴え渡った夜更けの空の月の下を、遅れた一筋の雲が静かに通った。

雲が明るく輝き、月が手をひろげて笑った。それは私を祝福してくれる神であつた。

### 魚を獲り、蛙を食べる

翌日から、私は暫ったとお友達に誘われても遊びにいかなかった。みんなも騒ぎは知っていた。子供たちにはなんでもないことなのだ。でも私はクリをしっかり見る約束を守らねばならなかった。

クリも捨てられるのには懲りたらしく、一晚のうちにすっかりおとなしくなっていた。

私とのんちゃんはクリを連れて毎日川に行った。部落から離れた川なら大丈夫だった。魚獲りに夢中になっても、ちょっと気を付けてときどき頭を上げて「クリッ」と呼べば、蛙を追いかけてまわして草むらのなかにいてもクリはすぐに跳んで出てきた。

帽子を持っていない私達は母に「日射病になるから川では手ぬぐいを被って遊ぶように」と言われていたから、馬鹿になつたら大変だと、あねさん被りでスカートをパンツの裾にたくし込み、空き缶を持って川を歩きまわった。

（クリはおなががすいたからあんなことをしたのだ）と思った私は、川で魚を獲って食べさせようと思ったのであった。

小さな魚はとてすばしっこい。私の影を見るとからだを真っすぐにして、ツイト、すばやく石のかげに隠れてしまう。

魚が身を潜めたその石にそーっと近づき、また手を伸ばして、そろっとはぐる。息を止め、川の流れも止める気持ちで獵犬のように魚を、捕まえやすい石に追い詰めていくのだ。そうやって一匹捕まえるのもなかなか容易なことではなく、小魚だってそうそうたやすく子供なぞには捕まってくれはしない。手ぬぐいを広げたってさらさらであつた。ところがひょんなことから良い方法がみつかったのである。

あるとき魚に逃げられた私はがっかりして、両手で持ち上げた大きな石を、手を放してゴトンと足元に落としたのであった。根気よくまた石をはぐりにかかうとしたときだった。石の下から白い腹を見せて、ふらーっと魚が浮き上がってくると、ゆっくり流れ始めたのである。

一匹でも余計に欲しい私は両手でその魚を掬いあげ、（この魚、腐ってるのかなあ……、クリに食べさせたらダメだろか……）と、手のひらに乗せてためつすが

めつ、ひっくり返したりして見ていた。すると、魚は急に身をくねらせて川面に飛び降りると慌てふためいた様子で逃げ去ったのである。驚いたのはこっちのほうだ。しばらくして、

落とした石で石の下に隠れていた魚が気絶したのだ、と気がついた私は次の犠牲者を探し当てて試してみたのであった。

この方法は、相当強く、「ゴトン」と石を落とすのがコツだ。

このことを両親に話すと、父が、日本でもそんな魚の獲り方があるんだよ、自分で見付けたんだからそりゃ偉いぞ、と褒めてくれた。

それからはこのデンで、これまたあねさん被りに空き缶を持って岸で待っているのんちゃんに、「ほら」と獲った獲物を投げる回数が増えたのだった。私たちは夢中になって日暮れまで川にいた。小さなかまどを石で築いて、枯れ枝や枯れ草

を集めて火を焚き、針金を渡して魚を焼いた。魚は火のなかに落ちてばかりだがそれを棒でかきだす。すると、よだれを垂らさんばかりに待っているクリが、バ



筆者8歳のころ。いつも真っ黒になって遊びまわっていた。母が命から二番目に大切に、移動の時も肌身放さず持っていた家族の写真のうちの一枚である。

クンと嘔まずに飲み込み、舌なめずりをして次を待っていた。

私は貴重なマツチを母に内緒で持ち出すばかりでなかった。醤油や塩もこっそり持ち出した。塩

をつけて焼くと良い匂いで焼けた。魚を焼く要領も良くなった。クリにやりながらいつしか自分たちも魚を食べるようになり、だんだんクリの口に入る回数は申し訳程度になっていったのである。

新鮮な小魚は、知らず知らずのう

ちに私達にとってもまたとない動物性の蛋白源になっていたのであった。

いつももらえるかと一生懸命私の手もはや口もとを見つめているクリに気がひけ

ていたある日、蛙を追ひ回して遊んでいるクリを見て今度は、クリには肥えた蛙を焼いて食べさせてみよう、と思いついたのである。

安東にいたころ私達は食用ガエルを食べたことがあったし、四年生になって理科の勉強で解剖したとき、皮を剥いだカエルの身が白くてきれいだったことを思い出したのであった。

私はクリのほうに走っていった、その鼻の先でピョンピョン跳んでいる蛙を捕まえた。

ガマの子のような茶色の蛙であった。

蛙を食べさせるというのは我ながら（うまい考え）と思ったものの、ナイフがないから剥けないし、それに生きたまま焼くのはどうも気がすまない。脚を揃えて持ち、手を広げてピンシャンするねっとりしたのを手のひらに乗せて、しばらく考えていた。蛙はぬめりが取れ水気がなくなり、白い脇腹がフーカフーカと息をしていた。



朝鮮族婦女兒童

A Korean woman with her children.

＜中国丹東＞編輯組編輯 1985年10月出版

「中国丹東」より

トラジの歌が良くにあう風景だ。

マキをもっと拾ってきて、といいつけられたのんちゃんが草叢の向こうから、「ねえちゃん、このくらいでいいい？」と、両手で枯れ枝をさし上げて叫んだ。のんちゃんは私の言うことをよく聞く子だった。

「もうすこし……、もっとよー」と叫んだときには、蛙は私の足もとで白いおなかをふくらませてのびていた。キユツとかギユツとかいったようだった。それを見下ろしていたらクリが首をさしのべてにおいを嗅ぎ、そっと引っ込めて（何をしているんだらう）というように私を見上げた。

のんちゃんがまた「ねえちゃん。じゃあ、このくらいいい？」といったので、私はしゃがんで死んだ蛙の脚をつまんで立ち上がり「もういいよー」と答えた。脚を持って焼いていたら熱くて我慢できなくなってきたので手を放すと、脚をパーンとひろげた蛙は、おなかが一杯で大の字になって寝ているようだった。皮

がバンバンに膨れ、棒でつくと破れて少し汁が出て良い匂いがした。

クリは喜んで夢中になって食べたが、熱いので口にくわえて振り回し、焼けた皮が汚らしかったので、やはり剥いてから焼きたいと思った。夕食のときにそのことを父に話すと、蛙のお尻からハサミを入れてお腹を裂き、服を脱がせるように剥くといいよ、と教えてくれたので、次の日からさっそく工作用のハサミを持って川に行った。

醜い蛙も淡雪色をしたササミになって、焼くと魚よりも香ばしい香りがした。

日が暮れるのがだんだん遅くなり、毎に蛙の合唱が賑やかになってきた。

「ただいまーあ」

夕飯に間に合うように、息せききって飛んで帰ったふたりは、

「まあ……、どうしたの、それ……」という、すっとんきょうな母の声に飛び上がるほどビックリした。母が私達を見てげらげら笑いだしたので、何事だろう

と互いに顔を見合わせ、驚いてしまった。「このことは絶対に秘密よ」と、のんちゃんと言いつけていたし、見つかったら怒られると思って黙っていたのに、口の周りが土人のお化粧のように真っ黒だったのである。

私達は蛙のササミばかりか、骨をしゃぶり、おなかの卵まで食べていたのであった。

夕食のとき、

「卵までは食べなさんな……」

と母がぼそりと言い、父は、

「そうか、そうか、うわっはっは……」

と大笑いをしていたがふたりとも、蛙なんか食べるな、とはいわなかった。

いま思えば、いまだに気が持たないが、小さい頃の私は別として、子供のくせに食べ物にうるさい潔癖性ののんちゃんが蛙の卵まで食べたというのは、おなかが空いて、というよりはむしろ好奇心からだ、というほうが妥当であろう。

## クリは土煙の彼方へ

ことほど左様にすっかり落ち着いて暮らしていたのだが、またトラックが私達を迎えに来たのはそれからほどなくしてからであった。住みつけば荷物が増える、という時代とは違って引越しの簡単さは安東を出たときとなんの変わりもなく、木箱を積みアンペラを敷いたトラックにそれぞれの手荷物と行李をほうり込むと、もう出発だった。不便で狭いところにトラックが入ってきたというだけで、川の流れのように毎日をただ繰り返していた静かな部落が急に騒がしくなり、友達が大家の家にやってきた。

私達はみんなの注目を集め、まるで俳優のようにみんなの挨拶を受けた。うでたトウモロコシやキムチをいただいたが、トウモロコシの皮に包んだ、チヂミという野菜が入ったお餅のようなものを持ってきてくれたオモニもいた。私は友達に少し貰って食べたことがあるチヂミが好

きだったのでひどく嬉しかった。

太陽は暑く明るく、なぜか今度の出立は私を浮き浮きさせていた。贈り物を貰い、見送りを受けて移動する、ということとは初めてだったからかもしれない。ところが、さあ、出発というときになつて、クリがいないことに気がついたのである。

「クリ！……クリおいで——。行くよークリ……。クリイ、クリ！」

しかし、私たちの大声にもクリは帰ってこないのだ。

もうみんなはトラックの荷台に乗っている。私はあっち向きこっち向きして何度も叫んだ。

「クリーイ！ クリおいでーエ、行くよークリ……。クリ、クリーイ！」

「クリ、行くぞーう……」

父もトラックの幌の下に頭をこごめ、太い声でクリを呼んだ。朝鮮人の子供たちも手をラッパにして口々に「クリッ、クリッ」と呼んでくれたが、やはりクリ

は現われない。

のど元過ぎてあんなに困ったことを忘れた私から、クリはまたほとんど自由になつていたのであった。

「父ちゃん待ってて！ 私、クリを捜してくる！」

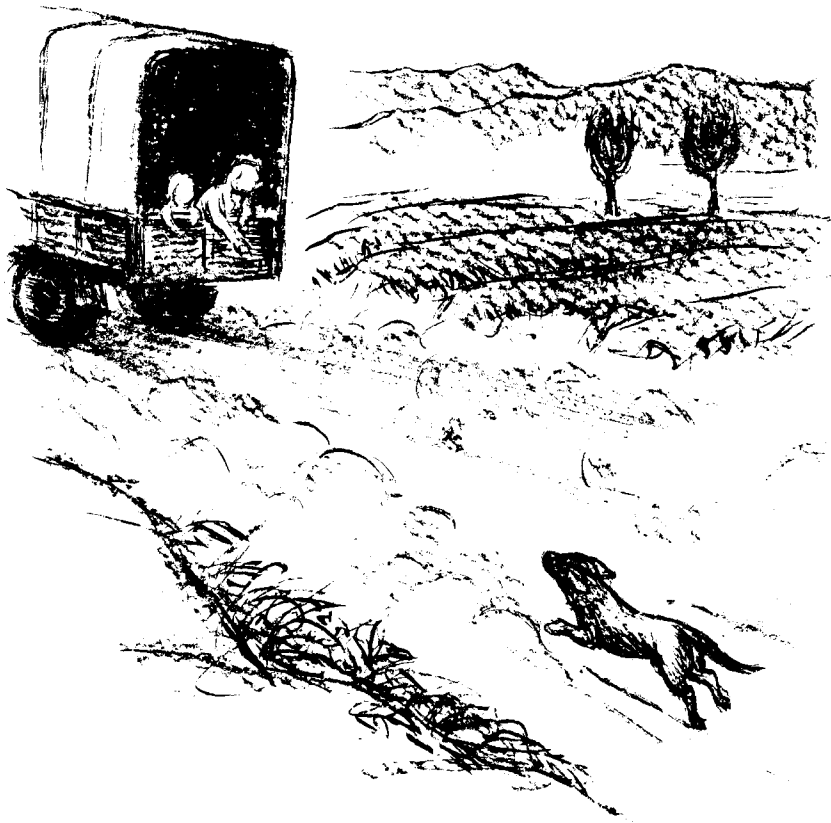
川に向かって駆けだそうとすると、

「駄目だ。トラックに乗りなさい。見なさい、もう先は出発してるんだよ」

見ると、本当にみんなの乗ったトラックはゆっくり走り始めていた。私は焦つた。

「だってクリがいないのに！ クリが帰ってこなきゃ行けないでしょー！ クリッ！」

父の合図で私はそばにいた小孫に担がれ、トラックの上に押し上げられて、後ろの板をバタンと立てられてしまった。幌で太陽が遮られ、私達をこれからどこかへ連れ去るトラックの中は、まるで穴ぐらのように陰気であった。クリがいなければ楽しい日があるはずはなかった。



24

板を跨いでトラックから降りようとしたら「座っていなさい！」と強い力で父に肩を押さえつけられた。私は見送りのみんなが見ているので、泣きたいのを辛うじて我慢し、のどにからみつく声を絞りだすようにしてクリの名を呼んだ。

クリはいい、この狭い部落のどこにいてというのだろうか。あの湖を泳いで帰ってきたクリが、私のところへ戻らないわけがないのに――。

「ブルルーン」と、ものすごい音を立ててエンジンが掛かり、下手な運転でトラックがガクンと揺れて走り始めた。

子供たちが私達に向かって一斉に手を振り、いつもひょうきんだったあの鼻たれ坊主が、

「マンセーイ！ マンセーイ！（バンザーイ）」

と、飛び上がりながら叫んだ。

「待って、父ちゃん、クリはきっと帰ってくるからちょっとだけ待ってもらって！」

私は慌ててトラックから身を乗り出して声を限りに叫んだ。

「クリーっ！」

だが、トラックが加速するにつれて土煙が舞い上がり、見送りの子供たちとのあいだを隔てても、求めるクリの姿はどこにもなかった。

私は泣き出しはしたが、心のどこかで（もう仕方がない。クリとはやっぱりここで別れなければならなかったんだ。クリと一緒に遊んだ友達や、クリを貰うといってくれた人たちの誰かが、きっと大事に飼ってくれるだろう。それにクリも私達というよりはおいしい物を貰えるだろうし……）と、諦めかけていたのであった。

手を振っている、遠くよりはじめてた人びとに、私も手を振ろうとしたときだ。

まだ麦だか粟だか分からない青いジュータンのような若い畑の遠くが割れて、不自然にざわめいたと思うと、ピョーンと道に飛び出た小さな影があった。それ

が土埃のなかを見え隠れしながら、一直線にこちらに向かって近づいてくるのだ。

私は自分の目を疑った。目を見張ると、それはまぎれもなくクリであった。

「わあーっ！ よかったあ、やっぱりクリだあ！ 父ちゃん止めてもらってー！ やっぱり川に行ってたのよ！ クリ、クリーい、さあ、おいで！ 早く、早く！」

私は幌に頭をぶつけんばかりに踊り上がり、トラックから落ちそうになるほどクリに向かって両手を伸ばした。クリはマリのように転がり駆けてそこまできっており、当然父がトラックを止めてもらってくれるもの、と私は決めていた。

（そしたらクリはこの手にジャンプ！）

だが、私の頭の上に降ってきたのは重く冷たい眩きであった。

「……駄目だ、これ以上みんなに迷惑を掛けられない」

何も気づかないのか、トラックはさらにスピードをあげ、いったんは近づきかけたクリとの距離をみるみるうちに引き

伸ばしていく。

私とのんちゃんは身を乗り出し、荷台の縁を叩いて泣き叫んだ。

太いタイヤは乾いた土をもうもうと巻きあげ、その中を見え隠れしながら飛ぶように走ってくるクリの姿を無情にかき消すと、山をまわり込むように狭い谷間の道に突進していった。

のんちゃんは、わあわあと大声で夜まで泣いて叱られた。

幌が左に右に揺れる悪路に身をまかせ、汗と涙と、容赦なく降りかかる埃にまみれて、私は固いアンペラにいつまでも泣き伏していた。



（え・早乙女光子）



月刊「食べもの文化」の

芽ばえ社

# アレルギーの窓から 大地が見える

息子のアトピー性皮膚炎と共生の日々

佐々井優子 著

1226B  
0006  
円買判

牛乳・卵・大豆、そして米も小麦までも制限して、アトピー性皮膚炎の二人の息子と共に厳しい食物除去療法を続ける生活の記録。医療の力や同じアレルギー児をもつ親同士の力に支えられ治療にまい進する中で、人間にとつての食べものの本来の姿が、大地に根をおろした食べものの本来のありかたがみえてきた。

改訂アレルギーと  
食べもの 10刷・改訂2版

河野泉 他著 1000円

鼻炎・結膜炎・ぜんそく・湿疹・アレルギーと食物の関係を基礎から知る本。

アレルギー治療の  
料理と献立 好評5刷

松延正幸・千葉友幸 編著 1000円

必要な栄養を摂りながら実践する治療食、百の献立を原因、年齢別に活用できる。

お近くの書店または当社までご注文下さい ☆ 東京都板橋区板橋3-34-2 ☎03(910)3605

月刊

## ゆたかなくらし

定価 500円(送料50円)  
年間購読料 6,000円(送料600円)  
御購読は直接当会へ御申込み下さい。  
郵便振替・東京9-162684

すいせんします

原田 正二  
驚谷 善教  
中島 紀恵子  
浦辺 史  
真田 是  
長 宏  
小川 政亮

木下 恵介  
山田 洋次  
早乙女 勝元  
前田 甲子郎  
寿岳 章子

### 《国民的課題としての老後を考える特集》

11月号特集 ゲートボール考

・ゲートボールの功罪

前大正大学教授 原田正二

・高齢者のスポーツ革命

医師 稲垣元博

12月号特集 狙われる高齢者

・高齢者と悪徳商法……村千鶴子

・座談会 “不安”そこが狙い目

’88年1月号特集 いま都市で街が消える

・ルポ底地買いの実態と問題点、他

2月号特集 老人保健施設

—好評連載—

歯と口の中の健康……吉田 万三  
シリーズ・住は人権……各 専門家  
日本の古典に描かれた老人……市川 真一  
くすりのはなし……小林 裕子

編集・発行 全国老人福祉問題研究会

〒177 東京都練馬区南大泉4-16-37

投稿ホットライン——笑う門には福来たる

# ファミリー・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば——ああしんど！

## 鬼 千 匹

愛知県豊明市 坂爪 千草

今年の八月に、舅は前立腺のガンで亡くなりました。四十九日も過ぎ、今はホッとしたところ。と言いたいけれども、まだあるんですね。ナニが……。

私が主人と結婚したのは、五十二年四月十日、うららかな春の日で、名古屋城の桜が満開に見えるナゴヤキャッスルホテルでした。

電気工事業を営む父の関係で、サラリーマンに嫁いだ私にしては幾分ハデな式

になりました。でも一生に一度のこと。そのときの私は、これで全て人生がバラ色になるような気がして、すっかり女優してました。

新婚生活のスタートはまずまずでした。姑は、主人が中学のとき亡くなっていますし、舅はしばらくの間、今まで通り上の姉の所にいるというので、長男と結婚しても気は楽でした。

しかし、私を待ち構えていたのは、舅

の鬼一匹ではなく、小姑の鬼千匹。それも二人いたため二千匹だったのです。

最初の難関は、長姉の舅が（この家も姑はすでに亡くなっていました）入院先の屋上で首つり自殺をしたとき。当然お葬式はします。ですが姉にはお金がありません。これは誤解のないように言っておきますが、彼女の家は、どんな様と自分、そして同居している自分の父親が稼ぎ、父親は年金までそっくり姉に渡していたので、子供を含めた一家六人、十分に生活でき、かつ預金できたと思います。が実際お金がなく、いつも電気やら電話の催促状が来ていました。つまり姉は「エカッコシイ」で、他人がみているとパッパッとお金を使ってしまいう質なのです。しとしとと雨が降る九月の夜遅く、その知らせを聞いて、主人は即座に私に言いました。「明日六十万、銀行へ行って下ろしてこい」

臨月のお腹をかかえた私は、そのときはさして不満にも思わず、翌日銀行へ行

ってお金を下ろし、姉に渡しました。もちろん、姉も兄も一言のお礼も言いはいませんでした。そのときも嫁なんだし、返してくれるお金なんだから、「まっ、いいや」と楽観していました。

それより三か月前の六月に、主人は敷島パンに勤めていたのですが、営業で回っていた市場の中のパン屋を、二百万で買い取っていました。私が身重だったため、姉に給料を渡してやらせていました。我が家の全財産をはたいていたので、葬式のお金は、主人の給料とその店の利益から作ったものでした。

姉の返済は、彼女の給料から五万ずつ引くということになりました。十月から翌年の二月まで五回分、二十五万返してもらったところで、思ってもみないことが起こりました。

主人の仕事は朝五時に出社。午前中パンを四トントラックで二回運び、午後は営業、夜は会議。体重四十八キロの骨体美で頑張っていたのですが、二月に市外

への転勤ですっかり体の調子を悪くしてしまつたのです。そして、とうとう会社をやめることにしたのです。

子供は四か月になったばかりでしたが、姉にパン屋から手をひいてもらって、夫婦でやっていけばどうにかなると話し合いました。

ところが、姉の返事は、「いやだ」

私たちが買った店なのに、何故。

私たちが生活できなくなるのに、何故。姉の言葉は決定的でした。私たちはなすすべもなく、その夜の子供の泣き声は、小さな家に響き渡り、私はあやすことも忘れて、呆然としていました。

結局私たちは、私の親に頼るしか他に手だてがなく、主人は畑違いの電気工事をやることになったのです。

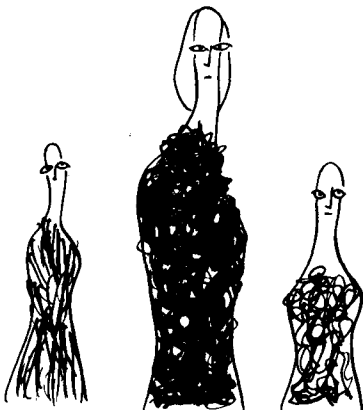
そして姉は店を続けていたのですが、その後一銭も私のものにはお金が入ってきませんでした。

翌年の七月。裸一貫で今の店を築いた父と、主人では合わなく、私たちは家を

出しました。いろいろありましたが、年もせまった十二月、現在の所で喫茶店を開くことができました。

夫婦ともに背水の陣で、二歳になったばかりの息子は保育園に入れました。「ママ、ママ」と泣く子供に背を向け、これも食わんがためと自分に言い聞かせました。

店は順調にスタートしました。それと同時に、姉の店は、その市場を取り壊し、マンションを建てることになり、立退きを言い渡されました。立退き料の交



## 庭下駄

東京都武蔵野市 入間田礼子

渉は主人も行き、なんといっても初めの契約書はこちらにあるのですから、百五十万でけりがつきました。

「ああ、お金が返ってくる」

と思った私が甘かった。

百万は姉に、五十万は私たちに。そのとき突然舅が、

「墓を建てる」

と言いだしたのです。そして、その五十万はすぐさま没収されたのです。姉たちは、

「私たちは他家へ嫁いだ身だから」

ということ、墓にはすっかり姉たちの名前が建墓者ということではってありますが、援助金は一切なし。

それからは、墓まいりするたびに、あの忌まわしい日々を思い出します。そして、隣ですましている姉たちを蹴ってやりたい衝動にかられるのを、ぐっとがまんし、

「南無阿弥陀佛」

と手を合わせるのです。

義父の葬儀は八月の終わりにあった。

私の夫を含めて、三人の息子の、それぞれの会社なり、役所から、かなりの手伝いも来ていたし、身内は遠くから駆けつけてきて、ごった返していた。

祭壇は、東側の八畳間に作られ、他の三室も、二階の三室も人で溢れていた。

一階のさらに奥の八畳間には、義母にとつての懐かしい顔々が集まっていた。

年老いて、いくらか身長が縮んだかには見えるが、すらりと背の高い、上品な顔立ちの義母は、甥や姪達に囲まれ、昔語りをして、楽しそうに冗談を言っは笑わせている。

入り口に立っている私に目を止めると、そそくさと立ち上がって近寄り、手屏風で口元を囲いながら、

「おじいさんは？ どこへ行ったの？」

あんた探してきてちょうだい。皆来てるのに……」

「きょうは、おじいさんのお葬式なのよ。お棺に入って、あっちの部屋に……」

「おじいさんの……葬式かい？ そうか……葬式かい……」

納得した顔で一層声を低め、私の耳元に口を寄せる。

「おじいさん、河へ入って死んだりして、迷惑かけて、みっともない。困っちゃうね」

「河じゃないのよ。ほら、仙台で、車の事故で、びっくりして亡くなったんでしょ？」

「そうかい？ 事故で？ そうか、そうか」

「叔母さあん、ここ、ハイ、ここに座って」

輪にひき戻されると、機嫌よくニコニコと話に加わっている。

昨夜から、何十遍となく、くり返すこの会話を「だから言ったでしょう？」を飲み込んで答えているものの、表情や物言いには、その気持ちが出てくる。それはそれで、義母には感じるとみえ、落ち着かずまた立ってくる、のくり返しである。いまは若くない、甥姪の誰彼が、よく分かると思うほど混乱してきている。昨今だった。

葬儀社の男の一人が、耳打ちにきた。「お義母さん、始まりますから、あっちへ行きましょう。皆さんもどうぞお願いします」

立ってきた義母の杓元を正しながら、「おじいさんのお葬式ですよ。大勢見えていますからね」

「そうかい。ちょっと、おじいさんを探してきてよ。どこへ行ってるんだらう。皆集まってくれてるのに……困っちゃうね」

「大丈夫、おじいさんも向こうにいますよ」

諦めてそう答えると、迎えにきた義姉のほうへ押し出した。その背中が、着物を通して骨に触れるようだった。

誰もいなくなった部屋の、散らかった



座布団を重ねたり、曲がったテーブルを直したりしながら、ふと庭に目をやると、葉鶏頭が、真っ赤になっている。

九十に近いその年まで、老人会の会長を務め、納税組合の仕事を束ね、何にでも興味を持ち、ことにTVのスポーツ番

組が大好きだった義父が、仙台に旅発つ前に、

「ばあさんが、水やり忘れると可哀そうだから」と庭へ下ろしていった葉鶏頭だった。

晴れて暑いのに、どこか秋の気配がして、空にはさっとひと刷き、薄雲がかかっている。

読経の音が、マイクを通して奥庭まで流れてきていた。

つかけた庭下駄は、何故か右足ばかりがぐぐりと減っている。

日に透けて血の色を見せる葉鶏頭は、私の胸の高さにあった。

一瞬、思いもかけない強い風に、葉鶏頭は向こうへ倒れかかり、すぐに戻った。ほんとにお義父さん、亡くなったんだなあ。

白皮の緒の、履き古した庭下駄を、丁寧に紙に包んで、ゆっくり廊下を歩いていった。

(え・万谷陽子)

# 情報 コーナー

## ●三桃会へ入りませんか

今年の一月から三月まで、武蔵野市で開かれた文章教室の流れの会です。互いに作品を読み合い、何とか少しでも向上したいと願っています。会員が少ないので募集しています。お待ちしています。

◆日時 毎月第二金曜日、午前十時から十二時。

◆場所 武蔵野市中央コミュニティセンター  
◆連絡先 代表 入間田礼子 Ⅷ〇四二二―三三―三九二

## ●ベビーシッター求む

五歳の男児、午後一時三十分～五時三十分ごろまで。  
月数回、曜日不定で申し訳ありません。詳細はⅧにて。  
国分寺市泉町三一四 二一六〇六

玉置久美 Ⅷ〇四二三―二四―七四二一

## ●ダイヤル・サービスが大分で情報サービス開始

当社では九月より大阪で情報サービスを開始しました。ぜひご利用下さい。

電話情報サービス

◆名称 (大阪) DCテレホンサービス

◆開設場所 都ホテル大阪三F大阪市天王寺区上本町六一―五五

◆受付時間 AM十時～PM六時 日曜・祭日・年末年始は除く。受付時間外はテープによる情報サービスを提供。

◆受付電話番号 〇六一七七四―〇七〇七

◆内容 ダイヤモンドクレジットカード会員を対象としたショッピング、旅行、レストラン案内、各

種のレジャーなど、エンターテインメントの水先案内をするテレホンサービス。

◆問い合わせ先 東京都渋谷区神宮前四一―〇一四ダイヤル・サービス(株)インフォメーション事業部 Ⅷ〇三―四七五―一〇〇一 宮島

## ●求む おともだち

保育園児二人、いい年して専門学校へ行っている夫をかかえて、仕事や家事に追われています。やりたいことはたくさんありますが、時間がなかなかとれない現状です。普通はそれなりに近所の人や職場の人とつき合っていますが、思い込みの強さのせいか、なかなか友だちができません。子育てのことや仕事のことなど語り合える(手紙でも)人がいたらいいなあと思っています。〒366埼玉県深谷市常盤町五四―四 藤原志津子(33歳)

# 情報 コーナー

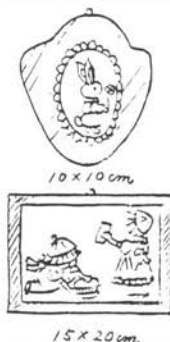
## 私のPR

### ●痔でお悩みの方へ

中国医療の総本山で画期的な治療を受ける訪中団を企画しました。消痔灸、注射法で二三日で効果あり、合併症、後遺症の心配はまったくありません。

北京滞在中市内観光、万里の長城見学も組みこみ、五泊六日の予定で、第一回のツアーは来年一月初旬です。  
◆お問い合わせ先 日本中国医学普及協会会長山本いと子 Ⅷ〇四五一五〇四―三九三七

### ●デコパージュの壁飾りを贈り物にいかがですか



板やたまごの殻などにデコパージュした壁飾りをあなたのお部屋に飾りませんか。部屋のアクセントになって楽しい気分になさってください。クリスマスや誕生祝いのプレゼントにも喜ばれると思います。アンティークなもののビーターラビットのようなかわいいものなど、いろいろありますので、電話でご注文下さい。値段は千円～二千円位で、市価より安くしてあります（送料は別）。都内でしただけお伺いして作品をご覧に入れます。

◆連絡先 〒150 渋谷区神宮前三一  
二二―二 成井登代子 Ⅷ〇三―  
四七〇―三五一七（夜六時以降）

### ●「自分史ノート」発売中！

自分史の書き方、年表、ブックガイドつき、増減自由のバインダー方式の自分史ノートができました。表紙は淡いサーモンピンクか淡いブルーグリーン、どちらかをおえらび下さい。

### ◆定価三千円

プレゼントにも最適です。申し込みは書店か直接松香堂書店へ  
〒602 京都市上京区下立売通西洞院  
西入 Ⅷ〇七五―四四一―六九〇



### ●情報コーナー もっとご利用を！

情報コーナーは皆さんのコミニケーションのためのページです。もっともっとご利用下さい。

お友達を求める、ゆずりますあげます、本探し、求職、求人、臨時のお手伝いを頼む、など、いろんなことで、読者相互の扶けあいをお願いします。趣味でお作りになった作品なども、PRして販売なさってください。

但し継続的に、しごととしてのPRをなさる場合には、広告料をいただくことがあります。金額はご事情をうかがい、ご相談の上とりきめします。

投稿ホットライン——言うべきか言わざるべきか

# 親のホンネ

この際言っちゃう！親だから、感じるここといっぱい

## 悩める母よりS・O・S

兵庫県神戸市 吉崎 玲子

「かあさん、どーしよう。うち、英語0点やア」帰ってくるなり、ヘラヘラ笑いながら娘（中一、一人っ子）が言った。「ま、まさかア、じよ、冗談でしょ。一点か二点はあるでしょうが?」私の手は軽快に玉ネギをきざんでいる。

「マジ。0点。日本人やのに、なんで英語なんてせんなんねんって考えたらナ問題、見てるだけで、うっとーしくなっ

て、ちよっとだけ書いていた答えも、ゼーんぶ消して出した」とのたもまた。顔がひきつると同時に、頭に血がのぼった。……が、かろうじてこらえた。

結婚九年。相手は子連れ。わたしや、母は母でもママハバだ。ひな人形のように愛らしかった当時四歳の娘も、今や、ムカつく十三歳。一筋なわではゆかぬと

きが来ると、脅かされていたが、まさに今がその渦中。

中学生になって、急にひどくなった。

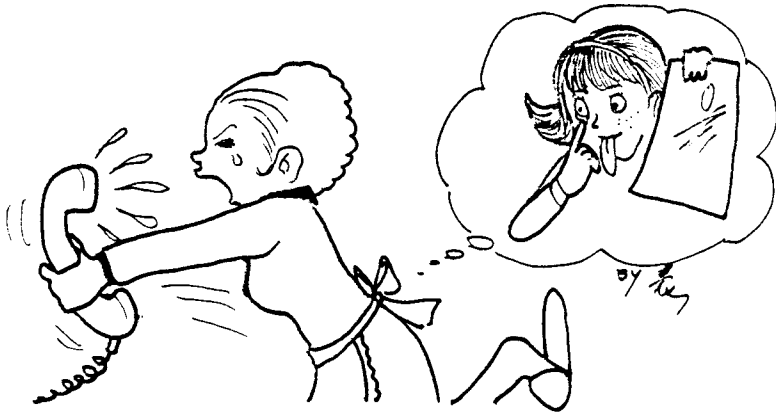
提出物は出さない。プリント類はかばんの中でくしゃくしゃに丸まったまま。ルーズ、いいかげん、だらしない、学習意欲ゼロ、マルの部分を見つけて、子育てはおおらかに根気よくと、いうけれど、今の私にそんな余裕はない。

小学校時代、よそ様の子はセッセと塾通いをしていた。教育費を捻出するため、よそ様の奥様はセッセとパートに励んでいた。眩しい光景を横目で見ながら「イヤならば無理して行かなくてもよい。中学生になったらやり出すだろう」と、樂觀していたのがいけなかったのか。何事もなく、平穩無事に育つことを願っているが、手を汚さずして成果は得られない。ママハハのわりには、らくらくとこまでやってきたことに對するシッペ返し。ひとこと、「親の責任」と言われれば返す言葉はないが、一学期の個別懇談後、



教育相談のダイヤルを回し続けることになろうとは予想だになかった。夏休み前半はイライラ。後半はその二乗。九月一日、電話では気持ちがおさまらず、自ら、教育相談所に駆け込んだ。高校進学のこと、登校拒否や積木くずしへの懸念……etc. 娘のことを心配するというのは建て前で、それ以上に、胸を張って生きているつもりママハハの自己防衛にも思えてくる。母親の愛は無償……。私はハハの仮面をつけているにすぎないのか。そんな思いを抱きながら、週一回、一か月間のカウンセリングに臨んで、親の心構えをしっかりと聞いたつもりだった。

二学期が始まり、昨日、今日の二日間  
は中間テストだった。夏休みの課題もろくに仕上がっていない、相も変わらず、教科書、ノートは落書きだらけ。宿題に手もつけない。マンガとテレビのみ、すばやい反応を示すだけで、かばんすら開



けようとしなない。気にするなと言われても気になる。家族三人、狭い団地に肩寄せあって、寝・食を共にして暮らしているのだ。私とてストレスがたまると。だから今日は再び、県の教育一〇番なるところに電話をして、娘が帰るまぎわまで、受話器を握りしめていたのである。声を震わせている私に、相談員の先生は、おっしゃった。

「お母さん、今は、我慢、我慢です。例えば0点とってこようが、遅刻しようが、彼女の部屋が荒れ放題だろうが、忘れ物が続くのが、オール2であろうが（書いてあるだけでも息苦しくなる）、決してとがめるような言い方はしないこと。イヤイヤでもちゃんと学校へ行く。そのことを認めて評価してあげて下さい。物事に動じないすばらしい性格じゃありませんか。意欲が出てこそ、学習面は少しずつ伸びるものです。高校のことは後で考えましょう。

登校拒否になりやすい子供はネ、逆に

優等生っぽい子供が多いのです。ルーズな子はそれなりにちゃんと対応していますよ。そんなことより、今は親子の信頼関係をしっかりと結ぶことが大切。どんなことがあってもお母さんだけは味方だよ……という気持ちで見守って下さい。成績ばかりをやかましく言わないように。本人はよく分かっているし、気にしているはずです。だから言われたくない。おさえつけられたら誰だって反発したくなりますよ。そんなときは『気持ち』を伝えるように努力してみてください。お母さんのようなご相談は、まだまだ幸せです。がんばって下さい」

今聞いたばかりの声が、エンドレステープのように頭の中でぐるぐる回っている。私の顔をじいっとうかがっている娘に、包丁を持つ手を置いて、こう言った。

「お母さんは……おこらへん。人生八十年。これからのあんたに、どんなことが

おこるかわからんけどナ。一回、二回、0点取ったからいうて、どういうことない。これからのがんばりで、なんぼでも取り戻せると思う。……そやけど、単語や漢字は、一コ書いたら一コ覚えられるで。あんたの中で冬眠している『ヤル気』を起こしてやったら、五十点は取れるんとちがうかナア。そう思ったら、なんや悲しいナア……涙が出そうやナア……」

んやんか。泣いてみたってどうもならんわ。やっぱり、かあさんは0点にこだわってる」(こだわらんといかんのはあんたでしょ!!)

こんな会話を交わしたあとも、片手にマンガ。テレビの前にゴロリ。ちっとも気にする様子はない。今となってはすでに遅いなのか。

小心なママハハの目に、強烈に玉ネギがしみてきた。

## 思いがけぬ妊娠、そして……

二〇一号に掲載させていただいた「牧場勤めを始めて」の投稿直後、妊娠していることがわかった。あの内容通り、牛の餌作りという重労働に慣れ、快感さえ覚えていたころである。

妊娠が判明した時点で仕事を辞め、もっとも流産しやすい時期ということもあって、夏休みに予定していた北海道旅行

埼玉県東松山市 坂下 晶子(31歳)

の宿も全てキャンセルした。子供を欲しがっていた夫は狂喜乱舞したが、私は正直言って素直に喜べなかった。仕事はもちろん、活動中のボランティアや夫と一緒にの音楽のバンド演奏も続けたかったし、今の住み辛い世の中に子供を送り出すことに、最近抵抗を感じていたからだ。しかし、胎動が激しくなるにつれ、大きく

なってくるおなかの子がとていとおしくなってきた、極楽とんぼの私にも母性本能があるのだなあ、と一人密かに思うようになっていた。

出産は、別にラマーズ法を取り扱っている産院ではなかったが、理解ある院長先生の快諾で夫も立ち合えた。お産はそ



れなりに辛かったが、彼の手を握ることで安心感があった。予定日より四日遅れて、なんと夫と同じ誕生日の三月五日に息子が誕生した。夫にとっては二重の喜びだった。

退院後一週間だけ近所に住む姉に通いで手伝いに来てもらって、実家へは帰らず、大抵のことは夫婦で頑張った。実家へ帰らなかった理由は至極単純、我が子の成長を生まれたときから夫婦で見守ることは当然、という考えに基づくからである。その分会社勤めの夫には負担だったろうが、私の産後の体を労って、おむつや衣類の替えから、私が母乳を飲ませた後のゲップ出しまで、必要以上に協力してくれた。

さすがに彼にも疲れが溜ってきたらしく、疲れた者同士でイライラが高じ、知らず知らずのうちに些細なことでぶつかり合うこともあった。けれど、お互い思いやり過ぎての結果だと気付き、私自身こうして「わいふ」へ投稿できるまでに

余裕を持てるようになると、育児そのものが楽しく思えるようになってきたのである。

赤ん坊はそれこそ食べてしまいたいほど可愛い。が、この甘さに浸ってばかりはいられない。これからが大変なのだ。

「狂育ニッポン」ならず教育現場の荒廃、物質文明化による心の貧困化、農薬づけや添加物だらけの食べ物、核問題など、たくさんの恐怖ごとが待ち受けている。

母親になった以上、できる限りこれらに対処し、また闘っていくつもりである。

妊娠してからなかなかまなならず、何度か落ち込んだこともあったが、今後は現実を享受し、「子供がいるから何もできない」ではなく、「子供と一緒に頑張ることができる」ことを積極的に探して取り組んでいきたい。

ともあれ今は、伝い歩きを始めた生後七か月の息子に邪魔されながらも、書き物ができることにささやかな幸せを感じている。

# わたしは産みたい女

神奈川県横浜市 高橋 理恵

いやはや、話には聞いていたけれど、文字どおり目がクルクル回るほど忙しい。子どもが二人になってからというもの、労働量は二倍いや三倍に増えた。おまけに上の二歳の長男は、近所でも評判の腕白坊主。片手に首の座らぬ次男を抱え、片手には暴れる長男を抱え、戦争の日々とは正にこのこと。夫婦仲は遠くなるし収入が増えても出費はかさむ一方、家は狭いし車はないし。下の子がかわいいはか、全くだいことなし。

しかし、どういうわけなのだろう。私の昔からの子だくさんの夢は、未だ消えないでいる。悪露が終わると十日あまりで生理が再開、乳いっぱい、毎回安産というこの私の体の中で、もっとはらみだい、もっと育てたいという叫び声が、日毎大きくなくていくばかりなのだ。

なるほど近ごろは、子を遅くあるいは早く産み上げ、どんな外に出ていくことが新しい女の生き方であり、故千葉敦子氏のように、世界のため、女たちの未来のため、子は余り産むな、若しくは全く産むなと言う人もいる。

私とて早く自由になりたい。働いてもみたい。しかし、学校を中退してすぐ結婚してしまった私が、物理的に親となり、乳をふくませ母となり、さまざまな問題に目を開いていくさまは、他人事のように面白く感じられる。そして二人産んでもなお、母としての自覚がたりない自分が、一体何人産めば肝っ玉母さんになれるか試してみたい気もしている。それに第一私たちが幼いころあった、隣近所でのタテの子ども社会が消えてしまった今、再びそれをつくるには兄弟姉妹を増やす

以外ないではないか。

だから、上の子を怒鳴り、自己嫌悪に陥り、寝顔に謝るという平凡な日々を過ごしつつも、やっぱり産み続けずにはおれないであろう自分を感じている。

が、当の協力者である夫は渋い顔。未だ学生を続けつつ、学校帰りに塾の講師をやり、奨学金をもらってかつかつ暮らしている現実の前には、日々の暮らしを食いつないでいくだけで手一杯らしい。

それにつけても、核家族でありながら、私のように、実際に多く産むことを計画している家は、一体どれくらいあるものなのだろうか。「わいふ」の読者の中で、そういう方がいらしたら、ぜひ体験を伺ってみたいものである。



三一書房

東京文京本郷2-11-3  
電 03(812)3131

# このままでは子どもがダメになる！ 母と子の現代病

松岡悟／十年前には見られなかった子どもの病気や異常行動の続出。原因はなにか？本書の実例で思いあたることの多いお母さんは今すぐ反省の行動を。1700円

## アレルギー児が増えている

三一新書  
700円

渡辺雄二／花粉病の真犯人 鉄筋住宅とアトピー性皮膚炎 意外に多いカビによるゼンソク 危険なペットⅡ 小鳥 肉食がアレルギー体質をつくる 薬剤アレルギー ストレスがゼンソク児をつくる アレルギーの根本予防

## 医療過誤 事例相談Q&A

医療過誤弁護士グループ他編著／患者はどんな時に、どんな救済をうけられるか。時効はあるのか、私たちは日常 医師とどんな関係を持つべきか 三一新書・700円

## よい子できる子に

## 明日はない

NHK銀河  
テレビ小説

「お入学」原作

和田はつ子／あの母は  
あの家庭は特別か？  
〈教育〉と家族を考える  
／三一新書・800円

へわいふ誌の徹底アンケートによる性のレポート

# 性・妻たちのメッセージ

この一冊は、回数や強さだけを重要視する男たちの思いこみを打ちくだく。心の問題を無視して性を語ることはできない。261人の妻たちの赤裸な声をきここう。

## 《データの一部》

●どんな夫が愛されているか●経済力のある妻ほど夫ばなれが激しい●妻の婚前交渉は結婚後の幸福と無関係●夫の帰宅時間は性生活に影響しない●三十代の妻は反逆の世代●六人に一人の妻が婚外交渉の体験者●マザコン亭主は五人に一人

## 絶賛発売中！ 発行・グループわいふ

発売・徑書房 (〇三)二三四・四六〇八

投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

# 生きてます 活字人間

——目の鱗、落としてますか？

おいしくて安全

国産小麦でパンを焼く

農文協編

東京都八王子市 和田 好子

小麦、といえばパン、と思うのが現代の私たちだが、小麦がわが国へ入ったのは意外に古い。弥生時代あるいはそれ少し以前、米とほとんど同時に入った。日本人はパンを知らないころから、小麦を食べていたのである。それを粉にして食べていたことは、縄文時代

の石臼が発掘されるのだから確かである。近い時代の農村では、粉にして団子やうどんの系統の食べ方をする以外に、和風パンも焼いていた。クレープ様のもの、まんじゅう様のものなど。

もと水田の裏作であった国産小麦は、今や輸入小麦に押されてく

つと生産量が減ってしまった。自給率は一四％でしかない。

本書は、国産小麦を使ってパンを焼き、もっと食べよう、という趣旨で編まれたのである。

グルテンが少なく、パンにはむかないといわれる国産小麦だが、焼いてみると市販のまっ白、フカフカのパンより、風味豊かなものができる。しかも、ひじき、おから、きんぴら、納豆、雑魚などの和風のおかず（コレステロールが増えない健康食）がよく合い、チ

ーズなど洋風のものももちろん合う。神田精養軒社長が、国産小麦パンですすめる「一汁十菜の朝食」が出てくるが、本当においしそうだ。

ごはんをたく気軽さで焼く方法を、実践者たちが書いていて、愛好者が増えていることが分かる。材料の入手法、自分では焼けないができてのを買いたいという人のために、焼いて売っているパン屋さんのリストもある。

輸入小麦は農薬、防疫のためのかん蒸など意外に危険で、安全性でも国産小麦が勝るといえる。

農山漁村文化協会 一三〇〇円



## 漱石という人 駒尺 喜美著

東京都新宿区 田中喜美子

漱石ほど読まれ、漱石ほどさまざまな角度から語られた作家はいない。彼を神のように崇めた小宮豊隆のような弟子もいれば、なぜ

漱石があれほど執拗に「姦通」をテーマとして追いつづけたのかという原点を、嫂登世との関係に矮小化して求めようとした江藤淳のような評論家もいる。

この作品は、すべての男性評論家がいわばそのまわりをどうどうめぐりするだけだった漱石という人の核心に迫り、彼の文学の偉大さの本質を抉りだしてくれた点で、現存するすべての漱石論を凌ぐものである。こうした作品が、女性

の筆によって生み出されたという事実の重みを、涙の出るほどの嬉しさとともにかみしめずにはいられない。

駒尺さんはまず、夏目漱石の思想の源を、「平民」というその生れと、生家で冷遇されつつ成人したその育ちにおく。人間の平等を重んじる漱石の思想は、現代にも通用する驚くほど民主的なものではあるが、その「民主主義」は、そうした幼少期に培われたものであった。

しかし漱石の真の偉大さは、そうした自分が、家庭では一人の暴君的な夫として、妻を抑圧し、そ

の人間性を歪める存在であることに気づいた点にある。そしてそれが、単なるエゴの相剋をこえて、結婚という制度に深くかかわるものであったということに気づいた点にある。

エゴとエゴの衝突と、疎外の苦しみは、「近代」においてますます増幅される人間の本質的な問題である。明治の「近代」を生きた一大知識人である漱石は、あらゆる他の大作家と同じく、男女の相剋の現実はこの問題を重ね合わせ、身をもってそれに苦しんだのであった。

その歩みを「それから」「行人」「道草」と辿り、「明暗」において漱石は、ついに自我に執するエゴの苦しみをつきぬけて、あらゆる人間をその内面から描く自在の境地に達した、とする駒尺さんの分析は、ほとんど天才的な閃きに

満ちている。

この一冊は、単に漱石文学の本質をとき明すだけでなく、私たちのすべてに生きるこの意味を問いかける。それはこの作品が単なる評論家や大学教授ではなく、漱石と同じ平等主義に立って、人生の真実を求めようとするフェミニストによって書かれているからだ。すべての漱石を愛する人、すべてのフェミニスト必読の書、といいたい。

思想の科学社 二〇〇〇円



## アレルギーの窓から大地が見える 息子のアトピー性皮膚炎と共生の日々 佐々井優子著

東京都多摩市 原田 静枝

子供の病気ほど、親にとって辛いものはない。昔は、乳幼児死亡率が高く、多産多死型だったので、「子供を死なせて親は一人前」などといわれた。一人前というのは、子供の大切さが分かり、ものの哀れを知る、という意味で、まことに悲しい時代であった。

しかし子供の死まない現代には、また昔と違う問題が出てきている。筆者はアレルギー体質の息子二人を持ち、ことに下の子のアトピー性皮膚炎に苦しんだ。昔も乳幼児の湿疹はよくあったが、胎毒と称してみな諦めており、桃の葉のお湯などに入れているうちに、た

いていなおってしまった。

ところが今のはずっとしつこい。またへんに数が多い。「母親が何人か集まれば、その半数近くがうちの子はアトピーなのよ、ということになります」(本書まえがき)というのだから驚く。せっかく赤痢やジフテリアがなくなっても、親子の苦しみは尽きないのだ。

アレルギー専門病院で診療を受け、テストをすると抗原が分かる。牛乳、卵、大豆、豚肉、小麦、米、ダニ……と筆者の息子は数多くのものに過敏だった。

母親の奮闘が始まる。母乳で育てている下の子のため、彼女もそ

れらの食物を除去しなければならぬ。粟、きび、ひえを食べ、雑穀パンを焼く。食生活がすっかり変わる中で、彼女は「現代」の病める環境に気付いていく。

アトピーの子を持つ人ばかりでなく、食を考える人に必読の一冊。

## ずっこけパートタイマー記 鈴木 恵子著

現代の日本で、働くことがいちはんむつかしい階層の女性が、自立を求めて働き出したらどうなるか。鈴木恵子さんの結婚は、その実験記録だったといつてよい。

バラ色の結婚幻想にまどわされて「専業主婦」になった著者が、その生活から脱出したい、と考えたきっかけは、十分に看病してあ

東京都新宿区 野本美希子

げられないまま逝かせた母の死。夫に気がねする自分に気づいたことが、仕事へのきっかけになった。最初の仕事はスーパーの荷出し係。母親が働きはじめると、子供の生活も変わる。何かと母親のサビスを要求する幼稚園から保育園に移った娘たちは、環境の変化をのりこえて逞しく育っていく。



芽ばえ社二二〇〇円





しかし働く主婦の大敵は、子育てではない。夫の転勤なのだ。

ようやく根をはりはじめた生活を根こそぎにされて、夫の勤務先大阪へ移る決意を固めたのは、別居生活の夫から届いたラブレター。「あの人に私が必要なんだわ」と感激して移った大阪で、また一か

## みぢかな女性学

若尾 典子 著

大学の講座に「女性学」が登場するようになったのは、最近のことだ。それまで長い間、「こんな

らのやり直しが始まる。

時給四二〇円の小僧寿司の寿司職人をふり出しに、人材派遣業の事務職。夫との壮絶なケンカ、そして二度目の転勤……。

こうしたすべてを経過して、いま鈴木さんは、農業に生きることにより自己を発見しつつある。夫もまた、モーレッツサラリーマンからの脱皮の道を歩んでいる。

これから先、この夫婦はどうなるだろう。体当りで生きる女がここにもいる。と知らせてくれる一冊だ。

汐文社 一三〇〇円

東京都日野市 早川 裕子

こと、おかしいじゃないか、ひどいじゃないか」と、女の側にくすぶりがながらも、「ずっとそうだったから、」

「みんなこうなのだから」しかたないと、押し込められてきたことがらに、やっと光が当たり、研究されるようになったのである。

この本には、それに「みぢかな」がついている。頁をくつてみると、なるほど、「親孝行」、「財布のヒモ」、「トイレの数」、「忘年会」、「お嬢様」、「ドル安」、「單身赴任」など、日常生活の中に埋もれている卑近なことがらを、一つひとつ掘り起こして、男女平等の観点からするとどこがおかしくて、どう直したらもっと住みよい社会になるかを、小気味よく分析して見せてくれる。

著者は憲法を学んだ沖縄大学講師。だから、私たちの生活が本当は法律によって守られているはずなのに、現実はずれていることや、日本では法律面でも遅れていることの指摘が随所に見られ、特に沖

縄という地域に根強い慣習が紹介されて、目を開かせられる。

「法律を学ぶとはこういうことなのか」と、がぜん元気の出た私は、ホヤホヤの法学部学生である娘に、まず一読をすすめた。

著者自身が女性問題にぶつかり、辛い体験の中から、女の問題を構造的にとらえ、身近なこと一つひとつから、地域の人たちといっしょに考え、直していこうという姿勢が、ここに見られる。こうして、世の中は進歩していくのであろう。

沖縄タイムス社 一三〇〇円

## みぢかな女性学

若尾典子



# ない人生を

## ●私は満足できない

「自分のひとつしかない人生を、大切に自分の意志に忠実に生きてみたい」

こういった投稿を雑誌でよくみかけます。投稿者の多くは既婚の女性で、男性の同様の趣旨の発言をみかけることは滅多にありません。

男だって自分の意志どおりに生きていける者など、ほんのひと握りもないと思うのですが、男はそんな発言をしません。諦めているのか、諦めないまでも、つねに目の前にぶら下がった給料のアップや昇進のチャンスをかちとるための闘いを続ける男にとっては、それが人生で、自分だけの人生などと、改まって考えることは少ないのかもしれない。

二〇八号の結婚成功の条件を探るを読んで、結婚生活に満足していると回答した人が八四％もあるという事実、最初は驚きました。

私の周囲の（類は友を呼ぶといいます

から、似た者同士が集まった結果かもしれないが）友だちの中で、自分の結婚に満足していたり、成功だと思っているらしいのは、ほとんどいません。

みな、家計を補うための仕事をもち、家の内外の諸事万端引き受けて、疲れ果てている四十代の女ばかりです。

初めのうちは疲れ果ててはいなかったのですが、仕事に疲れ、家は寝る場所と決めて、育児も経済も全てをおしつける夫を理解しようと努力し、不満をじつとがまんし続けるうちに、夫は稼いでくれるだけで、あとは全部妻の役割という役割分担を担うようになってしまったのです。

そのうちに、夫は、妻が何を考えているかを考えようともしくなくなり、不満を抑えているとは思ってもせず、稼ぐ以外のことは全て妻に依存するという、一定のパターンができ上がりました。

しかし、あるところで、これでは自分

# ひとつしか

が潰れてしまうと思った妻が、夫にもっと私の人間性を認めてくれと要求することになるのですが、一様に夫はきょんとんとて、妻の要求自体が理解できなくなっているのです。

私の夫もその中の一人です。

真剣に考えれば理解できないこともないのでしたが、面倒くさい、時間もない、そういった理由で、まともに向き合う気持ちにならないのでしょうか。しつこく言ううちに、腹を立てたり、逆に怒鳴られたりしますから、私の人間性などというつかみどころのない要求を持ち出して揉めごとを起こすのも面倒で、依然として同じ状態を続けていく。そして心の中にぼっかりと開いた穴は、夫に対する諦めという形になって、残り時間の少なさに関わりなく、広く深くたってゆきます。

そうした経過を経て、夫に諦めをつけた私の友人たちは、見事に夫に依存しない女になり、浮気をされたり、離婚とい

う事態になっても、立ち向かう勇氣と実力を持った女になったようです。

自分や子供が病気になるっても夫を頼りません。女だけの連携で片付けてしまします。

車の運転、パンク、ちょっとした修理くらいなら夫の分までやってのけますし、家の売買、借金、家族旅行、全て妻の役割です。

ほんとに夫は稼いでくれるだけなのです。困った状態の子供は一人もいず、皆もう大学、高校の年齢になりました。心の中の空洞以外は全てうまくいっています。

それなのに何故、私およびその仲間は結婚に不成功だった、不満足だったと思うのでしょうか。

逆に、われわれの夫のほうへ「結婚は成功でしたか」と訊くと、多分一様に「成功でした」とニコニコと答えるだろうと思います。

なんという食い違いでしょう。馬鹿馬

鹿しいような食い違いです。

私に関して言えば、私の結婚は結果として不成功であったと思っています。

子供に関してのみ言えば、一人一人自

### ●平たくいえばさびしいだけ？

しかし、自分の意志に忠実に生きていて幸せかというと、何が自分の意志なのかほんとうのところはよく分からないのです。

子供を育てたい。やりたいこともある。夫と自立した関係でつき合い意志の疎通を図りたい、というように挙げていきますと、際限もなく自分の欲深さにうんざりします。

私は消去法で自分の欲を消していくことにしました。

自分の中で、とに角、のみこめるものはのみこんでしまい、のみこめないものだけをとり出してながめてみるのです。

転居、転勤は十余回、今までは黙って同行し、一人で奮闘してノイローゼ気味

立心が旺盛で心優しい者のようですから、今のところは成功したのかもしれないが、先のことはわかりません。

になったりもしましたが、もうたくさんです。子供たちが可哀想です。二十年來の夜中過ぎの帰宅は、構わないけれど、外泊のときには電話連絡くらいはすべきだと思ふし、また一人でさんざん深夜のテレビを楽しんだ後で私を起こすのは止めて欲しいとか、まあそういう些細な事柄を思い浮かべては、まだ我慢できるかなと自分にたずねてみました。

すると、恐ろしいことに気がつきまして。

些細なことのようですが、積み重ねてみますと、夫の日ごろの生活と私の生活の違いが歴然と現われてきます。全く合わさっていません。私が、どうしてものみこめない点は夫も断固としてのめない



点であり、私がのめるところは、夫は意識すらしていないのが、よくわかります。そうして考えていきますと、私は夫の朝帰りや転勤が不満なのではなく、なんのことはない、平たくいえばさびしいだけなのです。

夫が好きなときに、夫の好きなやり方で私を相手にしてくれるのではなく、私が好きなときにも私の好きなやり方で相手をして欲しい、つまり、正面から向き合って欲しいということ。いくら正面から向き合っても私の気持ちや意見を尊重してくれるといっても、夫の好きなと

きだけ向き合ってくれても、それでは尊重してくることはありません。

私はそこにごまかされていました。

夫が私をごまかしたのではなく、夫自身も気付かないことです。

人間の弱い気持ちですが、いつも同じ時点ですべて出たり、同じ種類であればよいのですが、千差万別です。夫婦であっても一心同体ではないのですから、ひとつの事件を前にしても違った形の哀しみや喜びがあるはずです。

夫は、自ら認めるような企業戦士です。高い給料もとりますし、世間に誇れる肩書きもあります。浮気じみた話もなく、冷静な論理的思考を持った勤勉な努力家です。性格的には温和な人だと思います。夫は自分が企業で落ちこぼれないために相当の犠牲を払っています。

●喜びも楽しみも一緒にと思うのに  
私の人間らしい生活とは、自分の目で見、感じ、夫の弱いところは私が

睡眠時間、食事、趣味や家族との交流を楽しむようなプライベートな時間、どれにしても満足なものはありません。

年中、睡眠不足で頭痛に苦しみ、頻々と繰り返す胃痛、胃潰瘍の持病を持ち、子供との交流どころか、日々の疲れで休日是一部屋に閉じこもって出てこないような有様です。

夫のそういった企業人としてのあり方や家庭人としてのあり方は、私からみれば、まさに異常事態であり、どうねじ曲げて解釈しても、人間らしい生活とは思えないのです。

もし、私が夫の肩書きを自分の勲章と思ひ、夫の高収入で物欲を満足させることが私を充実させることだと思えば、問題は起きず、私のさびしさはそれで報われるのですが、私にはそうは思えません。

補い、私の弱い部分は夫に補ってもらって、一緒に笑い、楽しみ、悲しめること

です。そうしながらお互いが充実し、高め合えることです。

夫も決して楽しくてそんな生活を続けているのではないと思います。人間らしく笑い、楽しみ、周りの者と睦み合いたいと思っているのでしょう。しかし、エネルギーを消耗し尽くして、そんなゆとりは残っていません。

でもときどき、夫もさびしいのだと思います。

閉じこもった部屋から出て、子供に話しかけたりもしますし、私に話しかけたりもします。

自分が好きなときだけ、余力があるときだけに限られています。私の心や身体が弱っていたり、子供が悩んでいたりとときとびったり一致すればいいのですが、そうはゆきません。こちらが夫の手を借りたいと思うときは、煩わしいことはいやだ、一人にしてくれと拒否します。拒否せざるを得ないのです。迂闊に耳を貸して、ずるずると、妻や子供の日常

生活や、精神生活にとりこまれたら、企業人としての生活に支障がでてきますから、意識してでも家庭にとりこまれないようにしなければなりません。

企業の中の働き蜂と、妻との生活を大切にする家庭人とは、夫の精神の幅では両立しかねるのだと思います。

論理的思考をする夫が、私の人格を認め、私とともに向き合ってくれる姿勢があるとしても、それはまず夫が企業人であるという大前提があるうえでの理解だということがよくわかりました。

後は私自身が私のひとつしかない人生をどう捉えるかということです。

持ち合わせている母性本能を発揮して、夫の企業生活が終わるまで、夫の母親になればいいのです。夫や子供を育て、愛することを自分自身を充実させることだ、幸せだと思えば、さびしいとか、自分の人生を考えたいかを思う必要がなくなると思いました。

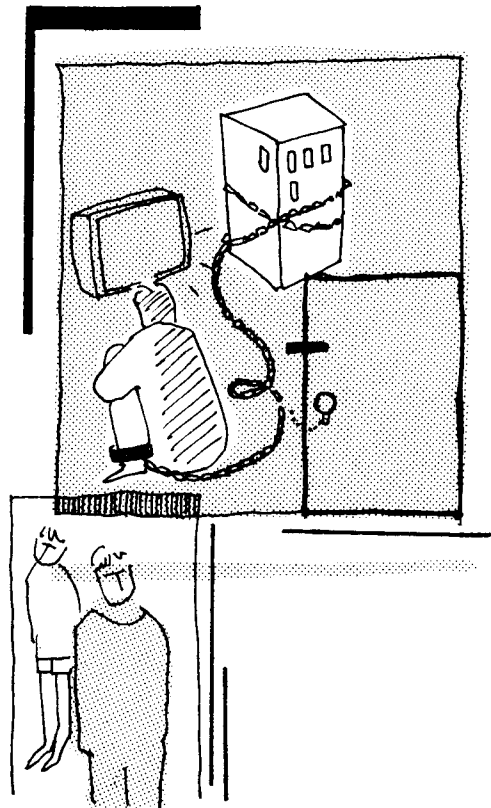
さびしいと思うでしょうが、子供の

進学や夫の昇進なども私の喜びになるでしょう。

夫が企業人でなくなる日に私と夫は、仲良しになって、二人で人間らしい生活（旅行とか趣味とか今までやれなかったこと）をすることができるのでしよう。

夫が営々として築いてきた多少はまとまった金額のお金を使って。

確かなことは、それは今すぐではなく



て、十年先だということです。

しかし、この先十年、私の母性本能はもちこたえるでしょうか、枯渇しないでしょうか。

夫の母親になるとなれば、無私でなければなりません。本質的には甘ったれでさびしがりの私の心の空洞をどこまで埋めたいのでしょうか。それを夫に持っていくわけにはゆかないのです。邪魔

をしないでくれ、退職したら海外旅行に連れて行ってやるからと言われているのだから。

趣味か、レジャーか、不倫か、買い物

## ●母親役は下りました

夫の母親の気持ちになれば、生活は安定するのですが、それが私の心を満たす喜びにはならないようです。それどころか、無理やりに抑えつけたさびしさは、捻曲がり、ふくれ上がつて、夫に対するうらみつらみになり、そんなものをぶら下げての趣味やレジャーなど面白くもありません。使えるだけのお金を使うとすぐにあきてしまうのです。

そのへんが私という人間の限界で、これ以上の無理はききそうになく、後十年の母親役は下りようと思いたちました。後、できるのは家庭内離婚です。

母親役などやらず、あなたはあなた、私は私、てんでにやりましょう、というやつです。

か、いろいろ考えてみるのですが、どれをとっても心のさびしさは満たされそうにありません。

夫は、私に母親役など望んでいなくて、可愛い女でいて欲しいと思っているようなところもありましたから、家庭内別居という形をとりたかったようです。

しかし、こういうごまかしも苦手です。私は別居することになりました。子供たちは、夫の許に置き、私だけ部屋を借りました。

さてその結果、親、兄弟、周囲の全ての非難は集中して私にぶち当たってきました。

「わがまま、ぜいたく、世間知らず、甘ったれ、自分勝手、一人よがり、箱入りその他いろいろ。旦那さんや子供さんが可哀想」

何も言わないのは子供くらいです。

子供たちには、小さいころから、つねに他者の立場や考え方の違いを想像し、理解し、共存をすること、という特訓を施していますので、彼らは落ち着いたものです。

私が部屋を借りても、ついてくるなどとは言いません。親の状態にまきこまれず、つねと同じように、勉強し、将来の希望に燃えています。親は子を助けてくれると固く信じてますから、それさえ損なわなければ、ホームドラマのような家庭像がなくなってもやっていけるのでしょう。覚悟のうえですから、まわりからいかに非難のつぶてがとんでこようと、構わないのですが、一番私をさいなむのは私の心です。

子供は、この際、自立に向かって足踏みしている状態だと思うのに、可哀想でたまらなくなったり、オロオロしたり。家を出たというだけで、良き母親としての呪縛からはなかなか解き放たれません。自立をするといっても、こんな事情が

事情では、会社勤めなど、行きたくても雇ってくれないでしょう。自立するには自分の手で稼ぎ出す方法を考えねばなりません。

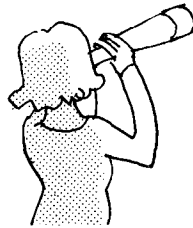
今まで、夫と子供とともに生きること、に没頭してきた私は、こうなってみて初めて自分自身への手当てなど何もしていないことに気付きました。

企業人としてまた家庭人としての夫をきびしく裁断しながら、私は自分の身体だけは全て夫や夫の会社に頼りきっていたという事実が、今どっと目の前にさらけ出され、私は実に恥ずかしく、心細い思いをしています。

私が人間らしいと思える生き方で、意志を貫こうとすれば、この年ですから、いくら頑張っても、いつかどこかで病気をしておたれ死にということにもなりかねません。では反省して意志を曲げ、夫の元に戻るとしても、夫に徹底的に抵抗した事実はそのままだりますと書くとは後悔しているようですが、後悔

はしていません。

どうなっていくのか見当もつきませんが、子育てをし、自立を図る努力を続け、外側からそんな自分をじっくり観察するつもりです。



もとより夫は、企業人としては、私の生き方と重なることはできませんが、企業を離れば、ごく普通の社会人です。子供のことや、その他の事柄を話し合いたいと思いますが、今は謀反を起こした妻を許していません。

私には男の友達ができました。彼は夫と違い企業人ではなく、働き蜂ではなく、

貧しくとも人間らしく生きることが主眼のような人です。山や野に遊び、自然にも自分と違う人間にも遠慮深い人です。同じような志向を持つ私は、彼と話ができるひと時をこのうえなく楽しい時間と感じます。しかし、一歩でも友達という感覚を踏みこえると、またまたささいい風当たりと、私の心の中の悲しみが吹き荒れるだろうと思われます。

妻であることは時期がくれば消える縁かもしれませんが、子供を悲しませる材料はできるだけ少な目にしたという思いが、今なお私をさいなみ続け止むことはありません。

どこまでつきぬけることができるか、というのがこれからの私の課題です。

生きがいといえる仕事も持たない普通の主婦が、自分のひとつしかない人生を大切に自分の意志にそって生きるということが、どんなことなのか、その意味の重さや厳しさを今私は少しずつ、かみしめているところです。（え・堀切潤子）



## 一九八八年からの

### 「わいふ」新企画のおしらせ

●拡大編集会議、合評会などで、読者のご意見をうかがい、そのお声をふまえて二一〇号から内容を変えることになりました。

もちろん投稿誌という原則は変わりません。しかしみなさまの中に、「投稿ばかり延々と読むのはしんどい。投稿に表れた一つのテーマについて、もっと掘り下げた意見をきけるような、座談会などをのせてほしい」というかなり強いお声のあることがわかりました。

ただでさえ投稿がはみ出す状況ですので、座談会にページを割くのは心苦しいのですが、「わいふ」の会員のうち投稿者は約一割、他の九割の「読み手」のご希望も無視できません。そこで次のような企画をたてました。

#### 読者参加の座談会

投稿を中心にして身近なテーマをえらび、みなさまそれぞれの意見を発表できる場になりたいと思います。ただし同じ意見の方ばかり

が集まっても面白くないので、参加ご希望の方は、ハガキに大体のご意見をお書き入れになり、「座談会出席希望」としてお申し込み下さい。四人まで出席していただきます。（多数の場合は抽せん）

二一〇号のテーマは「夫の家族」です。

老人問題が深刻化していることは、「わいふ」の誌上にもありありと表れています。なかでも嫁の立場から、二〇九号にもずいぶん強烈な意見が寄せられています。反対に、不思議なことに姑の立場を代弁するものはほとんどありません。

自分の体験からこの問題についてぜひ発言したい、という方、体験ないけど私の意見はこうだ、という方、どうか応募して下さい。（誌上匿名は可能です）応募締切は十二月十五日。（当日消印可）座談会日取のちほどお知らせします。

#### 文章教室

ご要望が多いので、実際に誌上で添削を行います。ご投稿について、添削ご希望の方は、

その旨お書きを下さい。一二〇〇字以内の長さのもの。もちろん無料です。誌上匿名可。

担当は編集長田中喜美子、副編集長和田好子が交互に行います。（ご希望多数の場合は抽せん）。一号についてお二人だけです。

#### コラムを組みかえます

「オットどっこい」「うちの悪ガキ」などの分類を変更します。最近「対話のページ」と「わいわいガヤガヤ」など、特定の部分はかりふくれ上ってきてアンバランスが目立ってきましたので。

新しいコラムの組分はまだメドがついていませんので、ご投稿はこれまで通り、自由になさって下さい。（枚数規定は現在の投稿規定の通りです）新年度から衣がえをして配分いたします。

表紙、レイアウトなども一新して八八年の「WIFE」をお届けしますので、どうぞご期待下さい！

男だけにまかせられない

地震安心読本Q&A

大山 輝



お手元に年表があったら、当ててみていただきたい。江戸、という都市はできて以来、だいたい七〇年前後の間隔で、大地震に見舞われている。それ以前も同じだったのだから、漁村にすぎなかったころは問題にならず、記録に残らなかったものと思われる。

一九二三年の関東大震災から六十四年、今後十年以内には、巨大

都市東京におそいかかってくる公算大である。あなたは用意ができていますか？

ジャーナリスト（大宅壮一のマスコミ塾出身）の著者は、専門の学者でないだけに理論に偏ることなく、現実の市民生活に立脚したと細かな用意のしかた、逃げ方を洗い出してくれている。

そもそも大地震とは、どんなゆれ

方をし、家はどうなかわれ方をし、火事はどうな出方をするか、から始まり、持出袋の作り方、外出時ビル街にいたら？ 地下鉄に乗っていたら？ 海岸にいたら？ など状況別避難法を列記。罹災後の預金や保険金の受け取り方まで教えてくれる。各戸一冊常備本、白楽（発売・ベップ出版）

七九〇円（W）

性

FOR BEGINNERS

文 鈴木みち子

イラスト 田井 亮子



「性教育の出前」で有名なツッパリおばさんこと鈴木みち子さんと、WIFEのイラストでおなじみの田井亮子さんのコンビがつくりあげた「性」のビジュアルな解説書。資本論も般若心経も、全員イラスト入りの「見る思想書」に仕立てて話題となったフォア・ビギナーズ・シリーズの一冊として刊行さ

れた。

自分の意志でいい人生と人性を生きようよ、をテーマに、月経、中絶、出産、避妊、マスターベーションをテキパキと語っている。

アジア・アフリカの女性たちが、英米で製造された危険な避妊薬を大量に注射されているという報告は、性の南北問題に気づかせてく

れる。

男と女のはざまの「ふたなり」として生れた人、同性に恋をする人、知恵おくれの人、それぞれの性を祝福し応援する姿勢は、みち子おばさんの持ち味だろう。それを支える田井さんの絵には、見る人を元気にする不思議な力がある。

現代書館 九五〇円（S）

## 華の乱

永畑 道子



与謝野晶子といえば浪漫派の女流歌人として、また「青鞥」を世に出した平塚らいてうや、婦人運動家の山川菊栄、山田わか等の名を知らぬ人はいだらう。しかし現在さかんなフェミニズムについて、大正時代すでに彼女らにより、白熱の討論がなされていたことは余り知られていない。

明治から大正にかけての日本は近

代化の波にもまれ、まさに動乱の時代だった。足尾鉾毒事件や大逆事件、米騒動など深刻な社会不安の中で、彼女らがそれをどのような受けとめ行動したかを、それぞれ同時進行の形でつながりをもたせて描きながら、やがてあの有名な母性保護論争へと展開させてゆく。このあたりの構成はさすがと思わせるみごとな手法だ。中でも

晶子、らいてう、菊栄の三人の主張は、性格の違いも見え、すさまじいばかりの気迫が伝わってきて読みごたえ十分だ。七〇年も昔にすでにこれほどの鋭い眼で時代を見通していた女たちがいたとは、ただただ驚くばかりである。女性史を学ぶ上で貴重な一冊といえよう。

新評論 一二〇〇円 (T)

## 愛の請求書

渥美 雅子



弁護士生活のなかから、異色の事件をひろい上げて、巧まずして時代の流れを知らせてくれる一冊。近ごろ男と女はアベコベになってきた。「婚約不履行・貞操権の侵害」とふられた婚約者を訴える男。メソメソ、ジメジメ、ウジウジ…。かと思うと昔は日常生活さえ平穩に送れば、夫の人格など問題に

しない女が多かったのに、現代ではそうでない女がふえてきた。転動がないという条件で、一人娘を手放したのに、約束と違って大阪へ転動になった。離婚させてつれ戻す、といきまぐ親。昔とちがって当人より熱心に離婚をすすめる親がふえてきた。過保護もここに極まわり、というところ。

こうした事例のあいだに、内縁関係の妻に相続権があるか、他人の妻を「寝取った」ことがバレて夫に告訴されたとき、どの程度の慰謝料をとられるか、など、具体的判決がはさまれて、一気に読める本である。

廣済堂 九八〇円 (K)

# わいわいガヤガヤ

鍵つき日記帳

東京都新宿区 富永 柳枝



私は比較的日記を書くのは好きなほうで、小学校低学年のころからずっと書き続けている。でも、最初から順調に続いたわけではなく、小学五年のときの、ある出来事から続くようになった。

それまでの私は、親から「日記は書いておいたほうがいいぞ」と言われていたので、何度か書き始めようとしたのだが、どうも長く続かなかった。さあ、今日から日記を続けるぞと志した日は、はりきってたくさん書くのだが、だんだん枚数が少なくなっていくって挫折する、そんなことのくりかえしだった。

そんなある日、私は友達につきあいで、あるファンシーショップに買い物に行った。そこは可愛い学用品や、食器や、ぬいぐるみな

どを売っていて、ぶらっと見ているだけでも楽しくなるような雰囲気になっていた。そこで私は一冊の厚い日記帳を見つけた。それは小形で、可愛い絵が描いてあって（今思うと漫画のチッチとサリーというキャラクターだったと思う）鍵がついていた。そのときの私は、何故かそれがとても魅力的に思えて、何かなんでも欲しくなってしまう。それは当時小学生だった私が全額出すにはかなり破格な値段だったけれど、私はその日記帳を、親に相談せずにその場で買ってしまったのである。

その日記帳を使い出してから、私は日記をつけるという習慣を身につけていったように思う。それまでどんなノートを使って日記をつけても続かなかった私が、鍵つき日記帳にかえてからは、途中で挫折することはない。それは何故かという、理由は二つあった。一つは、私は子供のころからなかなかケチで、「こんなに高い日記帳を買ったのだから途中でやめてしまってお金ももったいない」という気持ちと、何より「鍵」のおか

げだと思っている。

言うまでもなく日記というのは自分一人のものであって、不必要に人に見せるものではないけれど、日記を書き終わった後にカチャ、と鍵をかけると、その瞬間それは本当に私人の秘密になったようで、なんとも言えない優越感と、嬉しさをその度に感じていたのだと思う。

私はその日記帳を全部使い終わるまで、ずっと大事に箱に入れておいたのだが、私は鍵をかけ終わったら、いつも鍵は日記帳と一緒にその箱の中に入れておいたので、鍵をかけても意味はなかったわけだが、私にとってそんなことはどうでもよかった。「鍵をかける」という行為だけで、当時の私は十分満足していたのだから。

日記をつける習慣は今でも続いている、今ではもう高い鍵つき日記帳を買わなくても、安いノートで間に合わせているけれど、ときどき当時の私を懐かしく思い出して、ああ、もう一度恩人である鍵つき日記帳を買ってみようかな、などと思ったりするのである。

## ミーハー主婦の告白

東京都国分寺市 たまき久美

小説「新潮」だったか「現代」だったか、「私のご最員」というコラムがあって、作家を主として各界有名人が、「ひいきのひきたおし」の心情を吐露するコーナーがある。それを読むたびに、私はニヤリとしていた。ミーハー主婦の私にも、いや私だからこそ、その気持ちはよくわかる。

へへへ、私のご最員は、田村正和殿。何たって、中学以来、私はこのヒトのファンなのである。高校から大学時代にかけて、かの一世を風靡した「眠狂四郎」に、寝ては夢、さめてはウツツの時をすごし、故柴田錬三郎氏のそのシリーズは、全て読破した。私の暗い教職時代の一条の光も、正和ちゃんだった。（嗚呼、何とあわれな独身時代）今から十年くらい前になる。そのころ大阪の新歌舞伎座二月公演に、「鳴門秘帖」がか

かって、私はウキウキソワソワ見に出かけた。

舞台がはねて、楽屋口が見える露路の入り口で、「やっぱり帰ろかなあ」などとつぶやきながら、待つこと十分余。

正和チャンが、いいえ田村正和さんが、まばゆい光みたいに現われた。

先客が二人いて、何やら話しているのに力を得て、ばっと駆けより、

「舞台みました。とても素敵でした」

すると、彼はなんと私のほうを見て（と言っても、二人が離れた後だから、見る相手は私しかいないのだけど）、

「そうですか」と、はにかんでニコリ。そのお姿を見て、思わず、私、口走りました。

「ワァー、モー、死んでもイイー」

それを聞くと、アノ正和ちゃんが、とんでもない言葉を聞いた、というように、一瞬驚いて、そしてその後、当惑してはにかんで下さったのでありました。

今でこそ「死んでもイイー」なんて言うのは世間ではしない言葉とされているようだが、とわかるのですが、そのときはただ、正和様

のその表情を思い出しては、うっとりとし、あるいはニンマリとして日々を過ごしました。そして目的もなく買いこんであった、紫の表紙の和とじのノート（厚さ二センチメートルはありました）にびっしりとファンレターをしたためたのであります。こんなふうには……

【見返りお綱ふうには】

••• たちまちに  
••• むらくもきゆる  
••• まさにその

••• かげきよらかなるその姿

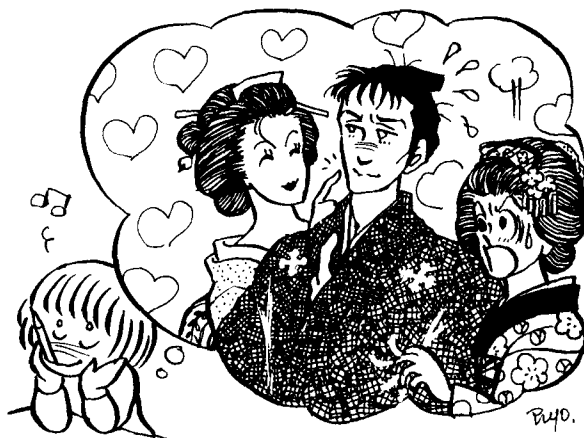
••• ずいぶんと いい男じゃござんせんか

とか、「私の田村正和論」とか称して「虚実皮膜の間、具現せる」云々かんぬん。

びっしりと埋まったそのノートに、バラの花束をかかえて、次の土曜日。

「ファンレターです。おもしろいから是非読んで下さい」と押しつけ、次の土曜日には、お菓子なんか持って、また楽屋口で待つ。

そして、「あのう、読んでいただけましたか？」「ええ、読みましたよ。とてもおもしろかった」「ワア、うれしい」（ホント、私バ



かみたい)

最後は千秋楽の一日前。この日はどこで聞きたつたか、楽屋口にはたくさんファンが待っていて、押すな押すなの人ごみ。

前や後ろを付き人、その他に囲まれ、正和チャン登場。

「テレビ、次は何にお出になるんですか」と

声をかけたけど、もう通りすぎているし、付き人氏が、「そんなことは」とかなんとか邪けんに返事する。

五、六人分向こうへ行ってから、正和様は、こちらにふり返り、ちゃんと私のほうを見て、「次は、赤穂浪士です」

もう、人混みの中で「ワァー、死んでもイイ」なんて言わなかったけど、そのうれしさつたらない。

かように、田村正和という人はファンを大切にするヒトなのだと感じ入ったり、何でもかんでも感激、感激の一月なのでした。

楽屋口で待ちうけること、四回。その間、握手がなんだノサインがなんだノの心意気でこっち向いてくれる正和様を、ひたすらポーッと、じいーと眺めさせていただきました。最近のテレビでは、イメージチェンジで、ちよっと不満ではありました。

ところが、先日來、二、三本たて続けて、「女と見れば口説くからいい男」と「マンガ家の四十男の純情」役を見て、これもなかなか……とまたイレコミ始めました。

そして、誕生パーティのシーンで、七五三  
みたいなキンキラキンの羽織、袴で、初めて  
着物を着た男みたいな様子で動くのを見て、  
「ウーン、これぞ役者！」と、ひいきのひき  
たおしをしたのでありました。

私が才能あらましかば……。

そう、栗本薫氏みたいに、あるいはジェー  
ムス三木氏みたいに、才能あらましかば、江  
戸時代の着流しの浪人と現代のかるーい男を  
クロスオーバーさせたモノ、あのヒトのため  
に書くんだけど……。

と、これがミィハー主婦の私の告白。

## みんなで作りたいね

長野県 島山 徹子



毎日毎日、三度の食事を作っていると無性  
に外食がしたい、たまには食事作りから解放  
されたいと思う。夫は出無精でどこにも連れ

ていってくれないし、義父は外食が嫌いだし、  
仕方ないからたまに一人で外食する。自分が  
作ったものもおいしいが(？)、人が作って  
くれたものはもっとおいしい。一度でいいか  
ら夫にあげ膳すえ膳で食事を作ってもらいた  
いものだ。

女一人で入りにくいなあと思いつながらレス  
トランに入る。ウェイトレスがやってきて  
「お一人様ですか」と聞く。一人じゃいけな  
いのおという気持ちになるが、折角だからと  
家では食べられない高いものを注文する。  
高いものを食べながら知っている人に会い  
たくないという思いで早く早く食べてしまう。  
おなかだけは一杯になるが何か後ろめたい。  
何が私をそういう気持ちにさせるのかよく分  
かっている。「女」だからである。

レストランにも入りにくいが私の大好きな  
お寿司屋さんにもっと入りにくい。「オヤ  
ッ珍しい」という顔されるんだもの。だから  
回転寿司かパックの寿司でがまんしてしまう。  
わいふの投稿者の中にお寿司屋さんがいらっ  
しゃいました。女一人の客どう思いますか。

食事は家族をまとめ健康づくりにもつな  
るので作るのがいやなわけではないがどうし  
て女の仕事なのだろう。時間が決まっている食  
事作りのためにどれだけ女は行動が制約され  
ているのだろうか。先日、町民運動会があり、  
その慰労会が夕食の支度時にあった。女の人  
は一人しか参加しなかったという。いろいろ  
な学習会、催し物があっても食事の準備が気  
になって参加できない人もいる。行けないこ  
とがたび重なりと行きたい気持ちも薄れてし  
まう。女が一人しかいない家庭では旅行も入  
院もままならないと聞いたことがある。私の  
友人は義母が用事でいなくて、男達の食事  
作りにかり出されたと憤慨していた。

いないときぐらい男達で作ってくれと言ひ  
たい。女も男も女が作るのが当然と思ってい  
る人が多いのがくやしい。地区の会合でも女  
はお茶入れに行く。「女の人はたいへんだな  
あ」とある男性が言ったがたいへんにさせて  
いるのは誰なのよと言いたかった。「みんな  
でやろうよ」と若い私にはまだ言えない。い  
つになったら言えるのだろうか。

## 漢字大会に参加したてん太

神奈川県横浜市 原 眞智子 (51歳)

話は少々さかのぼって六月のこと。それは新聞の催し物欄にあった。「第十六回漢字読み書き大会」期日七月十九日(日)、会場慶応大学三田校舎。参加費は五百円で、主催は(株)写研。

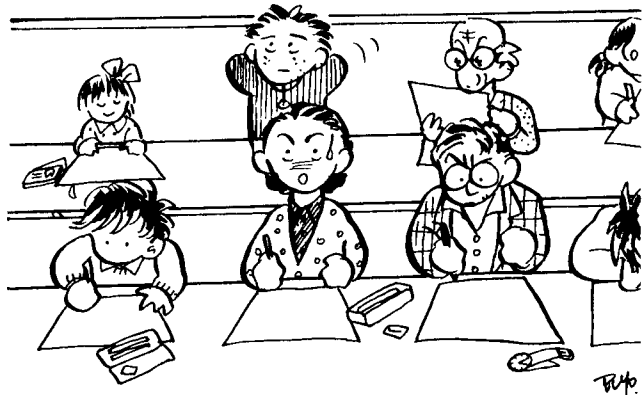
年に一度のこの催しは知っていたが、住所の関係で参加したことはなかった。今年に行ける。私は夫を誘った。二人とも新旧両字体に何とか通じた最後の世代、「彼女にはアヤシイ魅力があるね。リッシンベンでなくオンナヘンのほうだよ」と話し合う仲だ。早速、申し込みのはがきを出し、追って先方から届いたはがきの参加票を手に、小雨をついて朝から出掛けたのだ。(当日は十時、一時、三時の三回行なわれ、時間はこちらの希望で)受付を済ませて会場に入る。その階段教室は小学生からかなりの高齢(八十代まで)の

方まで、男女も見たとところ余り差はない大勢で一杯。報道陣かフラッシュもたかれ、たちまちそわそわと受験生気分。

最初に概要の説明がある。問題は半分が全員共通、残りが小中学生と高校以上との二通り、二百題で解答時間四十五分とのことに、とにかく先へ先へと進む外はないと覚悟する。(配られた問題用紙はB四横書き、表紙を含めて五枚、解答は所定の空欄に鉛筆で)

合図があつて一斉に取りかかる。新聞の見出しからという語の読み、乱高下、是正、懸念などが文脈を伴って出ている。安心しかけるのはまだ早い。寿都湾、陸奥湾……と湾ばかりの読み。こくしゅうさゆり(タレント)、浅香ゆい(タレント)……の傍線部分を漢字でとあり、クイズふうの問題もあつて後半に入る。

山岡荘八の伊達政宗から読み(秣、弑逆、梟首など)、書き(へいげい、くつわなど)これも文脈の中で並ぶ。他に○湾(フィヨルド)、○堤(ダム)等の空欄を漢字で埋めよという。最後は地図上の位置と高さを添えた



空欄を山の名で埋める問題。あちこち穴だらけのまま終了の合図を聞いた。

帰り道、夫と二人電車の中で「ヨロイっていう字、今思い出した!」「小泉きょうこってトゥデイって書くんだっけ」と口惜しがる。「来年はどうする?」とたずねると「行こう、



行こう。これだけ楽しんで五百円は安い」と。

後日（八月下旬）正解と結果が郵送されてきた。参加者数三、三七六（うち少年五三八）。平均点は二百点満点で少年八六・八、青年（四十歳未満）六九・〇、熟年七四・九。

成績？ 私の？ 仕方なしに小さい声で言う。「一〇四点、熟年の部一、七三九人中二〇四位デシタ」

主催「写研」は豊島区南大塚二ノ二六ノ一三 電話九四二一二二二一

大阪でも同時に行われる由です。

## 目には目を、投書にや投書を

神奈川県鎌倉市 沢 讃良

姑は、某地方紙ではその名を知られた投稿魔。新婚当時逆らうことも知らず可愛かった——？ 今から思えば、「世間並みの嫁姑の葛藤なんぞにこの私が巻き込まれるはずがないじゃないか」と思いたい、思われない、つまりめ虚栄心が災いした。



私の悪口を、自分の友達の家の話として書きまくった。最初からうまくいく訳もなし、そのうちに何とかなるものさ、と高をくくって暮らしていた甘ちゃんの私も、これで一遍に目が覚めた。

雌伏三年、良い子ブリッ子の私ではもうない。悔しさはすべて創作の道へ……。

「さりげなくするのが自慢のいやらしさ」  
「親戚の前では嫁をチャンと呼び」の外面の良さ、見栄っ張り度から、「嫁の国負けたときだけ話題にし」の甲子園まで、「冷めて見りゃ姑は川柳のネタだらけ」だったのだ。本音を託すこの心地良さがたまらない。

一時はうつ病かしらんと思うほどだった。重い石臼が頭の中を支配しているように、姑のことがグルグルと二十四時間回り続け、どうしてもそこから抜け出せない私だった。が、背伸びしようと頑張る自分を、ボンと本来の自分の位置へ置けたときにふっ切れた。

川柳は心の奥底を照らし出してくれる。また、そこから川柳が生まれてくる。「ニアミスを避ける二世帯嫁姑」の我が家の構造をあくまでも活用しつつ、「嫁姑一つにされるさえごめん」の、この意気で何とかやっている。先日姪っ子が遊びに来て、泣き叫びながら弟を訴えたときは、「祖母に似てフリーズ長くブレスなく大音声に人語るなり」と、感動の余り、つい狂歌になった。

## 夫の不妊手術

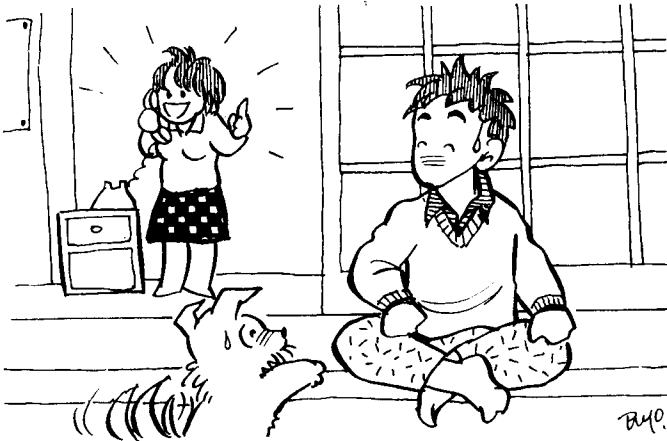
東京都練馬区 中野由美子（39歳）

夫は十三年前、三十四歳のとき、三人目が生まれた直後に、パイプ・カット——精管結紮法男性不妊手術——をした。

夫は結婚前から、医者友人を通して、手術の安全性、副作用のないこと、医者の間では手術をしている人の意外に多いことなどを知っていたので、子供が数人生まれた後には自分がすると決めていたのである。それに私達は夫婦そろって、ズボラで、避妊が苦手であり、めんどくさかったのだ。

手術そのものについて関心のある方は、百科事典を参考にして下さい。「不妊手術」という項目で、かなりのスペースを割いて載っているでしょう。そのほうが正確にいろんなことがわかれると思うから。なにしろ、私は手術室の外の廊下のベンチで待っていたにすぎないのだから。

結論からいうと、女性の不妊手術に比べておそろしく簡単な手術であった。夫が手術室



に入ってから出てくるまで、わずか三十分とかからなかったと思う。私は、一冊の週刊誌をまだ読み終わっていなかった。

夫は自分の足で歩いて手術室に入り、いくらか歩きにくそうではあったが、自分一人です歩いて出てきた。私達は、往復タクシーを利用したが、車の運転のできる方は、自分で運転して帰れるそうである。

手術をしたのが土曜日で、翌日一日休んだだけで、月曜からは普通に出勤、次の土曜日に抜糸して、全て完了であった。

私は最近行なわれるようになった、女性の膣式の不妊手術についてはよく知らないが、私自身、長女を産んだ後で、卵巣のう腫の手術をしたことがあるので、女性の不妊手術の大変さはよくわかる。盲腸の手術と並んで簡単な手術といわれている卵巣のう腫の手術でさえ、お腹を切るというのは、やはり大変なことであった。

費用については、これがまたとても安かった。保険が適用されたのかどうか、よく覚えていないが、とにかく一万円でおつりが少してきたように思う。お産の費用が、地方の病院で、個室に一週間入院して十万円ぐらいだったころの話である。

同じところに家で飼っていた雑種のメス犬の不妊手術をしたのだが、こちらのほうは、三万円ほどかかってしまって、高いのに驚いてしまった。私は夫の手術代の安いのに感激して、周りの友人に「うちの主人の手術代、犬よりも安かったのよ」とずいぶん吹聴したのだが、その後、友人の夫で手術をしたという話は、だれも聞かない。

夫のほうも、おそらくこの手の話題は、たちどころに社内中に知れ渡ったと思うのだが、夫のところへ個人的に質問にきて手術を受けたのは、二百人近い男性社員のうちで、ただ一人だけだそうである。上司の中に一人いるとかいないとか、その人を入れたとしても二

パーセントにも満たない数字である。

これにくらべると女のほうは、私の周りを見まわしても、結構一人二人と数えることができる。こちらのほうは少ない目に数えても、一割弱ぐらいいるのではないだろうか。

私の知りあいで卵管結紮をしたある女の人には、「男にさせちゃ駄目よ。男は浮気をするから」といった。本当にそうなのだろうか。

男にとって、受精させる能力のある、なすが、浮気に影響をおよぼすのだろうか。夫の浮気はあるとすれば、もっと他の原因によるのではなからうか。

夫婦のどちらが不妊手術を受けるべきか、こんなことは全く個人的な問題で、他人が口

を差しはさむべきことではないが、圧倒的に

手術が大変な妻の側が受けている場合が多いのは、どうしてなのだろうか。どんなにも簡単な男性の不妊手術が、一般に知れ渡っていないのはどうしてなのだろうか。

市販の百科事典の中にも堂々と出ている事柄に關して、一般の人はどうしてこうも無知なのだろうか。

理由は簡単だろう。男はただ「怖い」のだ。女はもうも、手術後のこと——副作用、浮気——などを考えるとやはり「怖い」のだ。

統計的に見ても、手術後、「よかった。他人にも勧めたい」という人が九〇パーセントを越えているのだ。

# キープ・イン・フォーエバー

定価一八〇〇円

自然食通信編集部十宮代一義監画

自分で作って初めて知る本当のおいしさ。プロに預けてしまっていた暮らしの技と風土に培われた味を取り戻したいと、各地の先輩に手ほどき願ひ、再現した26品を集めました。

豆腐 味噌 麴 かまぼこ 酒まんじゅうはか

## 自然食通信

35号 11月10日発売 定価550円(¥100)

【特集】**グルメ消費者には  
なりたくない**

身近な店に並び始めた「無農薬」「有機」ブランド野菜の素性は確かか。土の残留毒性消え、収量一倍、いいことずくめのキャッチフレーズは信頼できるのか。共同購入グループ三百人のアンケート集計／生産者と畑の事情／「万能」謳つ「土壌改良剤」の怪／他、34号に引き続き「無農薬」なら安心ですかⅡ

書店でのご注文は発売元・新泉社で

東京都文京区本郷2-6-10  
☎03(816)3857 振替・東京5-78026

自然食通信社

## ダンス教室

愛知県西尾市 鶴見みつゑ（64歳）

春四月、民謡の友達三人男性一人女性二人でダンス教室に入った。一昔前ならダンスといえば、ましてや社交ダンスなんて貴婦人のすること、私どもおばさんのすることとは思ってもみなかった。

思いきって十回と十五回の市の講座に週二回行くことにした。

本当にたのしくてたのしくてたまらなかった。初めは足型がむつかしくて家にかえつてくるとつかれて足が棒のようになって、ときどきコムラガエリがおきた。でもせっかくやりだしたことから続けた。

初めのうちは本当に初心者向けだけだと思って通い始めたが、だんだん欲が出て、どうかして少しなっとくのゆくところまでおぼえたいと思い、まあなんとか旅行に行ったときなどみんなの前でも踊れるようになった。

暑い夏は汗をポトポト落としながら、また寒くなつてからも、額に汗して若い人同年配の人、友達もずい分できてたのしい一年だった。主人も協力してくれて、一週間に一度私の家であそこが分らない、ここができないと、わあわあガヤガヤと昼食する時間もおしんで、踊れるようになり、今もたのしくつづけてやっています。年老いたおばさんの青春です。

今は、チャチャチャ、キューバンルンバ、の一级にいどんでいます。ワルツ、サンバ、タンゴなど一通りはできるようになりました。

パーティーもありよろこんで出かけていきます。きれいなライトに照らされて、娘時代にかえつたような気分、スソのひろがるフレイヤースカートをはいて踊るのです。今の今まで考えてもみなかったことです。自分でもときどき昔をふりかえって、よくもまあ覚えただものだと苦笑しています。

週に一回の土曜日が待ち通しくて、その日は朝からそわそわとして早目に夕食をすませ、六時三十分、友達と心もうきうきと教室に行



きます。七時より三時間汗して習って、帰宅十時三十分ごろよりふろに入り、汗を流してまたこの次の土曜日と思い、こちよい眠りにつくのです。

## ああ、転居

——大阪から札幌へ

北海道札幌市 加藤 君子

大阪の豊中から札幌へ夫の転勤で、高二と中三の娘とともに引っ越してきた。受験期の子供を持つ家庭にとって、単身赴任はあたりまえになっているようだが、あえて我が家は家族一緒にやってきた。

私には、札幌は言葉の通じる外国へ行くほど遠く、またものすごく寒い地という思いが強く、夫一人で行かせるには忍びなかった。

それと、夫婦が月に一回会えるか会えないかわからない生活には耐えられないのは、お互いよくわかっていた。子供達は友達との別れは辛い、親に従わねば生活していけないことをよく承知していた。

さて、札幌へ来て一か月もすれば生活は落ち着き、夫は会社の子供は学校にと、それぞれ自分の場がある。だが、私だけが家の中しか居場所がない。誰も私のために家庭以外の場を作ってくれない。

自分で動き出さなければ、この現状は何も

変わらない。

大阪での六年の間に築き上げた私の活動の場は広く深く、多くの男女の友人、本音で語り合える仲間もできた。

それらを断ち切って札幌へ行くのは少々寂しく、心残りやら、無責任だという思いもあった。だけど今、私が生きたいとしている太極拳と算数教室はどここの地へ行ってもできると思い、一時、人生を中断してもまたつなげると簡単に考えてしまった。

だが現実、ついつい気楽な毎日の生活から抜け出すエネルギーもなく、何となく、美しい札幌の市内観光をして暮らす日々になってしまった。



「また、二、三年後に転勤になるかもしれないし」

と、自分に納得させて楽なほうを歩き出してしまった。

そんなところ、数教研の札幌事務所よりお誘いをうけ、「後のことは面倒みるから、やってみない」ということを頼りに、十一月より教室を開設する決心をした。

同志と教育問題を語るうち、私の内なる魂がメラメラ燃えだし、他にもやりたいことがいっぱいできてきた。今のうちにペーパードライバーを返上しよう。民謡を大声で歌いたかったので、これも習おう。もちろん太極拳も続けよう。地域活動もまたしなければ。

人間は一人では生きられないことをつくづく実感した。社会に出て、自分の意見を述べ、人の話を聞き、一緒に活動し、お互いを高めあってはじめて、人間らしく生き生きとした生き方ができるのだと。

経済的には一〇〇パーセント夫により掛かってしか生きられないけれど、私だって社会的に生きる場がなければ、死んだも同然だ。

## 女性民教審最終提言を 読み終えて

東京都墨田区 若木 菊枝(36歳)

ずっと以前、わいふ誌面で「民教審活動」への呼びかけ文を読んだことを今でもはっきり覚えています。しかしそのとき私が感じたことは、メンバーの方々は皆教養豊かであり、私のように商業高卒で出産を機に退職し、教育活動に関わったことのない女達はお呼びじゃないと、最初から私のほうで決めていました。したがって六月十三日のヤマハホールの最終提言のことも見逃していました。

「臨教審」という文字もニュースや新聞で見たことはあります。しかし同様に関係なくて難しそうと思っていた極めてまれな(?)母親なのです。

今、民教審提言を読み終えて思うことは、私のように現在は無知ではあるけれど、このままでよいとは思っていない母親(父親でも



結構)を、一人でも多く仲間として受け入れていただける場が欲しいということで文中に「がんばってね」ではなく「がんばろうね」を合い言葉にと書かれていて、まさにその通りと思っています。

「わいふ」読者で、まだ民教審提言を読まれていない子育て中の方、ぜひご一読をお勧めします。優秀とは縁遠い母親に育てられた子供達にも、大いに希望が湧いてきます。

私も微力ながら、この地域で防災まちづくりという活動に参加しています。その中でや

はり今年の六月「まちづくり計画」なるものを区長に提出しました。しかし理想と現実のギャップに思い悩むこともしばしばです。でも今は違います。理想に向かって突き進む姿勢が大切なのだと痛感しています。何か体中が熱くなり、やたら元気になりそうです。

## 買おうか、買うまいか、 老人ホームの本

福島県 匿名(40歳)

送られてくる「わいふ」の袋をあけて、裏表紙(?)に印刷されてる「ガイドブック安くはいれる有料老人ホーム」の活字を見るたび、いつも北島サブ(三郎)ちゃんの「帰ろかな、帰るのよそうかな」の替え歌で私は「買おうかな、買って読むのよそうかな」のメロディーが思い浮かぶ。

我が家娘二人。二人目を産んで分娩台の上で先生に「おめでと、女の子さんですよ」

と言われたとき、一瞬間の中を、老後はジジババだけだ。末は養老院かな？との思いがよぎった（別に、男の子だったら養ってもらおうとか、世話になろうかと思ってたわけではなく、女の子だったら、もし転勤族と結婚したら私のように、実家に行けるのは年に一回ぐらいしかないであらうから）。

あと十年もすれば夫は停年だ。古びた兎小屋のような家に住んでいるが、足腰が達者なうちは、なんとかジジババでもやっていけるだろう。夫も私も、自慢じゃないが生まれは貧乏。粗食で結構ときている。下の子の学校給食の献立表を見るたび、子供のころの私達



が、見ることも食べたこともないようなものがずらりと書かれている。その上帰ってからの夕食は、我が家でも一番まとまな食事を食べるのである。私は心の中で「子供にこんなぜいたくなものを毎日食べさせていいのか！」と一人で叫んでいる（ほんに食べ物のうらみはなんとやらである）。

夫婦とも、着るものも、汚れてさえないければいいという考えで、みぐるしくない程度であれば、十年前のも平気で着ている（ケチではあるが、交際費はケチっていません。念のため）。

今一番の不安は、病気。それも年とってからの「寝たきり」と「ボケ」なのである。寝たきりになった人は、特別養老ホームになるのだろうか？とにかく老人ホームの研究をしなければ！（こんなの研究といえるのでしょうか？）

そのわいふの本（老人ホームの）を、見たような、見たくないような。見たら、老後の自分の姿がはっきりしてくるようで、こわいような気がするのです。

## 月収のパーセントの寄付金

東京都調布市 本山美智子

数か月前のこと。「アフリカへミルクを送りたいので、寄付をお願いします。私は、これから井戸を掘りに行きます」と若い男性が来た。仕事で穴を掘ることも多い夫の、たくましいからだつきと比べ、彼はやせている。えらいなあ、と思いつつ、テレビで見ると、アフリカの母子の姿を頭に描く。赤ん坊はやせて小さく、母の乳の出ない乳房にぶらさがっている。私も三歳とお誕生前の二児の母。他人事とは思えない。



「いいですよ」と言うと、彼は手に持ったハンカチを示し、これを買ってくださいと言う。家にあるハンカチの山を考えるとハンカチはもういらぬのだが、これは寄付なんだから、かまうまい。「わかりました。おいくらですか」

「三枚一口で、一枚千円です」

私はぎょっとした。その日はお給料前日。家の中には二千円しかない。「一枚ではいけないんですか」「ミルクは送る費用を入れると、一缶でそれくらいかかるので、三枚一口です」ええ、私は母乳なので、ミルクなど買ったことがない、そんなに高いなんて知らなかった。「今、お金ないんです」と言っても、けっこうしつこくねばられた。

でも三千円の寄付って、我が家では、ちょっときつい気がする。どうして、一枚ではないのだろう。寄付って気持ちの問題だし、強制ではないのに。考えれば考えるほど、一口三千円の寄付は高いと思え、腹立たしくなってきた。

先日、また井戸を掘りに行く青年がきた。

私は、「お断わりします」とばたとドアを閉めた。なんと後味の悪いことか。豊かな物に囲まれながら、本当に、三千円が高いと言えるのか、支出できない額なのだろうか。

## 叔父とのきずな

埼玉県草加市 佐藤 玲子



「もしもし、玲子か？ 今、本社にいるんだ」「あら、おじさん、元氣？」  
「ああ、新聞ありがとうな、だんなさん入院したって書いてあったが、どうだ？」  
「もういいの、あのときは本当に大変だったの、一か月会社休んじゃってね……」  
亡き父のたった一人の弟である叔父からの

電話だ。叔父の言う新聞とは、私が書いて送った家族新聞のことである。夫はもう仕事にはりきっていると話すと、安心したようだ。  
「それにしてもお前はなかなか、優雅な生活をしとるようだな。釣りに行ったり、映画を見に行ったり、恵まれとるよ」

「ウフフ、やっとこのごろ、自分の時間が持てるようになったのよ。これでもいろいろやりくりしてるんだから……」

「ウーン、新聞の文章もなかなかのもんだよ。どうもお前は父親の良いところばかり、もらってきたようだ。弁舌もさわやかだしナ」

「まあ、ありがと。そんなふうにはめてくれるの、叔父さんだけだわ」

いささか見当違いの叔父の言葉もあえて否定はしない。亡き父親に似ていると言われると、私は単純に嬉しくなってしまうからだ。

こんなふうに電話で気軽に話せるようになったのは、七年くらい前からのことだ。叔父と私はそれまではほとんど行き来がなく、ろくに話しあったこともなかった。

長男である父と叔父とは、親子ほど年が離



れていた。そして私が物心ついたときは、もう遠くに所帯を構えていた。たまに田舎に帰ることはあっても、嫁さんの実家のほうが居ごちが良かったらしく、我が家に泊まることはなかった。叔父が自分の生まれ育った家にしばらく泊まり込んだのは、皮肉にも父の葬式のときだった。私は高校三年生、叔父はおそらく、四十歳を少し出ていただろう。父は公務員を退職した年の夏、突然倒れ、帰らぬ人となった。葬式の準備のために皆がアタフタと走り回っているときだった。急に何かの発作に襲われたように、叔父は座敷の神棚の上のお守り札をすべて持ち出し、土間に投げ捨てた。

「こんなものを拜んでいるから不幸が続くんだ！ 正しい宗教を信じなきゃダメなんだよ！ ちゃんと信心していれば兄貴だってこんなことにはならなかったんだ！」

当時、新興宗教にのめり込んでいた叔父は、端正な顔をゆがめて怒り狂い、肩をふるわせた。それは初めて見る、物静かな叔父の激しい一面だった。

その次に叔父と会ったのは、いとこの結婚式であった。伯母の娘であるいとは私と仲がよく、叔父と私の縁の薄いのを知っていて、会わせてくれたのかも知れない。後で彼女は叔父の住所と電話番号を教えてくれた。

近況をしたためたハガキを出すと、折り返し電話があった。

「もしもし、玲子か、叔父さんが元氣か？」

生前の父そっくりの声と話し方だった。一瞬、父が甦って電話をかけてきたのかと錯覚したほどだった。そのとき、何を話したのか全く覚えていない。身体が震え出し、喉の奥から熱い塊が込み上げてきた。父の声がオーバーラップして受話器をおいたとたん、私は泣きくずれてしまった。これほどまでに、叔父との確かなきずなを心のどこかで求めていることに気づき、自分自身驚いたのだった。

思うところあって、数年前から家族新聞を書き始めた。今まで縁の薄かった叔父、叔母いとこ、遠くの友人たちに送っている。

叔父は月に一度、社用で上京するたび、会社から電話をかけてくれる。私も最初るとき

のように取り乱したりせず、落ちついてうけ答えできるようになった。

回を重ねるごとに、叔父との心のつながりを感じて、はのほとしたものが胸の中にひろがってくる。

叔父は今年、六十四歳になるはずだ。

## アンケートに協力して下さい！！

東京都杉並区 村田 玲子

私が「WIFE」を初めて見たのは、近所の書店でした。月刊誌コーナーの雑誌一冊一冊が、「私を買って！」と自己主張している



ような表紙の中で、白地にピンク——ひっそりと咲いた一輪の花——というよりも、「読みたい人は、マア、読んでみて下さい」と言わんばかりの、極めつけ地味な表紙。

小さな薄い一冊を「ナンジャ、コレ」と手にとって眺め、パラパラ見ても、ダサイ。(失礼ノ) 中身がすてぶるつきのマジメ、というか、「まあ、よくこんなことをたくさん集めた」と感心するような内容。

「フーン」とも「ヘエ」ともつかず、その雑誌を手に取り、あまりの物珍しさに、W I F E “を買った。(まだ私は「W I F E」ではないけれど、そんなことはあんまり気にしない性質なので)。

これが、W I F E “と私の出会い。そして、何度読んでもダサイと思いつつ、どーゆーわけか、(今考えても全くわけがわからない) 年間購読を申し込んだ。

読めば読むほど、知りたくなった。いろんなこと——たとえば、どんな人が読者なんだろうって。

そして、主張や老後や趣味が投稿という形

でたつぷりと載せられているにせよ、もうちょっと、まとまった形で知りたい。そんな気持ちでどんどんふくらむ。

まだユーガ(?) な独身女性である私は、W I F E となった人の心の推移を知りたい、という欲求があるのかもしれない。

また、二〇〇号記念特集の「W I F E と私」は四人の手記だったけど、読者一人一人が、(これはどドラマチックじゃないにしても) この薄っぺらい小さな雑誌を読むことで、そしてエイヤツと投稿することで(私の第一次

アンケートはボツになった)、ドコカ、ナニカシラ変わったことがあるんじゃないかしら、と思ったりするのです。

(ワッ、最初にケナして後でホメるなんて、最高のテクニクを用いてしまったノ)

——と言うわけで、アンケートを用意しました。ぜひ、ぜひ、ご回答賜りたく。ご希望の方は住所氏名をおしらせ下さい。アンケート用紙をお送りいたします。

杉並区永福二一九一八一〇四

☎〇三—三二四—二四〇二—

(え・田井亮子)

## お友達に△わいふ△を おすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

- 定期購読者をお一人ご紹介下さることに、誌代プラス送料とも一回延長。(六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

## △わいふ△年間分をプレゼント にお使い下さい

- ご結婚のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。

お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

- その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

## 次号テーマ原稿募集

### ▼特集テーマ原稿

●二一〇号の特集テーマは、「私のやった市民運動」です。

一九七九年に「わいふ」の柏サークルが行なった調査では、家事・育児以外に夫が妻にさせたがっている活動として、市民運動はじりから三番目、昼寝やおしゃべりの下位にありました。妻の側では市民運動は下から五番目、さすがに昼寝やおしゃべりよりは上位ですが、園芸やボランティアよりは下位、「市民運動」はあまり人気のない活動であることがうかがわれます。

でも現在は一九八七年、あれから八年も経ったいま、市民運動は再び活発化しているように思います。

教育委員の準公選運動、ごみのリサイクル運動、中学生の丸刈り反対運動など、環境保護の市民運動や教育運動、さまざまの市

民運動に関っている方は意外に多いのではないのでしょうか。もちろんフェミニズムの一環としてのミニコミの発行などもその一つです。どんな活動に、どんな苦勞をなさりつつ組んでいらっしゃるか、きれいごとでないありのままのところを書いて下さい。枚数四百字づめで十五枚—二十枚。

### ▼ワンポイント情報

今回は「ものを無くさない法」です。

「わいふ」の編集部でも、もの探しは始終。あれはどこへいった、これがない、という時間のロスがなくなれば、どれだけ仕事の能率が上がるかかと思いますが、なかなか改善されません。ふしぎなことに、探すときに限って出てこず、いらないうちにヒョコッと目の前にあったりするのです。同じ悩みを持つ方は多いことと思います。整理のよい方、ぜひ、「ものを無くさない法」をお教え下さい。枚数四百字—八百字。締切はともに十二月二十五日です。

### △氏名・住所を秘密にしたい方▽

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。

「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

### △仕事をしたい方▽

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事かしたいですか）というアンケートを、お送りしたことがあります。その後の新会員、以前と状況が変わって、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

# わいふ・投稿規定

書くもヨシ  
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いてノドシドシ送ってノグイグイ載せます！

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。（無記名のものは受け付けません）

●次のコラムへご投稿をどうぞ！

●うちのワルガキ 子どもとその周辺の話題について、どんなことでも。

●オットどっこい 夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。

●ナウい熱年 今どきの若い者へ、一言いいたい方のためのシルバースhirt。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。

●ファミリー・イン・ブルー 家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそでは

言えないホンネのはけ口に。

●マン・ウォッチング 家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。

●職場は多面体 あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。

●親のホンネ 親、ことに母親はどつらいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことがありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。

●男性専科 敵に塩を送る心意気、男のいいたい放題のページです。

●マスコミむしる 新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろあるんじゃないですか。遠慮ない告発を！

強いマスコミに弱いミニコミからならり込みかけよう。

●マジの発言 まじめは「わいふ」の本領なんですわね！。

あなたの主張や切実な体験をお寄せください。

●対話のページ 本誌の投稿や記事についての感想、反論など。

●女の道案 あなたがやってるホビーについて。

●観たり聴いたり 映画、演劇、音楽会

展覧会などの感想を。

● 狂育ニッポンどこへ行く 日本中狂ったみたいに教育がさかん、でもそのわりに、変チクリンな若者や子どもが増えていいると思いませんか？ 新人類の若者や子どもたち、あるいは狂師たちの生態報告をどうぞ。

● 生きてます活字人間 読んだものについて。

● 遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

● わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

● エッセイストクラブ ずいひつのよさをたっぷり味わわせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

● ワンポイント情報 一つのものまたは事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。

● 以上いずれも八百字まで。オーバーしても内容がよければ掲載いたします。

締め切り偶数月二十五日。

×

● 持ちこみ原稿 詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。掲載分には薄謝を贈呈します。枚数自由。締め切り日はなし。他の出版社などに推せんもします。自費出版も引受けます。

● 短い投稿はハガキでもけっこうです。気楽に投稿して下さい。

● 絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。

● ご自分の投稿に、イラストや写真が用意できる方は、ぜひそれも合わせてお送り下さい。

×

● 投稿は原則として一応編集部で選択します。できるだけ多くの方の投稿を公平に掲載することをめざしています。

● 編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きそえ下さい。

● 年齢をお書きそえになりたい方は、名前の後ろにアラビア数字で。

● 匿名またはペンネームは投稿原稿の文頭にお書き下さい。

本名と住所も並べて文頭に。

● 投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

● ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお書き下さい。原稿用紙の使い方はルールを守って下さい。

● ヨコ書き原稿は書き直すことになるので必ずタテにお書き下さい。

● 原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

● 誌上匿名は自由ですが、投稿の信頼性の問題もあり、なるべく本名が望ましいと思います。居住地名もとくに理由がない限り、記載したいのでよろしく願います。

● 二重投稿は堅くお断りいたします。

# 編集だより

●今年最後の「わいふ」をお届けします。今回はとくにご投稿が多く、選ぶほうも迷いに迷ったという感じです。嬉しい悲鳴かもしれませんが、没になった方のお気持ちを思うと毎回胸のいたむ思いを禁じえません。

●「ワンポイント情報」「対話のページ」でのダブリは除き、投稿は一号について一つという原則がまだのみこめていない方が何人もいらっしやいます。「たくさん送ったっていいじゃない！」というお声もあるのです。

でも考えてみて下さい。いくつかの投稿を寄せて「一番出来のいいのを取ってほしい」ということは、試験の答案を二種類提出して「いいほうを取って下さい」というのと同じです。あるいは何かの懸賞に二つの小説、二つの論文などを送りつけて「いいほうを取ってほしい」ということと同じなのです。

公平の原則からみても、他の方が一回に一つの投稿を、というルールを守っていらっし

やるのに、自分だけ複数の原稿を、というのはよくないと思います。どうか投稿は「一号に一通」というルールを守って下さい。

●来年度に向かって、大幅なイメージ・チェンジを企画しています。二三ページにお知らせが出ていますので、お見落しなく。みなさまといっしょに、ますます面白い「わいふ」を作っていきたいものです。

●次号から読者参加の座談会を毎回催しますので、合評会は年二回程度にへらすことにいたします。ご了承下さい。

●新しく「わいふ」へ入って下さった方から「わいふ」とのめぐりあいのいきさつについてよくご投稿をいただきます。なかなか面白い文もあるのですが、やはり基本的には似通ったものが多いので、今後そうした内容のもの掲載を見送らせていただくことにします。(今回も三通ありました) どうぞよろしく。

●まだまだ暖かいですが、風邪がすでに大分マシエンしているようです。お元気で。

## □購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。  
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとめますと送料が半額以下になります。

## WIFE

(隔月刊) 209号

1988年1月1日発行

印刷・浩文社印刷

定価 450円

(年間購読料送料共3600円)

発行所・瞬グループわいふ

編集・わいふ編集部 ☎162

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

TEL (03) 260-4771・4773

郵便振替 東京5-110430

銀行口座三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

## □購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申出がないと、お送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。



あなたの自己実現のために……

# 心理トレーニング

生徒募集

もともと人間には、どんなに不安や葛藤、抑圧に苦しめられても、自力で自分本来の姿を取り戻そうとする力があります。この力こそが人間として、成熟し、自立する力なのです。

誰もが持つその力の働きを伸ばし、助け、大きく育てあげ、人生に明るい希望の灯を灯すことが出来るのが気づきのワークショップの体験セミナーです。そこでの体験は自分自身への「気づき」を深め、その気づきが情緒の安定をはかり、自信を強め、バイタリティを高め、健康の増進を促します。



東京ヒューマニクス研究所

☎03-492-2838

〒141 東京都品川区西五反田2-31-11  
五反田永谷タウンプラザ904号

汐文社

東京都文京区本郷1-26-10  
TEL. 03-815-8421

●元気な女が家族を変える  
ポストファミリー  
【その他の関係】

桜井陽子著

転勤の夫は一人娘のコブつき、自分は残って一人ぐらし。働く女と働く男の、さまじまの暮しかたの中から、新しい家族のありかたが浮かび上がる。

1200円



「共かせぎ」の不必要な高級とりの銀行員の妻が働き出したとき、何が起こったか？  
夫の転勤、子供の病気、夫婦ゲンカのすべてをのりこえて、見えてきたものは？

鈴木恵子著

1300円

ずつこけ  
パートタイマー記

9月号



# 安くはいれる 有料老人ホーム

ガイドブック

入居金〇〜一千万円  
生活費は年金程度

## わいふ編集部編

A5判美装カバー250ページ・定価1400円送料300円

有料老人ホーム数々あれど、  
新聞広告によく出るようなホームは、  
素敵だけれど高いのが玉にキズ。  
そう思っため息ついているあなたに打ってつけ。  
毎日のくらしのやりくりを悩ます主婦が、  
買物上手のセンスを生かしてまとめたガイドブック。  
ン千万円のホームはお呼びじゃない。  
こちら一般大衆、ただのわいふ。  
フツー感覚の主婦が、  
クチコミと足をたよりに、  
老後のついのすみかの情報を集めました。  
自立の目で見てたしかめて、  
老後生活を自分で設計する。  
「わいふ」たちの旺盛な自立精神に乾杯、!

―推せんの言葉 樋口恵子

シリーズ〈女・いま生きる〉

## 女性経営者の時代

小松満貴子編著

今、女性経営者の増加率は、男性経営者の増加率をしのぐようになった。  
日本の社会の中で、彼女たちはこのようにして経営者たりえたのか。  
女性経営者の行動原理と人間像を、具体的な調査やインタビューを通  
して、興味深く浮き彫りにする。

定価2000円

小川津根子・ききて  
夢しごと

田中千代の世界

デザイナー生活50余年。服飾デザイナーの草分けとして  
日本に洋服をひろめ、今なお第一線で活躍する田中千代  
。その人の持つあかるさ、豊かさ、インスピレーションの  
会話のあちこちに弾け跳ぶ。自然にのびやかに、女だけ  
の枠にはまらない人生は、なんとも爽快である。

定価1300円

佐々木静子著

もえる口口

わたし自身の暦

戦後、法律家になりたいという意志を固め、妻として母  
として精いっぱい生きながら夢を実現させた女性弁護士  
の半生。  
7回に及ぶ「八海事件」の公判を弁護団の裏方に徹し、ひ  
たむきに活動した記録が読む者の心を打つ。

定価1500円

定価 四五〇円